

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第25集

し 清 みず 水 遺 跡

1991

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

西尾市は三河山地に発する矢作川下流、西三河平野南部に位置し、南は三河湾に面しています。こののどかな田園風景の広がる市域にも各所に古来の人々の生活の跡が地中に残されております。現在は水田となっていますが古くは海であった低地に面する南部の洪積台地上には縄文時代の貝塚である枯木宮貝塚を始め中世に至るまでの貝塚が点在し、東部の低地には弥生時代の集落遺跡である岡島遺跡が、東辺の山地帯には多数の古墳群が、市街の中心部には西尾城跡があり、それは旧石器時代から近世に至る様々なものであります。さらに近年の激しい開発に伴う考古学的な調査によっていままで知られていなかった事実が次第に明かになってきております。

今回の清水遺跡の調査は、矢作川に掛かる中畑橋の橋梁掛け替えに伴う県道付け替えによって、従来「清水貝塚」と呼ばれていた遺跡の近辺に県道が建設されることによるものであります。この結果弥生時代から平安時代にかけての製塩土器が出土するなど、縄文時代前期から近世までの遺構・遺物が検出され、この地域の歴史に新たな知見を加えることができたものと考えます。

調査にあたり愛知県教育委員会の御指導、並びに地元住民の方々と西尾市教育委員会をはじめとする諸機関の格別の御協力を頂きましたことに深く感謝申し上げます。

本書が、地域史研究や埋蔵文化財に対する御理解の一助ともなれば幸いです。

平成3年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 松川 誠次

例 言

1. 本書は、愛知県西尾市中畑町字清水に所在する清水遺跡（県遺跡番号55049 旧遺跡名 清水貝塚）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、愛知県土木部の行っている矢作川中畑橋の掛け替えによる県道平坂・福清線の付け替え工事に伴うもので、愛知県教育委員会を通じて県土木部の委託を受け（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、平成1年11月から平成2年3月までである。
4. 調査担当者は、福岡晃彦・山田基・酒井俊彦・山口昌直である。
5. 調査に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財課 愛知県土木部 西尾市教育委員会
6. 遺物整理、製図については次の方々の協力を得た。
阿部小百合・枝廣千代子・古橋佳子・尾崎和代・高須久江・多田富代
中村知世・松本純子・山口妙子・和田由美子（敬称略）
7. 本書執筆は、森勇一・酒井俊彦・伊藤隆彦が担当し、文責は各文末に記す。
編集は、酒井俊彦が行った。
8. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。
9. 調査記録、出土遺物は、（財）愛知県埋蔵文化財センターが保管する。
10. 報告書をまとめるにあたり、松井直樹（西尾市教育委員会）・小池 孝（宮田村教育委員会）・岩瀬彰利（豊橋市美術館）・伊藤正人（名古屋市見晴台考古資料館）・山下勝年・奥川弘成（武豊町歴史民俗資料館）の方々の御協力を賜った。記して感謝する。（敬称略）

目 次

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査の経緯	1
2. 調査の経過	1
3. 位置と環境	2

第Ⅱ章 遺 構

1. 遺跡の構造	6
2. A a 区	8
3. A b 区	11
4. B a 区	12
5. B b 区・C 区	12

第Ⅲ章 遺 物

1. 縄文時代	16
2. 弥生時代	18
3. 古墳時代	19
4. 平安時代	19
5. 室町時代～江戸時代	21

第Ⅳ章 自然科学的分析

遺跡立地環境	24
--------	----

第Ⅴ章 考 察

I 縄文時代前期土器について	32
II 清水遺跡出土の製塩土器	37

第Ⅵ章 まとめ	43
---------	----

図版

1. A a区遺構図
2. A b区遺構図
3. B a区遺構図
4. B b区遺構図
5. C区遺構図
6. 出土遺物(1)
7. 出土遺物(2)
8. 出土遺物(3)
9. 出土遺物(4)
10. 出土遺物(5)
11. 出土遺物(6)
12. 出土遺物(7)
13. 出土遺物(8)
14. 出土遺物(9)
15. 出土遺物(10)
16. 出土遺物(11)
17. 出土遺物(12)
18. 出土遺物(13)
19. 出土遺物(14)
20. 出土遺物(15)
21. 出土遺物(16)
22. 出土遺物(17)
23. 出土遺物(18)
24. 出土遺物(19)
25. 出土遺物(20)
26. 出土遺物(21)
27. 出土遺物(22)
28. 出土遺物(23)
29. 遺跡遠景他
30. 調査区全景(1)
31. 調査区全景(2)
32. 遺構他(1)
33. 遺構他(2)
34. 遺構他(3)
35. 遺構他(4)
36. 遺構他(5)
37. 遺構他(6)
38. 縄文土器(1)
39. 縄文土器(2)
40. 縄文土器(3)
41. 縄文土器(4)
42. 弥生時代・古墳時代
43. 平安時代製塩土器
44. 中世(1)
45. 中世(2)
46. 近世

挿図

- | | | | |
|------------------------|----|---------------------------|----|
| 第1図 調査日程…………… | 1 | 第13図 S K113 …………… | 12 |
| 第2図 調査区位置図…………… | 2 | 第14図 S K073 断面図…………… | 13 |
| 第3図 周辺地質図…………… | 3 | 第15図 C b区遺構平面図…………… | 13 |
| 第4図 遺跡位置図…………… | 4 | 第16図 S K066・067・068 …………… | 13 |
| 第5図 遺跡周辺図…………… | 5 | 第17図 S D02・S K063他 …………… | 14 |
| 第6図 地形概念図…………… | 7 | 第18図 分析資料採取位置…………… | 24 |
| 第7図 遺跡立地図…………… | 8 | 第19図 清水遺跡模式断面図…………… | 25 |
| 第8図 I－II方向断面概念図…………… | 9 | 第20図 分析資料採取層準…………… | 25 |
| 第9図 III－IV方向断面概念図…………… | 9 | 第21図 歪度－淘汰度分布図…………… | 27 |
| 第10図 I－III方向層序概念図…………… | 9 | 第22図 珪藻遺骸の顕微鏡写真…………… | 31 |
| 第11図 S D01…………… | 10 | 第23図 製塩土器脚部法量(1)…………… | 39 |
| 第12図 B a区南壁断面図…………… | 11 | 第24図 製塩土器脚部法量(2)…………… | 39 |

表

- | | | | |
|-----------------|----|------------------|----|
| 第1表 粒度分析結果…………… | 27 | 第2表 珪藻遺骸リスト…………… | 29 |
|-----------------|----|------------------|----|

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査の経緯

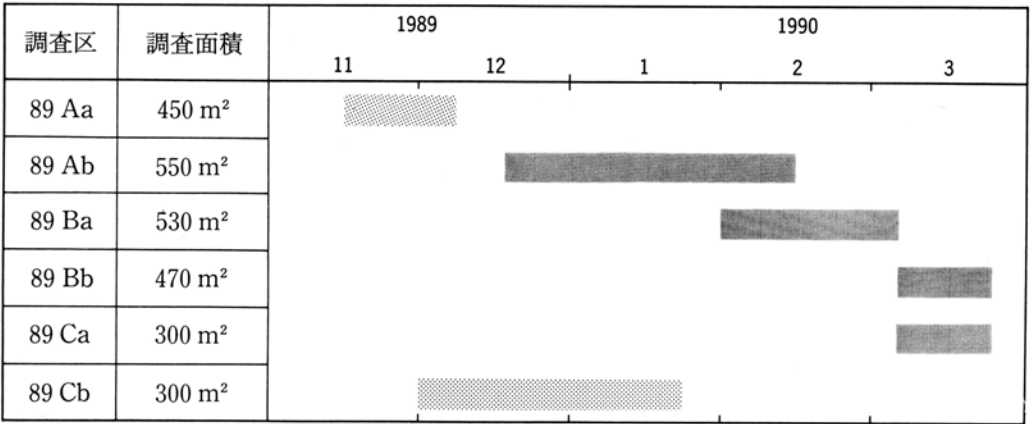
清水遺跡（県遺跡番号55049）は、愛知県西尾市中畑町字清水を中心とした地区に所在する。この遺跡は、当埋蔵文化財センターの調査以前は「清水貝塚」として昭和20年代よりその存在を知られている。昭和25年及び31年に南山大学人類学研究所によって調査がなされ、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺構、遺物が検出されている。

愛知県土木部は、西尾市と碧南市の境界である矢作川にかかり、県道平坂・福清水線につながる中畑橋を下流に掛け替えるのに伴って県道を付け替え、新たに平坂福清水線と中畑本町線を建設することとなった。この道路建設予定地は、南山大学の発掘調査地区に近接し、道路用地内に遺跡が存在することが予想された。このため、遺跡範囲を確認する目的で愛知県教育委員会は道路用地内において昭和63年12月に試掘調査を行い、この結果南山大学の調査地区の西側の沖積面において平安時代の遺物包含層を、若干距離が離れた東側の碧南台地直下の沖積面において縄文時代前期の遺物包含層を確認した。これにより従来考えられていた範囲より遺跡は広がり、碧海台地上にも遺跡が存在することが予想されるに至った。

今回の調査は、県教育委員会を通じて県土木部からの委託を受け、（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施したものである。なお遺跡名を「清水遺跡」に変更したのは、遺跡範囲は従来考えられていたものより広く貝塚を伴うのは部分的であり、また、その性格や遺跡としての範囲も異なる部分も調査の対象としたため本来は全くの別名を付けるべき調査区があるが、これまでの研究史上の便宜を考えたためである。

2. 調査の経過

調査区は、試掘調査結果に基づいて県道平坂福清水線用地内にA区、中畑本町線用地内にB・C区を設定した(第2図)。A区は、発掘作業に伴う排土の関係からAa区とAb区



山田 基 酒井俊彦 山口昌直
酒井俊彦 山口昌直

第1図 調査日程

に分割した。B区では、地形の制約から比高約4mの碧海台地の崖面を挟んで沖積面にB a区を、台地上にB b区を設定した。C区は、やはり排土の関係からC a区とC b区に分割した。A区とB a区は沖積地に立地し、湧水が激しいために地下水を汲み上げるウェルポイントを使用して調査を行った。

調査は平成1年10月より準備を開始し、11月より発掘調査を実施、翌年3月に終了した。総調査面積は2600㎡で、6区画の調査区各々の面積・調査期間は第1図のとおりである。また、遺跡の地形環境を知るため、3月下旬に中畑本町線内において二つの県道用地がT字状に交差する地点から碧海台地方向に10m長の連続する4本のトレンチをあげ、土層観察を行った。

3. 位置と環境

清水遺跡の所在する西尾市は、三河平野南部に位置する。南は三河湾に面し、北と西は矢作川に、東部は山地によって画される。市域の北西部から西部にかけては碧海台地と呼ばれる洪積台地が延び、東辺は美濃三河山地の南端の山地帯である(第3図)。この台地と山地帯の間の市の中央部には北東から南にかけて、南流する旧矢作川に沿って沖積低地が広がる。碧海台地は若干の起伏はあるが平坦な地形で、北から南に緩やかに傾斜し西尾市南部において数mの標高となり、沖積地に埋没する。

遺跡立地 遺跡は、矢作川河口より約5km上流の右岸に位置する(第5図)。ここで碧海台地の縁辺は西から東方向に向かっていったものがほぼ南北方向に直角に曲り、南へ直線的に延びる。

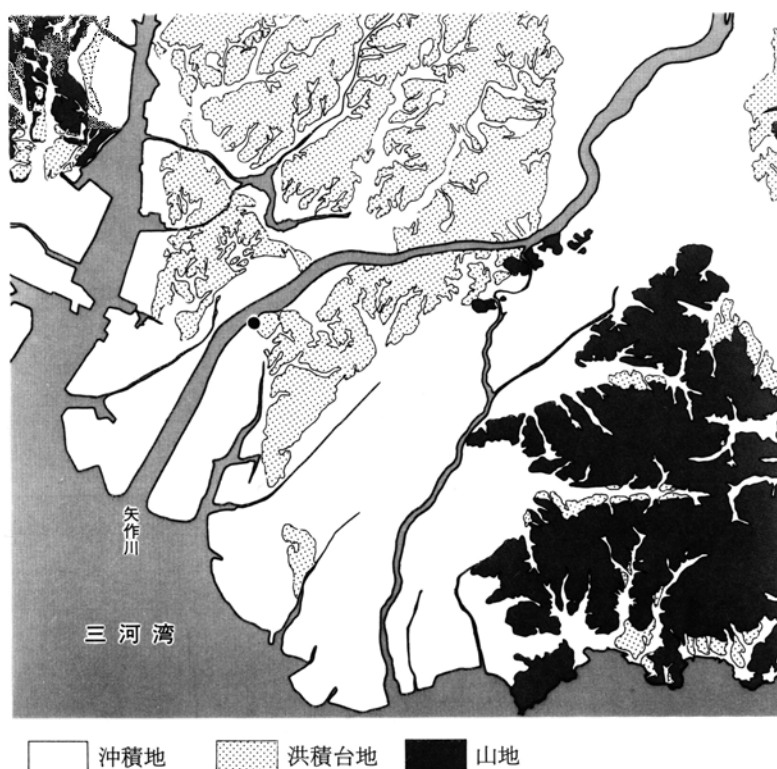


第2図 調査区位置図(1/5000)

遺跡の位置する地点はこの屈曲点及びその南側の部分である。矢作川は、遺跡の北側を台地の東西方向の縁辺に接して流れている。遺跡の西方向から南方向にかけては平坦な沖積地が広がり、矢作川の河口まで主に水田地帯となっている。この沖積地は17世紀初頭の矢作川の流路変更によって形成されたものである。すなわち、現在の志貴野町から米津町にかけての碧海台地を開鑿し、台地の東側に広がる沖積低地を南流していた矢作川を台地に囲まれた湾内に流れ込むように河道を変更した。このため、大河川の流入がなく河川の堆積作用があまりない湾に矢作川が人工的に流れ込むようになったため湾の奥より急速に堆積が始まり、17世紀以降湾内は陸地化した。さらに西尾市の碧海台地と対岸の碧南市の台地に挟まれた海域も現矢作川河口に向かって新田開発が進み、順次陸地化していったとされる。このようなことから中世以前の時期は油ヶ淵から米津町にかけての沖積地には海域が入り込んで狭い湾になっており、清水遺跡の立地する碧海台地の南北方向の縁辺は直接三河湾に接し、東西方向の縁辺はこの湾に面していたと考えられる。ゆえに当時、遺跡は湾の入口に突き出した台地の先端部分に位置し、台地部を除いた南方向から西・北方向の沖積地全体が海域に相当し、これに囲まれた状況であったと推測される。

歴史的環境

清水遺跡は中世以前は海域に接しており、時代による海水面の上昇下降などが遺跡の性格に大きく影響している。縄文時代前期前半の海進の時期には海水面は数m上昇し、西尾市の沖積地では内陸深く海域が入り込み、現海岸線より十数km入った地点に釜田貝塚が築かれる。この時期清水遺跡は、短時期であるが遺物包含層が形成される。また、時期は異なるが遺跡の位置する碧海台地の縁辺には、八王子貝塚、枯木宮貝塚といった縄文時代の

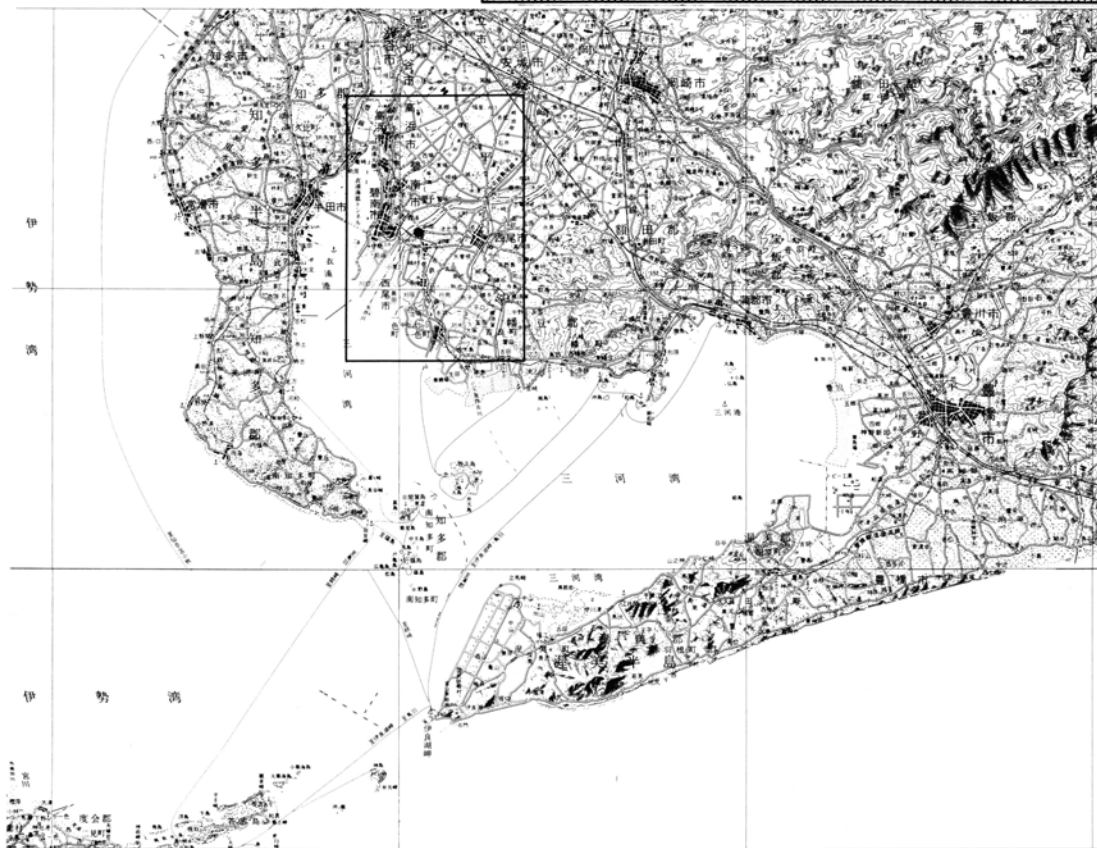
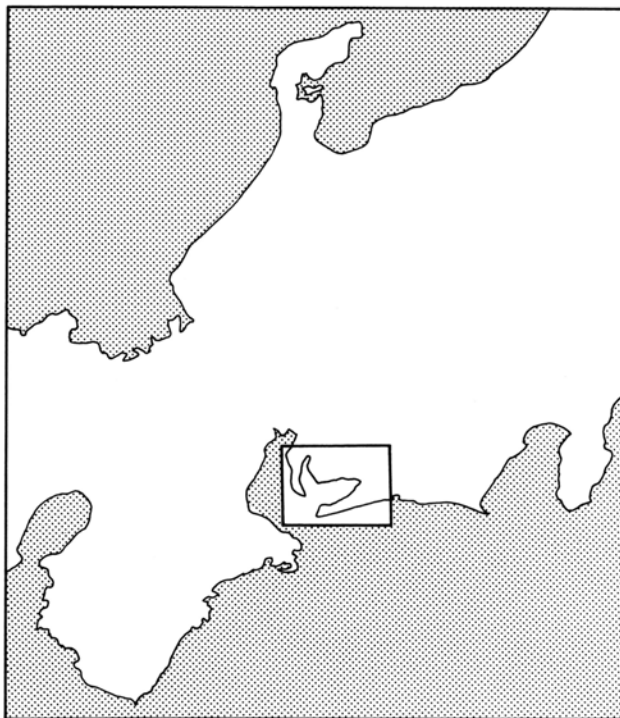


第3図 周辺地質図

貝塚が存在する。縄文時代前期以降の海退によって現在の海水準に近くなる過程においてその後形成される清水遺跡の砂堆の基盤層が堆積する。平安時代前半に形成された砂堆上で土器製塩が比較的大きな規模で行われ、平安時代前期から中期にかけての遺物包含層が形成される。古代・中世を通じて旧矢作川流域は河川の堆積作用によって次第に沖積地が拡大して海岸線は三河湾に向かって前進するが、この過程において貝類の生息に適した水域環境が

生まれ、中世末期に西尾市南部の碧海台地の縁辺部には一連の貝塚が形成される(第5図)。清水遺跡においても同時期の貝殻の堆積層・廃棄土坑が存在する。慶長十年(1605)の河道変更によって清水遺跡の位置する台地の近辺を流れるようになった矢作川の堆積作用を利用して、江戸時代には台地の前面の海域においては新田開発が急速に進展する。このため清水遺跡の立地する碧海台地の南北方向の縁辺から海域は離れ、江戸時代中期には台地上に集落が形成されるが、この時期には直接海とは関係のない状況となり現在のような立地環境になる。

(酒井俊彦)



第4図 遺跡位置図(1/500000)

※この図は、国土地理院発行の1/20万地勢図「名古屋」・「豊橋」・「伊勢」・「伊良湖岬」を使用したものである。



1. 清水遺跡
2. 王江遺跡
3. 研屋遺跡
4. 藪田遺跡
5. 乙立貝塚
6. 坊領貝塚
7. 吹上貝塚
8. 東端貝塚
9. 小山貝塚
10. 小山東貝塚
11. 西連寺貝塚
12. 八剣貝塚
13. 寺下貝塚
14. 天白貝塚
15. 道城貝塚
16. 貝戸貝塚
17. 南山貝塚
18. 中根山貝塚
19. 中本郷貝塚
20. 城島貝塚
21. 那知遺跡
22. 上人貝塚(A)
23. 上人貝塚(B・C)
24. 中松貝塚
25. 野田貝塚
26. 築山貝塚
27. 出口貝塚
28. 各畑貝塚
29. 才勝遺跡
30. 玉津浦貝塚
31. 神有貝塚
32. 荒井貝塚
33. 徳愛院裏貝塚
34. 八王子貝塚
35. ハッ家貝塚
36. 浜屋敷貝塚
37. 小間貝塚
38. 正念寺貝塚
39. 西尾城跡
40. 住崎遺跡
41. 国森遺跡
42. 北野第1号遺跡
43. 北野第2号遺跡
44. 東出遺跡
45. 屋下遺跡
46. 熊子第1・2号遺跡
47. 熊子第3号遺跡
48. 熊野神社遺跡
49. 郷遺跡
50. 円入庵遺跡
51. 落遺跡
52. 枯木宮貝塚
53. 西脇貝塚
54. 宮東貝塚
55. 刈宿古墳群
56. 出口貝塚
57. ゴリンサン塚
58. 赤羽郷西貝塚

■中・近世の貝塚

第5図 遺跡周辺図 (1/50000)

※この図は、国土地理院発行1/25,000の地形図「半田」・「師崎」・「西尾」・「吉田」を使用したものである。

第II章 遺 構

1. 遺跡の構造

遺跡立地 清水遺跡は、中世以前は台地に入り込んだ湾の入口に突き出した碧海台地の半島状の地形の先端に位置し、洪積台地部以外は海域であった。遺跡付近において、碧海台地の縁辺は東西方向から南北方向へと全体としてはほぼ直角に方向を変換するが、小地形として南北方向の縁辺は屈曲点からほぼ南東方向に向かいB a区まで入り込み、湾状の地形を形成している（第6図）。この地形は、湾の入口にあたる部分の幅が約200m、奥行きが約90mである。台地と沖積地の境界は、比高約4mの崖面になっている。しかし、屈曲点の先端部に近いA b区の北端から約100mにわたる碧海台地の南東方向の縁辺は崖面を形成せず緩傾斜となっており、A a区南西側の道路付近で沖積面と同じ標高になる。この緩傾斜地から延びるかたちで、この道路の台地側に沿って湾の入口の線上に幅約50m、高さ数十cmの砂質の微高地が存在する。これは、湾の他の一方の入口の端である南の端に接続する。この緩傾斜地及び微高地は現在宅地及び畑地となっている。この微高地と碧海台地に囲まれた区域は、崖面直下からの湧水のために湿地となっている。微高地の西及び南方向は平坦な沖積地であり、ほぼ同標高で矢作川河口まで連続する。碧海台地上の標高は約6m、微高地は約1.5mである。この碧海台地の湾入部の入口部分を塞ぐかたちで形成されている緩傾斜地及び、微高地は中世以前にこの地域が海域に面していた時期に形成された砂堆である（第7図）。各調査区の設定と地形との対応については、A a区は砂堆の海側の縁辺に沿った部分に位置する。A b区は同じ縁辺に沿った部分にあるが、北端は碧海台地の縁辺にかかる。B a区は沖積地の砂堆に囲まれた低湿地部分で、東端は碧海台地の崖面直下である。B b区は碧海台地の縁辺部で、西端は崖面にかかる。C区は、碧海台地上である。また、B区のトレンチ（BT01～04）は、低湿地部分の西辺中央から砂堆東斜面および砂堆中央に設定したものである。

遺跡層序 湾入部中央の砂堆から低湿地、碧海台地方向（第7図I－II）の層序において、基盤となるのは砂礫土からなる洪積層の碧海層である（第8図）。碧海層は台地上では標高約6m前後の平坦面をなす。台地縁辺では比高約5mの崖面をなし、B a区において崖面直下の沖積面下標高約+0.2mで数m幅の小平坦面をなす。この面からやや急傾斜になったあと、碧海台地を離れ海域方向に向かうに従い緩やかに傾斜して高度をさげ、A a区の砂堆下部では－5m以下となる。沖積面では崖面直下の碧海層の小平坦面上に厚さ約1.6mの白色砂層があり、B a区内の碧海層上には存在したが、BT01～04付近では確認していない。この砂層上面にはB a区で約2mほどの粗砂を主とし、シルトが混じり部分的に卓越する青灰色土層が堆積する。小平坦面上の白色砂層の上面の標高は約+1mであり、基盤面が海域方向に下がるに伴って高度を下げるが、青灰色土層の上面は小平坦面上の白色砂層の上面の標高と同じであり、海域方向に向かってほぼ水平を保つ。青灰色土層は、白色砂層の高度を下げる部分を充填するかたちで堆積しており、碧海台地より約50m離れた地点に形成

された砂堆下部付近では5 m以上の堆積となる。青灰色土層の上面はこの地点より海域側に緩やかに傾斜し、この上層に堆積している砂堆の砂層の下面の標高は台地側が高く約+0.8m、調査によって確認できた海域側の最低高で約-0.8mである。砂堆上面の標高は+1 m前後である。なお、砂堆の海域側の末端の状況は確認していない。

砂堆が延びる方向に対して平行方向の砂堆中央部付近の断面（第7図Ⅰ－Ⅲ）の層序については、基盤となる沖積面下の洪積層は標高-5 m以下となる。砂堆の基底は青灰色土層であり、その上面は標高-0.5～-1 mである（第10図）。A a区の層序では、青灰色土層の上層に白色粗砂層が1 m弱の厚さでほぼ水平に堆積し、その上層に明黄褐色粗砂層、明黄褐色細砂層が同様に堆積する。白色粗砂層の上面で標高約+0.5m、明黄褐色細砂層の上面で+1.4mである。A b区の南端部分の層序はほぼ同じであり、BT01においても全体に標高はさがるものの基本的に同一であり、砂層の水平堆積層がこの方向に広がっている。

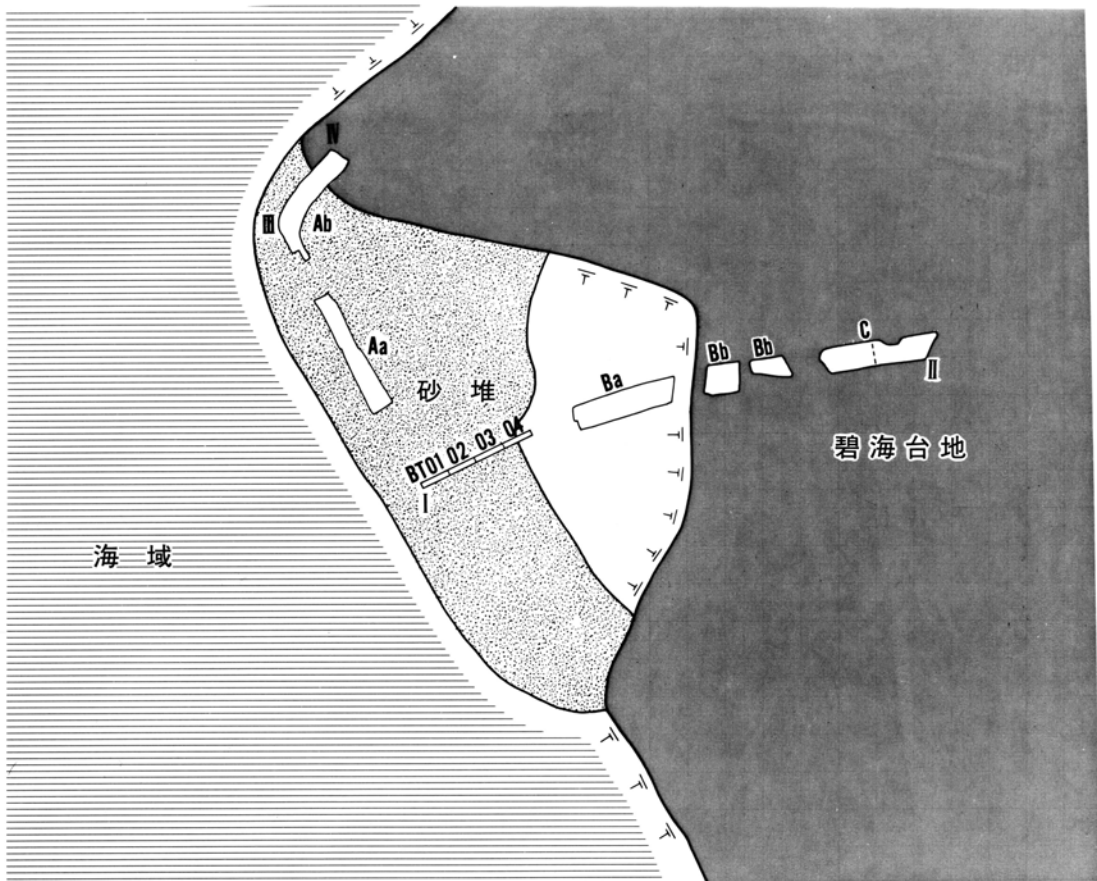


第6図 地形概念図 (1/2500)

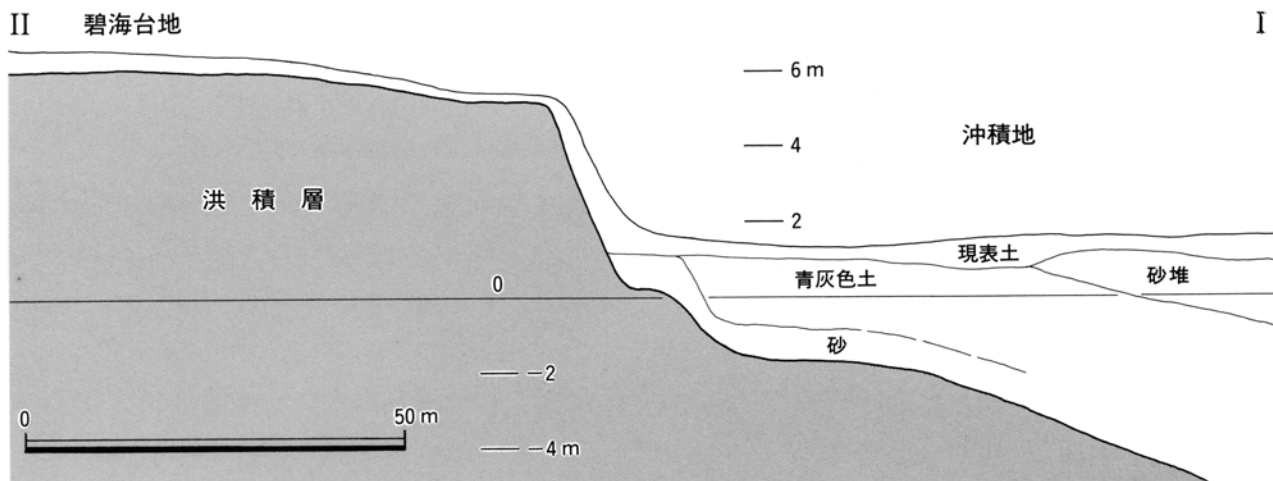
砂堆が形成される基点となる湾入部の入口部分の北の端の砂堆から碧海台地方向（第7図Ⅲ－Ⅳ）については、基盤は粘土を主体としたシルト、砂を含む洪積層である（第9図）。台地部の洪積層の上面は、Ⅰ－Ⅱ方向より低く標高約2mで、沖積面との間の崖面の比高は約1.5mである。洪積層の上面は崖面直下で標高約0.5mで、海域方向に緩やかに傾斜し、これより約6m離れた地点で上層に青灰色土層が堆積するようになる。青灰色土層の上面はこれより海域方向にほぼ標高0mの水平面となり、洪積層の上面の標高が低くなるに伴い層が厚くなる。洪積層と青灰色土層との間にはⅠ－Ⅱ方向の白色砂層は存在しない。青灰色土層の上層にはⅠ－Ⅲ方向の白色粗砂層と明黄褐色粗砂層に相当する厚さ約1mの明黄褐色粗砂層がある。この上層はⅠ－Ⅲ方向と同様に明黄褐色細砂層で、この上面の標高は約+1.8mである。明黄褐色粗砂層は崖面より約11m離れた位置から碧海台地方向に向かって薄くなり、上層の明黄褐色細砂層に変換する。明黄褐色細砂層は最大で1.5mの厚さで、崖面直下の青灰色土層の存在しない部分では薄い黒青色土層を挟んで洪積層上に堆積する。この細砂層の上層は、近世以降の包含層および現表土である。

2. Aa区

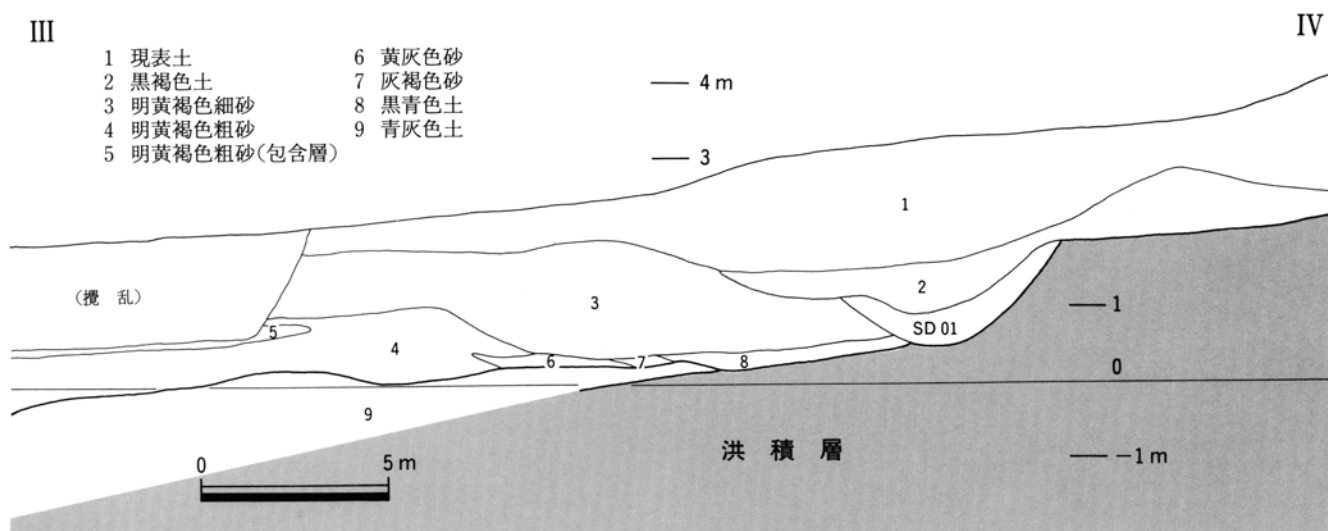
基本層序 基本層序は、遺跡の構造で記したように上層からⅠ：褐色土層（表土） Ⅱ：明黄褐色細砂層 Ⅲ：明黄褐色粗砂層 Ⅳ：白色粗砂層 Ⅴ：青灰色土層 であり、基盤として沖積面下5m以下に碧海台地から続く洪積層が存在する（第10図）。



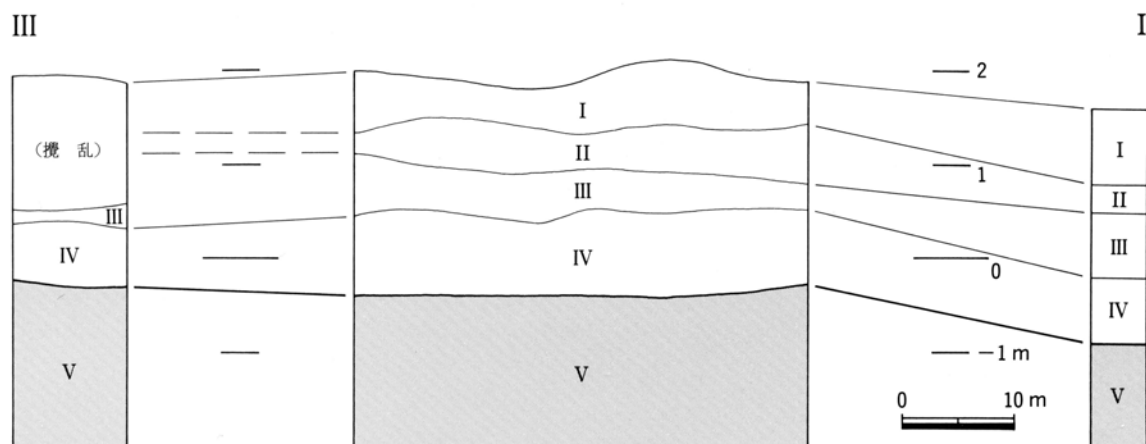
第7図 遺跡立地図



第8图 I—II方向断面概念图



第9图 III—IV方向断面概念图

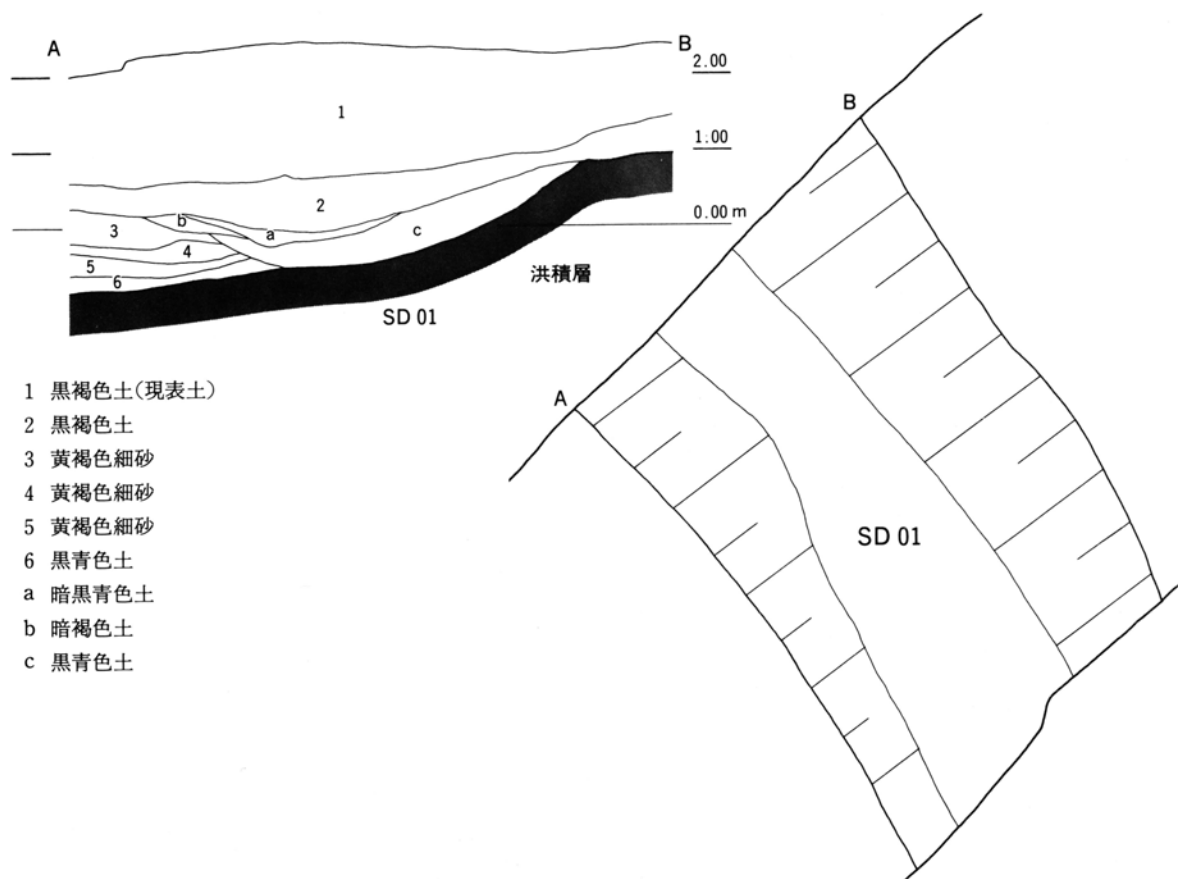


第10图 I—III方向层序概念图

I 現表土
II 明黄褐色細砂
III 明黄褐色粗砂
IV 白色粗砂
V 青灰色土

I層は、旧耕作土である。II層は、粒度の揃った細砂層で、標高約+0.9m以上の砂堆の上部に堆積したものである。淘汰が良い砂であることから海水の堆積作用によるものではなく、陸性の風成層で無遺物層である。III層は、粗砂を主体として細礫及び細砂を含む砂層で約+0.5m以上に堆積している。海水の水流の影響を受けて堆積した旧汀線の淘汰不良の砂層である。平安時代前半の遺物包含層である。IV層は、粗砂を主体として細砂を含む砂層である。基本的には無遺物層であるが、縄文時代から古墳時代初期の遺物を極少量含む。色調及び淘汰の状況から海水面下において堆積したものである。下面は、-0.4mでV層に接する。V層は、遺跡の構造で記したように清水遺跡の存在する位置の沖積面下に広がる層で、砂堆の基層である。無遺物層であり、砂堆の砂層とは色調、粒度とも異なり、シルト・粘土を含む細砂・粗砂主体の土質の不安定な層である。

A a区は、砂堆の形成以前は海域であり、砂堆の形成以後中世以前は三河湾に面した汀線に近接した位置にある。ゆえに中世以前は遺構の形成可能な地点ではなく、遺構は検出されなかった。III層からは、平安時代9世紀から11世紀にかけての製塩土器が多量に出土した。全て破片で粗砂と混合するかたちで顕著な集中地点もなく、調査区全体で検出されている。製塩に伴う遺構は検出されておらず、これに伴う遺物も出土していないことや製塩土器の出土状態及び調査区のこの時期の地形的な位置から、製塩はこの地点で行われてはおらず、碧海台地方の砂堆の緩傾斜地で使用されたものが流入して旧汀線の砂層中に



第11図 SD 01 (1/100)

堆積したものと考えられる。その他、同層位から平安時代前半の灰釉系陶器、土師器甕が少量出土している。

3. A b区

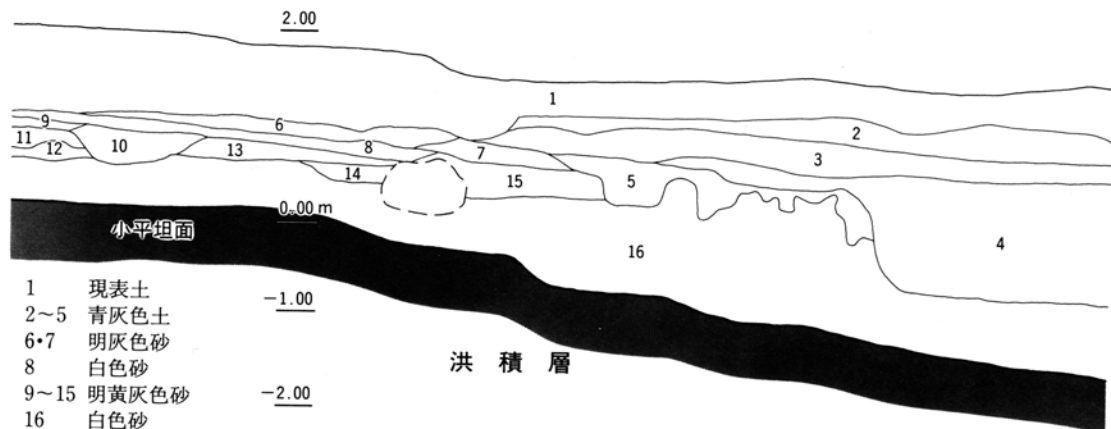
基本層序 基本層序は、砂堆から碧海台地方向（第7図Ⅲ－Ⅳ）に関しては遺跡の構造で記したように沖積面については上層からⅠ：褐色土層（現表土） Ⅱ：明黄褐色細砂層 Ⅲ：明黄褐色粗砂層 Ⅳ：青灰色土層で、台地崖面直下ではⅢ層がなく、Ⅱ層とⅣ層の間に薄い黒青色土層が存在する（第9図）。台地上では、Ⅰ：褐色土層（現表土） Ⅱ：黒褐色土層 Ⅲ：黄灰色土層（洪積層）である。

沖積面のⅠ層は最大1.5mの厚さで昭和期前半に養鰻場によって攪乱された層である。Ⅱ層はA a区のⅡ層と同じであり、粒度の揃った淘汰の良い細砂層で、砂堆上部の陸成層である。無遺物層である。Ⅲ層はA a区のⅢ・Ⅳ層に対応するものである。A a区のⅢ層に当る層は調査区南部で明確になり、A a区のⅣ層にあたる層と分離するが、その上部の大部分は近年の攪乱を受けて失われている。この層より、平安時代の製塩土器が少量出土している。またA a区のⅣ層にあたる層より弥生時代の製塩土器などが出土している。Ⅳ層は、A a区と同じく遺跡の構造で記した砂堆の基層であり、無遺物層である。碧海台地崖面直下の黒青色土層は0.2mほどの厚さで洪積層直上に堆積しているが、崖面より8mほどでなくなり、これに続いてⅡ層の細砂層とⅣ層の青灰色土層の間に灰褐色土層、黄灰色土層が同様の厚さで堆積している。黒青色土層・灰褐色土層・黄灰色土層は古墳時代の遺物包含層である。黒青色土層からは、古墳時代後半の製塩土器が少量出土している。台地上のⅡ層は近世の包含層である。

製塩土器 ている。またA a区のⅣ層にあたる層より弥生時代の製塩土器などが出土している。Ⅳ層は、A a区と同じく遺跡の構造で記した砂堆の基層であり、無遺物層である。碧海台地崖面直下の黒青色土層は0.2mほどの厚さで洪積層直上に堆積しているが、崖面より8mほどでなくなり、これに続いてⅡ層の細砂層とⅣ層の青灰色土層の間に灰褐色土層、黄灰色土層が同様の厚さで堆積している。黒青色土層・灰褐色土層・黄灰色土層は古墳時代の遺物包含層である。黒青色土層からは、古墳時代後半の製塩土器が少量出土している。台地上のⅡ層は近世の包含層である。

遺構 遺構は溝が1条検出された。

S B01（第11図） 台地の端に沿って台地と砂堆の境界に掘削された溝である。検出面で幅約5m、深さ最大約1.4mである。両側面は緩い傾斜であり、上層からは平安時代末の灰釉系陶器が出土し、下層からは弥生時代末から奈良時代にかけての遺物が出土している。平安時代末の溝と考えられるが、性格は不明である。



第12図 B a区南壁断面図 (1/80)

4. B a 区

基本層序 基本層序は、遺跡の構造の砂堆から碧海台地方向（I－II）の層序で概略を記したように調査区東端の台地崖面直下の小平坦面においては上層から I：黒褐色土層（現表土） II：白色砂層 III：黄褐色砂礫層（洪積層）である（第8図）。小平坦面から海域方向にはなれた部分では、I：黒褐色土層（現表土） II：青灰色土層 III：白色砂層 IV：黄褐色砂礫層（洪積層）で、II層が小平坦面上の層序のI層とII層の間にはいる（第12図）。

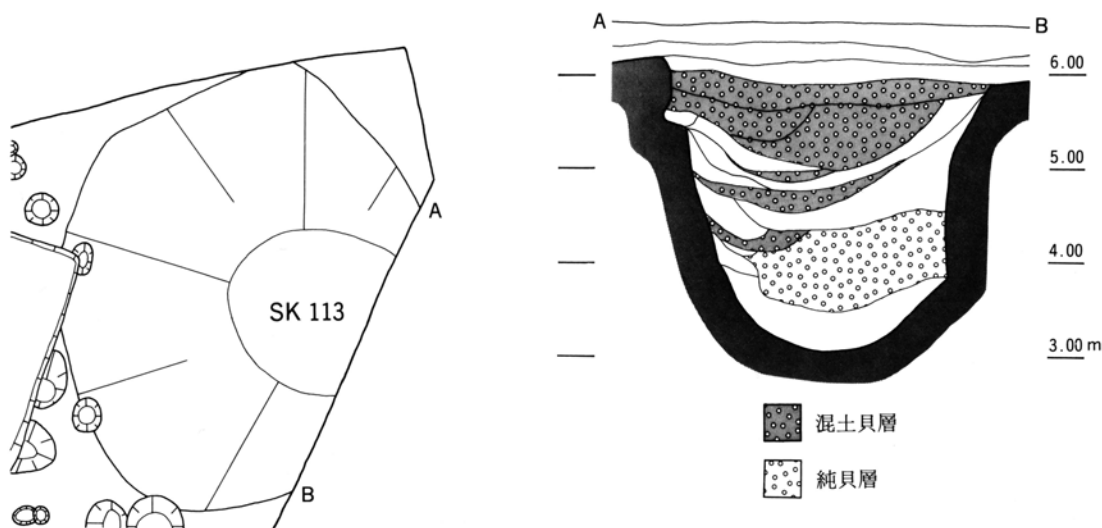
I層は、現在の湿地の堆積物である。その下面は標高約+1mで、台地から50m離れた旧砂堆まで水平に広がる。基盤である洪積層は崖面直下から約7mまではほぼ水平な面をなし、海域側へ3段ほどの階段状の平坦面を形成したのち緩やかに傾斜して高度を下げる。白色砂層はこれに対応して小平坦面上では1.6mほどの厚さで水平に堆積し、基盤が下がるに従い厚さを約0.8mに減じながら上面の高度を下げる。I層の下面は小平坦面上では標高+1.1mで白色砂層と接するがその下面はこの高度のまま水平であり、白色砂層の上面の高度が下がるとその間に青灰色土層が入り、海域側に白色砂層の上面が下がるに連れ層の厚さが増す。小平坦面の端部において高度を下げ始める部分における白色砂層と青灰色土層の境界面は漸移的で不安定である。青灰色土層は、シルトから粗砂まで含むものであり、部分によってシルト、粗砂がそれぞれ多くの割合を占める不均一な層である。

白色砂層は、小平坦面上では細かく2層に別れる。上層は白色から明灰色の細砂を主体とした粗砂を含む0.3m～0.6mの厚さの砂層である。下層は明黄灰色の粗砂を主体とした厚さ約0.8mの層で下面は洪積層に接する。上層は遺物包含層であり、縄文時代前期前葉の清水ノ上式土器が出土した。下層は無遺物層である。また、小平坦面上以外の白色砂層は無遺物層である。その他、青灰色土層と白色砂層から若干の植物遺体が検出された。

縄文土器

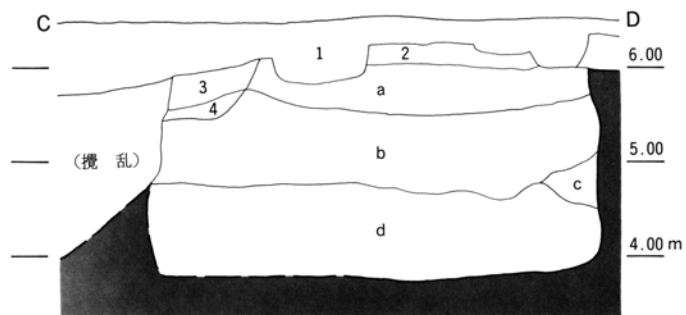
5. B b 区・C 区

B b 区及びC区（C a 区・C b 区）は碧海台地上にあり、同一の立地面であることから一括して記す。

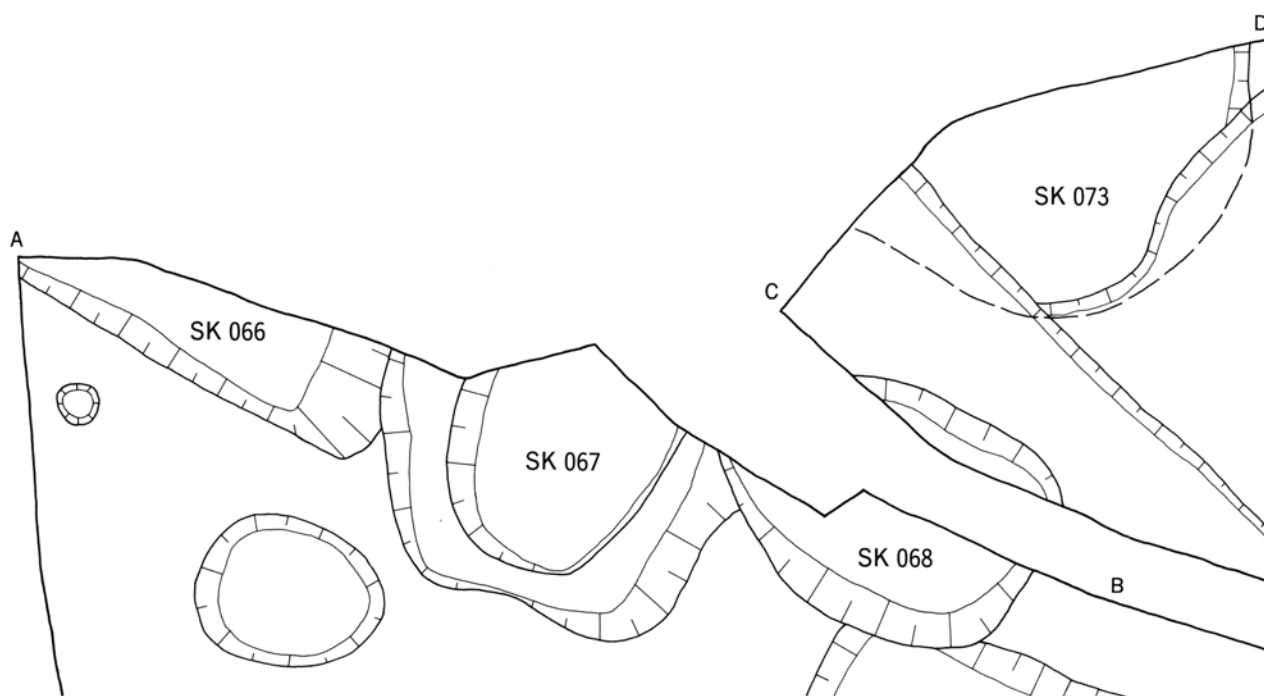


第13図 SK 113 (1/80)

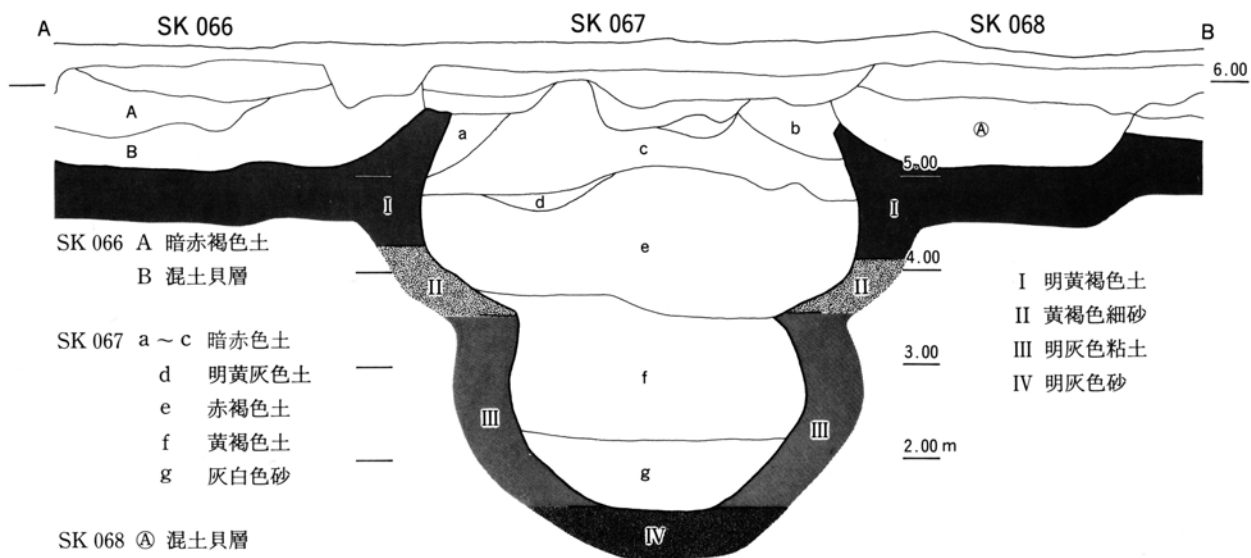
- 1 現表土
- 2~4 黒褐色土
- a 暗赤褐色土
- b 暗赤色土塊
- 黄褐色土塊
- 暗黄灰色土塊
- c 黄褐色土
- d 暗赤色土



第14図 SK 073断面図 (1/80)



第15図 C b区遺構平面図 (1/80)



第16図 SK 066・067・068断面図 (1/80)

基本層序 基本層序は、B b区ではⅠ：黒色土層（現表土） Ⅱ：明黄褐色砂層である。Ⅰ層は、厚さ0.2～0.4mである。Ⅱ層は、碧海台地の洪積層で部分的に砂礫土に変化する。B b区は碧海台地の縁辺に位置することから台地上に堆積した土砂は崖面に流れ、表土は薄く、直接洪積層にのる。調査区の標高は東端が6.3m、西端が5.5mであり、調査区の西部5分の1は碧海台地の崖面である。

C区では、Ⅰ：黒色土層（現表土） Ⅱ：赤褐色土層 Ⅲ：黄褐色砂礫土層である。C区は宅地で攪乱が著しく、層が一定しないがⅠ層は厚さ0.2～0.6mである。Ⅱ層は厚さ0.2mで西半には存在せず基盤に表土がのる部分がある。

遺構 遺構は、中世末から近世にかけての時期のものが検出され、出土遺物よりⅠ期：室町時代末（戦国期 16世紀） Ⅱ期：江戸時代中期（18世紀）の2時期のものが確認された。以下、各時期ごとに記す。

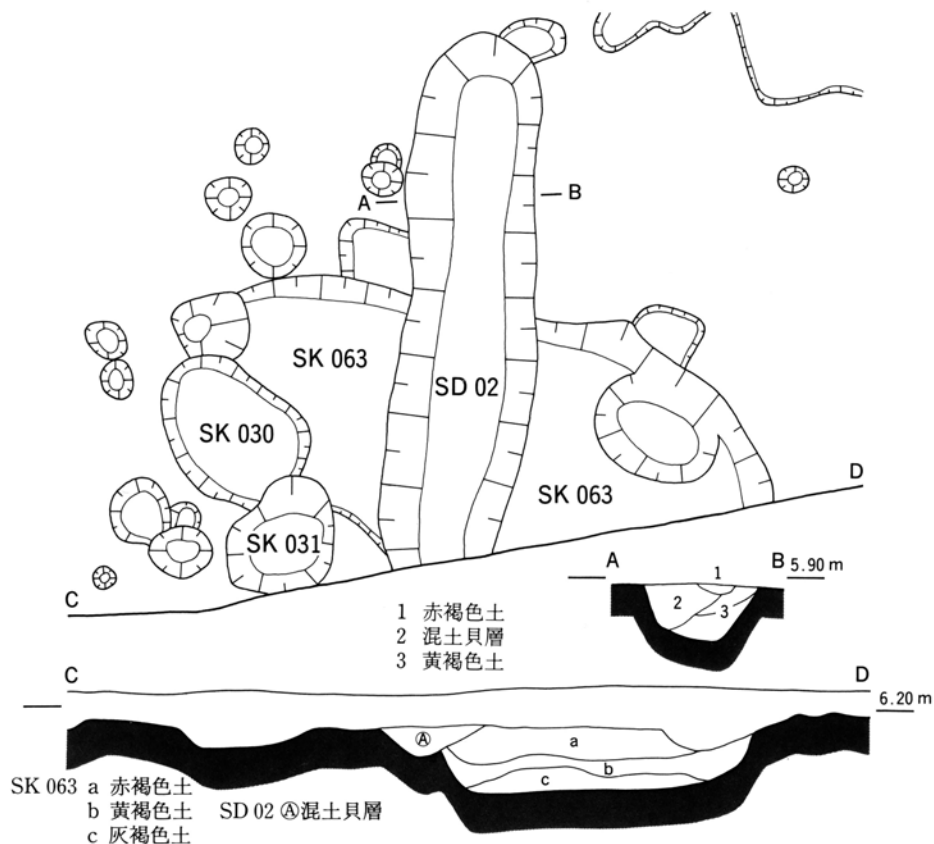
Ⅰ期

S K 063（第17図） 東西径約5.6m 深さ約0.8mの大形の土坑である。下層は破碎貝層、上層・中層は基盤の埋め戻しの埋土である。性格は不明である。遺物は、土師器皿、内耳鍋、播鉢等が少量出土している。

S K 066（第15図） 深さ約0.6mで径は不明である。埋土は完存の貝殻を含む破碎貝層で、貝殻の廃棄土坑である。遺物は内耳鍋、土師器皿、播鉢等が出土している。

粘土採掘坑

S K 067（第15図） 径約4m、深さ約4.3mの大形の土坑である。上部は、土坑の壁が若干



第17図 S D 02・S K 063他 (1/80)

オーバーハングして深さ約2.2mまで掘り下げ、張り出し部をつけて下部は同様に径を小さくして掘り下げる。上部は洪積層の砂礫層に対応し、砂層を挟んで下部は同じく洪積層の粘土層に対応する。埋土は、洪積層の砂礫土の埋め戻し土である。形状などから粘土の採掘坑と考えられる。遺物は、内耳鍋が多量に出土し、その他土師器皿、土錘等が出土している。

S K 068 (第15図) 短径約2.7m 深さ約0.7mである。埋土は完存の貝殻を含む混貝土層で、貝殻の廃棄土坑と考えられる。遺物は、内耳鍋等が少量出土している。

S K 069 短径約2.2m 深さ約0.8mである。埋土は、完存の貝殻を含む破碎貝層で貝殻の廃棄土坑である。遺物は、内耳鍋、羽釜型鍋が出土している。

S K 073 (第15図) 最大径約4.4m 深さ約2.2mの大形の土坑である。壁はややオーバーハングしてほぼ垂直であり、底面は平坦である。埋土は、洪積層の砂礫土の埋め戻し土である。形状、規模及び埋土からS K 067と同性格の粘土の採掘坑の上部の部分と考えられる。遺物は常滑製品の甕、鉢が出土している。

S K 113 (第13図) 径約4m 深さ約3.2mの大形の貝殻の廃棄土坑である。壁は垂直に近い状態で掘り込まれる。埋土は大きく3層に別れ、下層の純貝層と上層の混土破碎貝層の間に薄い土層が間層として入る。2回の貝採取時期の間に埋土が形成されたものと考えられる。遺物は、内耳鍋、羽釜型鍋が多量に出土し、その他常滑製品の鉢等が伴出している。

II期

S K 030 (第17図) 径約1.2m 深さ約0.3mである。埋土は、混土破碎貝層である。遺物は陶器椀、播鉢、内耳鍋等が出土している。貝殻の廃棄土坑である。

S K 031 (第17図) 最大径約1.3m 深さ約1.1mである。埋土は、完存の貝殻を含む混土破碎貝層である。遺物は各種陶器椀、鉢、土師器皿等が出土している。貝殻の廃棄土坑である。

S D 02 (第17図) 最大幅約1.5m 深さ約0.8mである。断面V字形ではほぼ南北に伸びるが南端は不明である。埋土は上層が混土破碎貝層、下層は砂礫土層である。遺物は各種陶器椀、内耳鍋等が出土している。性格は不明で溝を貝殻の廃棄に利用しているものと考えられる。

(酒井俊彦)

第Ⅲ章 遺物

調査区は地点によって遺跡の立地条件が相違し、検出された遺物も調査区によって時期・性格が異なる。出土遺物は、Ⅰ：縄文時代 Ⅱ：弥生時代 Ⅲ：古墳時代 Ⅳ：平安時代 Ⅴ：室町時代～江戸時代に大別される。以下、各時期ごとに遺物について記す。

1. 縄文時代 (図版 6～14)

縄文前期 この時代の遺物は、全て B a 区の洪積台地崖面直下の小平坦面上層砂層中より出土したものである。検出された土器は、第Ⅰ群：早期末 第Ⅱ群：前期前葉の 2 時期に細別される。

第Ⅰ群土器 (図版 14 205～212)

この時期の土器は、8 点検出された。いずれも口縁部あるいは口縁部に近い部分で、3～5 mm の薄い器壁の焼成の良い土器である。これらは、4～8 mm 幅の貼付け隆帯を口縁部に廻らす文様構成である。205 は、口唇部直下に刻目のある隆帯を廻らし、口唇部にも刻目をもつ。206・207 は、直線的な隆帯の部分、208・209 には直線状と波状の隆帯が認められる。210～212 は波状の隆帯で 211 は 3 条の隆帯が認められる部分である。206・211・212 は、隆帯上に条痕が施される。

第Ⅱ群土器 (図版 6～14)

この土器群が縄文土器のほとんどを占める。器形としては単純な形態の深鉢で、口縁部は平縁を基本として波状口縁が少ない割合で存在する。底部は丸底で、尖底に近い形態のものも存在する。器壁は 3～6 mm で薄く、文様は口縁部下数 cm 内に施される。器面調整は不明のものが大部分であるが、条痕によるものが多く、縄文が施されるものもわずかに存在する。この土器群は、文様構成から以下の 10 類に細分される。

1 類 (図版 6) アナグラ属の貝殻を原体として、腹縁の縦位の刺突を口縁部下数 cm 内に口縁に平行させて 3～4 段廻らすものである。口縁は平縁を基本とするが、波状口縁も存在する。(8) 口唇部には、文様の原体と同一と考えられる器具による刻目が施されるものが多い。(1～4・8・10・13) 器壁外面は、文様帯下部が条痕調整が施されるものもあるが、明確な調整はあまりない。1・8・10 は内面に横方向の条痕調整が施される。貝殻原体の刺突が密のもの(1～9) やや粗のもの(12～17) 押し引く様に施されるもの(10・11) がある。4・5 は同一個体で、内面にへら状器具による 1 条の横方向の爪形文列が施される。8 は、波頂部に焼成前の穿孔を有する。

2 類 (図版 7・8 18～59) 1 類と同様にアナグラ属の貝殻を原体として、腹縁の斜位の刺突を口縁部下数 cm 内に口縁に平行させて 3～4 段廻らすものである。口縁はほとんどが平縁であるが、波状口縁もある。(24) 刺突は、右下がり(18～24・42～59) を基本とするが、少数ながら左下がり(35～41) もある。刺突は一定の角度で等間隔に施されるが、不均一のものもある。(51～57) 器壁外面は、文様帯部分が条痕調整されることは少ない。18・19・59 は内面に横方向の条痕調整が施される。口唇部は、刻目のないもの(18～20)

押圧痕を有するもの (21) 斜方向の刻目 (22~24) 単純な刻目 (25~36) を有するものがある。31は内面の口唇部直下に沈線を1条廻らす。34は内面にも外面と同一の原体による刺突列を廻らす。37は口縁より押圧痕を有する隆帯を垂下させる。

3類 (図版8 60~62) 1・2類と同原体により右下がりや左下がりの斜位の刺突を口縁に対して平行に交互に廻らすことによって、横方向の羽状の刺突文を構成するものである。60は口唇部に刻目を有する。刺突列の段数、範囲は不明である。

4類 (図版8 63~79) ヘラ状の器具により口縁部下数cm内に斜位の爪形文状の連続刺突列を口縁に対して平行に3~4段廻らすものである。右下がりや左下がり (67・68) は少ない。刺突のやや密なもの (63~69) と粗なもの、細かい刺突と粗大な刺突 (71~76) のものなどがある。また、縦位に近い刺突 (70・79) もある。口縁は波状のもの (66) もあり、同一原体による口唇部に刻目を有するもの (63・64) がある。

5類 (図版9 80~82) 半截竹管によって連続する爪形文を施すものである。口縁部下数cm内に口縁に平行して3段まで施文されているのが認められる。爪形の内側が右方向のもの (80・81) と左方向のもの (82) がある。いずれも内面は、横方向の条痕調整が施される。

6類 (図版9 83~93) アナガラ属の貝殻の腹縁を原体として、口縁部下数cm内に口縁に平行して横位の刺突を横方向に直線状に連続して施すものである。最高6段まで確認できる。(91) 口唇部に同原体による刻目があるもの (83~85) とないもの (86・87) がある。83は内面に横方向の条痕調整が施される。

7類 (図版9 94・95) 口縁部下に平行して廻らしたアナガラ属貝殻腹縁の縦位の横方向連続刺突2条の間に同じアナガラ属の貝殻腹縁であるが、別原体の横位の直線状の横方向連続刺突を2状廻らしたものである。この文様構成は出土土器には口縁部に1単位のみ認められる。94は小さな波状口縁あるいは、平縁の小突起の部分と考えられる。95は平縁で、口唇部に横位の直線状の横方向連続刺突と同原体の横方向の刺突が施される。94と95は同一個体の可能性がある。いずれも内面は条痕調整である。

8類 (図版9 96~103) 口縁部下数cmの部分に口縁に平行して指によるツマミ痕を横方向に連続して1条廻らして口縁との間を縁帯部となすものである。96・97・99は縁帯部は無文である。101~103は、アナガラ属の貝殻腹縁の斜位の横連続刺突を縁帯部に施す。100は同じく連続ツマミ痕を挟んで縁帯部内と縁帯部下に横位の縦方向に連続する刺突を横に間隔をあけて施す。96と103は内面条痕調整。2類の少数はこの土器類と重複する可能性がある。

9類 (図版10 104~120) ヘラ状の器具あるいは細い半截の竹管状の原体の端部によって口縁部下に細線文を施すものである。104~113は、細線による斜格子文が施され、104~107・112・113はヘラ状器具、108・111は半截竹管状の原体によるものである。114~118はヘラ状器具によって細線による斜線が施されるが、明確な文様構成は認められない。119・120は、半截竹管状の原体による2条一組の細線を右下がり、左下がりの斜位に交互に施し

て縦方向の羽状文的な文様構成をなす。口縁は平縁のみで、口唇部に刻目をもつもの(104)は少ない。119は口縁に平行して刻目をもつ隆帯を口縁部に廻らせて縁帯部を形成し、この縁帯部内に細線文を施す。110・115は内面は横方向の条痕調整である。

10類 (図版10 121～126) 器面調整とも考えられるが、縄文が施されるものを一括した。121～125は横方向の羽状縄文を施されるもので、器壁外面全体に施文されていると考えられる。126は縄文原体を器壁に押圧したもので原体、施文範囲などは不明である。この土器は、他の個体に比較して器壁が厚い。121・126は内面に横方向の条痕調整が施される。

その他 (図版11 127～140) 以上の1～10類の分類に含まれないものを一括する。127は波状口縁の頂部で、縦方向の短い隆帯をもつ。隆帯上には刺突を施し、この隆帯から横方向にヘラ状器具による細線を数条施す。128は細かい縦位の爪形文を横方向に数段施すものである。129・130は、口縁部直下に細かい爪形文列を口縁に平行させて1条廻らすもので、129は斜位の爪形文、130は縦位の爪形文で口唇部に同原体の刻目をもつ。131はアナグラ属の貝殻を加工した原体による刺突を口縁直下に口縁に平行させて廻らせている。132～134はアナグラ属の貝殻の腹縁あるいはこれを加工した原体によって横方向の刺突を構成するが、1類・2類とは異なり刺突の列が上下し、間隔も一定しないものである。135は貝殻を加工した板状の原体により、口縁に平行して押し引くように縦位の刺突文を廻らせるものである。136は口縁部下に口縁に平行して刺突列を廻らせて縁帯部を構成し、縁帯部内に貝殻を加工した原体で横位の刺突文列を縦方向に押し引くように縁帯部全体に横に連続させて施すものである。137・138は貝殻を加工した櫛状の原体で縦位の横方向の刺突を施すものである。139は板状の原体による斜位の刺突文を横方向に連続させるものである。140は口縁部下数cmに口縁に平行させて隆帯を廻らせ、縁帯部を構成する。隆帯には刻目が施される。縁帯部の文様構成は不明である。

条痕調整 (図版11～14 141～194) 無文部の器面調整は明確なものが少なく、明瞭なものは少数の縄文による調整(10類)を除いて全て条痕調整である。141～166は、外面のみ条痕調整されるものである。大部分は横方向に調整されるが、斜方向のもの(154～158)縦方向のもの(159～166)も少ない割合であるが存在する。142・143は器壁の凸部にのみ条痕調整が認められる。

167～181は、内面のみ条痕調整の認められるものである。ほとんどが横方向あるいは横方向に近い斜方向(167～180)に施される。181は底部に近い部分で、縦方向あるいは斜方向に施される。器壁の凸部などに部分的のみ条痕調整の認められるものがある(167・174・177・179・180)。

182～194は、内面・外面共に条痕調整を有するものである。183～186は両面に同方向に条痕が施され、いずれも横方向である。187～194は、内外面に異なる方向の条痕が施されるものである。内面は横方向あるいは横方向に近い斜方向であり、外面は縦方向である。

195～204は底部である。全て丸底であるが、尖底に近いものがある(200・202)。

2. 弥生時代 (図版15 213～217)

この時代の遺物はA b区より出土した。(213～217) 213～216は、調査区の沖積面のⅢ層のうち下層のⅣ層に接する部分より出土した。217は、S D01の下層より出土した。

製塩土器 213～217は、製塩土器の脚部である。いずれも底部以外の杯部は失われている。焼成は良好である。213～215は、外面に右上がりの叩き目をもつ。213はほぼ円錐形をなす器形で、叩き目が明瞭に残り、内面に絞り痕がある。214もほぼ円錐形をなし、叩き目は比較的明瞭に残る。内面には手圧痕がある。外面には製塩土器に特有の赤褐色の斑文が認められる。215は、やや裾部が広がる円錐形をなし、内面には絞り痕が認められる。叩き目は浅くあまり明瞭ではない。216・217は外面を叩き目による調整を行わないものである。216は、器形はやや裾部が開く円錐形で叩き目のあるものより小形である。内外面は撫でられるが、外面の上部と杯との境界に指圧痕が認められる。外面は部分的に朱色に変色し、赤褐色の斑文がある。217は、わずかに内湾しながら開く円錐形で最も小形である。内外面とも撫でられ、杯との境界に指ツマミ痕が認められる。外面は、部分的に赤褐色に変色している。これらは、弥生時代後期の時期に属するものと考えられる。

3. 古墳時代 (図版15 218～236)

全てA区より出土した。(218～236) 218～227の内223・226はA a区のⅢ層、218～222・225はA b区のS D01、224・227は、A b区の碧海台地の崖面直下の古墳時代包含層である黒青色土層より出土した。また、228～232はA b区S D01の埋土中より、233はA b区のⅢ層の下部の黄灰色砂層中より、234～236はA a区のⅣ層の下部より出土した。

製塩土器 218～225は製塩土器の脚部である。杯部は欠損しているため全形は不明である。砂粒を多く含む精選されない胎土である。いずれも筒形の器形で、外面は撫で調整されているもの(218・220など)があるが、指圧痕などの成形痕が残され、外面調整はあまりなされていないもの(227・224など)が多い。また、下端部も調整はなされない。内面には、粘土の輪積痕の認められるもの(225)もある。これらは6世紀後半から7世紀前半の時期と考えられる。228～232はいわゆるS字甕である。233は球胴形の甕である。内面及び口縁部を撫で調整し、外面ハケ調整である。単独で出土したため細かい時期は確定できない。234は、高杯の杯部で内外面に細かい縦方向の磨きが施される。235は器台である。236は分銅形の土製品である。底部に刺突痕を有する。228～236は、古墳時代初頭から前半の時期に属す。

4. 平安時代 (図版16～19)

A a区から出土したものが大部分であり、その他A b区より少量出土した。A a区のⅢ層より多量の製塩土器(237～333)が出土し、これに混在して少量の灰釉系陶器、土師器甕等(334～360)が出土している。また、A b区からは沖積面のⅢ層より製塩土器が少量出土し、S D01からは灰釉系陶器が出土している。

製塩土器 A a区より出土した製塩土器は、杯部の細かい破片と棒状の脚部のみの部分であり、杯部全体あるいは全形のわかる個体は検出されなかった。脚部の形態から以下の4類に分類される。

A類(237～255) 下端に向かって細くなり、先端が尖る棒状の形態のものである。杯部

の内底面の中心は凹んで杯部は緩やかに内湾してたちあがるが、口縁部に近くなるに従い杯部の内湾は強くなり、全体として漏斗状の形態をなす。脚部の外表面は撫でによって滑らかに調整されている。脚高（脚部下端から杯部内底面までの高さ）は5.8～8.7cmである。外面は調整によって直線的に尖る丁寧なつくりのもの（237・242など）であるが脚部の基部などに部分的に手圧痕を明瞭に残すもの（240・241・251など）があり、不整形なものを含む。

B類（256～266） 下端に向かって細くなり、先端が尖る棒状の形態のものである。杯部内底面にはA類に認められた凹みはなく平坦であり、脚基部からの杯からの立ち上がりは緩く、水平に近い角度のもの（259～261など）が多い。杯部は開いた漏斗状あるいは平鉢状に近い形態と考えられる。脚部外面は撫で調整によって滑らかに仕上げられるもの（265）があるが、調整が施されるが丁寧なものでない手圧痕が明瞭にのこるものが大部分である。脚高の計測できるものは少なく、8.5～10.4cmでやや大型である。4類の中で出土個体数が最も少ない。

C類（267～280） 棒状の形態で、下端に向かってあまり細くならないものである。外面は撫で調整の施されるものもあるが、ほとんどは手による整形が簡単になされる程度である。このため手圧痕による凹凸が残り、成形痕が明瞭に認められる。杯部の立ち上がりはほぼ水平に近いものがほとんどであり、平鉢状の形態をなすものと考えられる。脚高は、7.3～8.4cmで各個体とも近似している。出土した個体数は少ない。

D類（281～311） 棒状の形態で、下端に向かってあまり細くならないものである。杯部内底面は平坦であり、脚基部の立ち上がりは水平に近いものがほとんどである。脚部の外面は調整は施されず、成形痕が元の状態で残る。杯部は平鉢状になるものと考えられる。他の類に比べて脚基部の杯部の残存状態は良いもの（307・311など）が多い。脚高は7.3～8.4cmであり、各個体とも近似している。

312～333は製塩土器の杯部の口縁部である。杯部は全て細かい断片であり、図示したのは比較的大形のものである。320～333は、急角度あるいは直立に近い角度で直線的に外反する口縁部である。これらは、2～4mmの薄い器壁で成形の凹凸を残し、口端は無整形で基本的に尖端となっているが形態的に一定しないものである。内面は布状のものによる横方向の撫で調整痕が明瞭に認められる。外面は無調整で口縁に平行する横方向の押圧痕（320・327など）が残る。出土製塩土器のほとんどの口縁部はこの形態に属す。312～319はこれ以外の形態のものである。312は、口縁部端部が急角度に短く外反する。313・314はやや口縁部端部が厚く、内湾するものである。315は、口縁部が厚くやや外反する。316は、口唇部を撫でて面をつくりだしている。317は、口縁部端部内面に隆帯を施すものであり、整形がなされず粘土の張り付け痕が明瞭に残る。318は、厚い口縁部の端部を外につまみ出し、口唇部を撫でて広い面をつくりだしている。319は、口縁部を「く」の字状に急角度に外半させている。内面には横方向の撫で調整痕が認められ、外面は無調整で成形の押圧痕が残る。312～319は、胎土、色調から製塩土器と考えられるものであるが、出土量は全体から

すれば極少量である。

334～351・353～360は、A a 区のⅢ層出土の灰釉系陶器（334～351・353・354）、土師器（357～360）土錘（355・356）である。334～351は灰釉系陶器碗、353・354は同じく長頸瓶であるが、いずれも小破片である。時期は平安時代前半で猿投窯の編年でK-90～O-53に相当する。352は、A b 区のS D01の出土で12世紀代の時期と考えられる。土師器はいずれも甕である。359は、口縁部が直角に近く外半し、内外面とも丁寧に横撫でされる。平安時代前半の通常の甕である。357・358・360は、口縁部が「く」の字状に屈曲して外反する甕である。内面は、製塩土器と同様に布状のものによる横方向の撫で調整がなされる。外面は整形されず、360は成形の押圧痕が明瞭に残る。これらは胎土、色調とも製塩土器に近似している。

5. 室町時代～江戸時代（図版20～28）

この時期の遺物は全て碧海台地上のB b 区とC（C a・C b）区より出土した。検出された遺物は、遺構からの出土状況よりⅠ期：室町時代末（戦国期）Ⅱ期：江戸時代中期の2時期に細別される。以下各時期の遺構ごとに記す。

Ⅰ期（図版20～25 361～469）

S K063（361～365） 361は土師器皿である。轆轤成形で底面に回転糸切り痕を残す。362は、擂鉢底部である。内面底部は、使用による摩耗が著しい。363～365は、土師器甕である。いずれも口縁部が屈曲して内湾しながら立ち上がる形態の内耳鍋である。365は内外面丁寧に横撫でされる。これらは、16世紀前半の時期に属す。

S K066（366～384） 366は天目茶碗である。367～369は鉄釉掛けの甕である。369は外面全体に釉が掛けられるが、368は胴下部は無釉である。370～371は、擂鉢の底部（370・371）と口縁部（372・373）である。底部はいずれも内面と底面が摩耗しており、371の内面が著しい。374・375は轆轤成形の土師器皿で底面に回転糸切り痕を残す。376～380は口縁部が屈曲して内湾しながら立ち上がる形態の内耳鍋である。胴部内面はハケ調整で378・379はハケ目を残すが、377は横撫ででハケ目を撫で消す。380は、鉢状の単純な形態の内耳鍋である。381は羽釜型鍋である。内面は板状の器具による粗いハケ調整後、横撫でを行う。382は土錘、383・384は陶錘である。383の外面には、焼成前の輪状の圧痕が二つ認められる。以上は、16世紀前半の時期に属す。

S K067（385～402） 385は鉄釉碗である。386～398は内耳鍋である。386～397は、口縁部が屈曲して内湾しながら立ち上がる形態の内耳鍋である。いずれも内面はハケ調整の後、丁寧な横撫でによって内面全体と口縁部外面を調整するが、内面にハケ目を残すもの（389など）がある。外面は撫でによって調整し、底部はヘラ削り痕を残す。（396など）口縁部の屈曲はほぼ共通しているが、個体によって形態差があり一定しない。396は、口縁部の立ち上がり部分の外反が強いが、内湾の形態が他の個体と類似している。386・387は、形態的には同一ながらほぼ同規格の小型のものであり、少数の口径18cm程度の小型品と量的に多い口径24～28cmの大型品の2器種が存在する。398は、鉢形の単純な器形の内耳鍋である。

内外面とも丁寧な撫で調整を行っているが、底面にへう削り痕が認められる。外面に多量の煤が付着する。399は、手づくね成形の土師器皿である。400～402は土錘で、400は小型品、401・402は大型品である。これらは16世紀前半の時期に属す。

S K 069 (403～418) 403・404は播鉢である。404の内面と底面は摩耗が著しい。405・406は常滑製品で、405は鉢、406は甕口縁部である。407～409は羽釜型鍋である。407・409は精良な胎土で内面をハケ調整した後、内外面丁寧に撫で調整している。408は粗い胎土である。410～413は、口縁部が緩く屈曲してやや内彎気味に立ち上がる器形の内耳鍋である。内面をハケ調整後、丁寧に撫で調整を行っているが、412は内外面にハケ目を残す。414～418は、鉢形の単純な形態の内耳鍋である。内面ハケ調整後、414・418は丁寧に撫でるが、415～417はハケ目が明瞭に残る。以上は、16世紀前半の時期に属す。

S K 070 (419～430) 419～421は、天目茶碗である。421は高台周辺に錆釉を施す。422・423は播鉢口縁部、424は甕底部で底面の摩耗が著しい。425～430は内耳鍋である。425・426・428は、口縁部が屈曲して内彎しながら立ち上がる形態のもの、429・430は、単純な鉢形の形態のもの、427は口縁部がほぼ直線的に立ち上がる形態のものである。以上は、16世紀前半の時期に属す。

S K 113 (431～469) 431～438は常滑製品で、431・432は甕口縁部、433～438は鉢である。435は、内面にへうによる沈線が底部から片口方向にかけて施される。437は、同様の沈線にさらに横方向に加え十字に沈線を施す。438は、大型の鉢で内面は撫で調整されるが、外面の下半に指圧痕などの成形痕を残す。436・438の底面は摩耗が著しい。439・440は播鉢口縁部である。441は折縁深皿である。底縁に小さく低い三足を有する。外面には下部を除いて鉄釉が施され、胴下部はへう削り痕が認められる。442は大型の壺である。外面は明灰色を呈し、肩部には褐色の鉄釉を施す。頸部と肩部は丁寧に横撫でが施されるが、胴部には細かい斜方向のハケ目が残る。また、頸部内面と外面の頸部から胴部上半には自然軸のとび痕が認められる。443～445は土師器皿である。443・444は轆轤成形で443は底面に回転糸切り痕を残すが、444は底面をへう削りする。445は手づくね成形である。446～457は内耳鍋である。446～453は、口縁部が屈曲して内彎して立ち上がる形態、454～457は単純な鉢状の形態である。内面はハケ調整後丁寧に撫でられるが、453は内面にハケ目を明瞭に残す。454は外面は成形後撫で調整を行うが、成形の押圧痕を明瞭に残し、底面にはへう削り痕を有する。455は内外面撫でられ、比較的薄手の丁寧な整形のものである。458～463は羽釜型鍋である。458は内外面を横撫でによって整形する器壁の薄い丁寧なつくりのもので、口縁に近い部位に鐙を廻らすものである。459～460はいずれも大型で低い鐙を口縁部下に廻らす。内面はハケ調整後、丁寧に撫で調整を施す。460は、外面は鐙下部まで横撫でを施し、胴部は縦方向のハケ調整後、撫でを施す。464～469は土錘である。468は成形の指圧痕が残る。以上は、16世紀前半に属す。

II期 (図版25～28 470～541)

S K 030 (470～480) 470～473は灰釉丸碗である。470は外面に呉須絵を施す。471は、柳

茶碗である。472・473は内底面に呉須絵を施す。474は腰鎗茶碗である。475は鉄釉を施す甕である。476・477は播鉢の口縁部である。478～480は内耳鍋である。478・479は内面へう削り後丁寧に横撫でを施すが、479はハケ調整痕を残す。以上は、18世紀後半の時期に属す。

S K031 (481～510) 481は磁器皿で、内外面に呉須絵を施す。482～484は、灰釉碗である。482は、外面に呉須絵を施す。485・486は灰釉筒型碗で、外面に呉須絵を施す。487・488は小杉茶碗である。486は、御深井釉の蓋で外面に淡黄緑色の灰釉を施す。490は、京焼風陶器の台付き鉢で鉢部底面を除いて緑色の灰釉が施される。脚台部には、透かしが入る。491は片口鉢で、内面及び外面上部に淡黄色の灰釉を施す。492は鉄釉壺。493は常滑製品の小型の甕の口縁部である。494は笠原鉢である。灰釉を内外面に施し、内面に鉄絵を施す。495は鉄釉甕の口縁部である。496～501は播鉢である。500は、内面口縁部に段をなす形態のもので播目単位の間隔は比較的粗である。内面下半の摩耗は著しい。底面はへう削り調整である。501は口縁部を肥厚させる形態で播目単位の間隔は密である。内面と底面の摩耗は著しい。底面には回転糸切り痕を残す。498・499は、底部内面と底面の摩耗が著しい。502～504は手づくね成形の土師器皿である。505は焙烙鍋である。506～509は常滑製品の大型の甕である。508・509は同一個体であり、内面上半に口縁に対して平行より若干斜めの渦旋状の手圧痕列が認められる。510は、外面鉄釉の施される甕である。口縁端部を張り出し連続圧痕を加える。以上は、18世紀後半の時期に属す。

S D02 (511～541) 511は、灰釉丸皿である。512・513は、腰鎗茶碗である。514～521は丸碗類である。517・521は鉄釉碗、514・515・518～520は灰釉碗である。516は鉄釉で口縁部に灰釉を施す。522は、内面口縁端部が張り出す鉢で火鉢と考えられる。523は、単純な口縁の小型の火鉢である。524～526は播鉢である。526は内面と底面が若干摩耗している。底面に回転糸切り痕を残す。527・528は手づくね成形の土師器皿である。529～539は内耳鍋である。全形の分かるものはないが、体部上半の内彎する単純な形態の鉢型の内耳鍋(529～536)と口径の比較的大きい口縁部の内彎する底部の浅い鉢型のいわゆる焙烙鍋(537～539)の2器種がある。540・541は土鉢である。以上は、18世紀後半の時期に属す。

(酒井俊彦)

第Ⅳ章 自然科学的分析

遺跡立地環境

1. はじめに

1989年度に行われた愛知県西尾市清水遺跡の発掘調査にさいして、珪藻分析および砂の粒度分析を実施し、古環境の復元に役立てることができたので、ここにその分析結果の概要を報告する。

珪藻は珪酸質の被殻を有し堆積物中によく保存されること、種によって明瞭な住みわけが見られることから、珪藻分析は水域環境の復元に重要な役割を果たす。

また、砂などの碎屑性堆積物の粒度組成は、運搬・堆積のエネルギーをよく反映することから、その分析を行うことは堆積環境を復元するうえで大変重要である。筆者らは、これまで濃尾平野周辺地域の遺跡基盤砂層や現河床砂などの粒度分析を行い、その有効性について確認している（森・伊藤ほか、1990）。

今回、これらの分析を併せて実施し、より詳細な環境復元に努めた。

2. 試料の採取と処理

(1)珪藻分析

清水遺跡は標高0～5 m、矢作川左岸に位置する台地上および台地直下に位置する縄文時代前期から平安時代にかけての遺跡である。

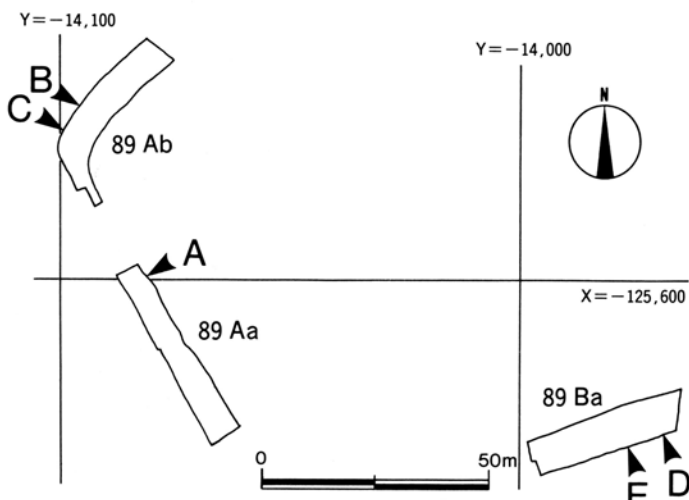
珪藻分析を行った試料は、第2図に示した台地直下の1～5試料、およびボーリングサンプル中の24試料（B1～B24）の計29試料である。

試料の処理およびプレパラートの作成方法は、従来筆者が実施してきた分析方法（森・伊藤、1990）を用いた。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定した。しかし、試料中に含まれる珪藻殻が極端に少ない場合は、200個に達しなくても検鏡を打ち切った。

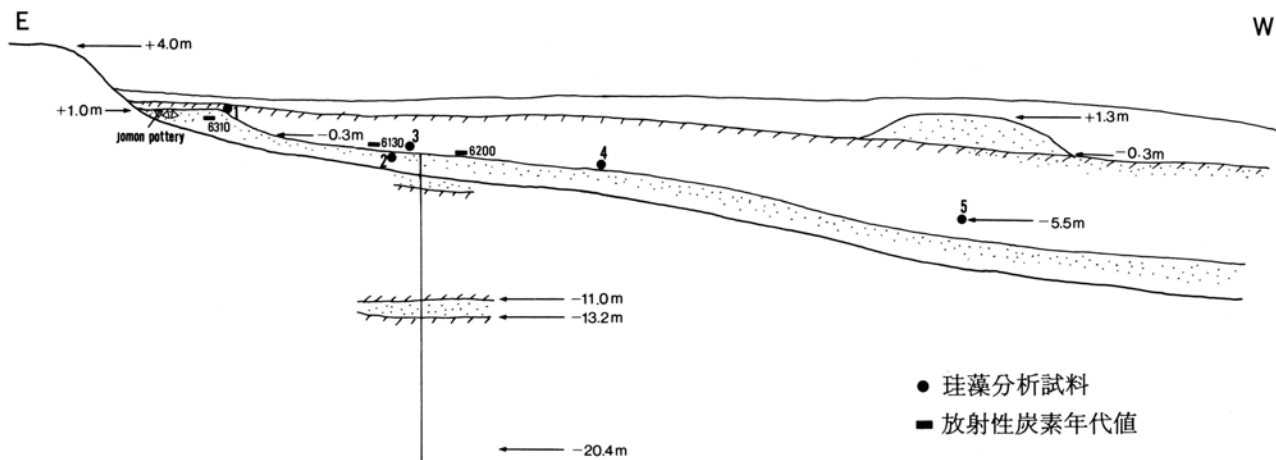
珪藻の分類と生態的特性は、Cholnoky (1968)、Foged (1954、1978)、Hustedt (1930、1937–1938、1955、1927–1966)、Hendey (1964)、Kramer and Lange-Bertalot (1986、1988)、小杉(1988)、Patrick (1966、1975) などによった。

(2)粒度分析

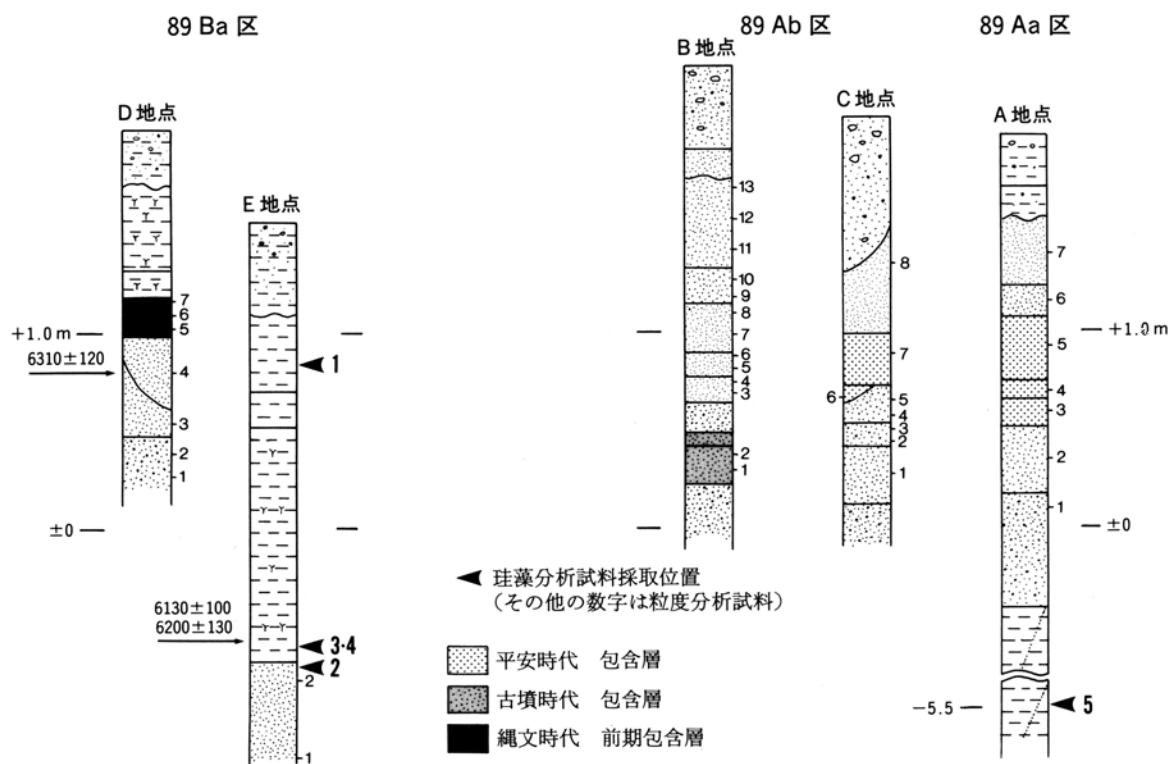
粒度分析は、第1図に示した5地点か



第18図 分析試料採取位置



第19図 清水遺跡模式断面図



第20図 分析試料採取層準

ら採取した合計37試料について行った。まず、乾燥させた試料を二分法または四分法によって約50～100 g 取り出し、2 mm、1 mm、1/2mm、1/4mm、1/8mm、1/16mmの6種類の篩を用いて、約30分間震とうさせ篩別した。

次に各篩に残った試料の重量を測定し、片対数方眼紙上に重量百分率の累積頻度曲線を描いた。この曲線をもとに重量百分率が16%、50%、84%に相当する粒径を読み取り、 ϕ (ファイ) スケール法により粒径の ϕ 値を求めた。 ϕ スケールの定義は、 $d=2^{-\phi}$ (ただし d は粒径mm) で表され、一般式では $\phi=-\log_2 d$ で求められる。このようにして求めた各値から、以下の粒度分析結果を算出した。

中央粒径 $Md\phi = \phi_{50}$ (ただし ϕ_{50} は50%の粒径の ϕ 値、以下同様)

平均粒径 $M\phi = (\phi_{16} + \phi_{84}) / 2$

淘汰度 $\sigma\phi = (\phi_{84} - \phi_{16}) / 2$

歪度 $\alpha\phi = (M\phi - Md\phi) / \sigma\phi$

中央粒径は粒度分布の中央値を、平均粒径は粒度の平均値を表す。淘汰度は粒度分布の分散の程度を示し、値が小さいほど分散が小さく淘汰はよいといえることができる。また歪度は粒度分布の偏りを表す。

3. 分析結果

(1) 珪藻分析

試料1～5ともほぼ海水～汽水生の種群のみからなる群集組成であった。次に、それぞれの試料における出現傾向と優占種等について述べる。

試料1では、汽水生種として知られる *Navicula yarrensii* (第22図-17・18) がきわめて優占して出現した。*N. yarrensii* は加藤ほか (1977) によって秋田県八郎潟調整池において中塩性の汽水産付着生種として記載されているほか、Foged (1978) は東オーストラリア・タスマニア海内陸のラグーンや河川および沼沢地から本種を確認し、中塩性種であると述べている。またHustedt (1955) は、本種を暖かい沿岸部一帯に広範囲に分布する種であると記載している。

ほかに海水砂質干潟指標種群 (小杉、1988) の一種の *Achnanthes hauckiana* や内湾指標種群の *Cyclotella stlorum* (*C. striata* を含む、以下同様) がわずかに伴われたのみで、試料中に見いだされた珪藻殻のほとんどすべてが、*N. yarrensii* 一種だけで構成される群集組成であるとみなすことができる。

試料2・3は、海水生種の *Terpsionoe americana*、内湾指標種群の *Paralia sulcata* などがわずかに出現したのみで、珪藻殻の保存状態はきわめて悪い。

試料4は、*Paralia sulcata* や *Cyclotella stlorum*、*Thalassionema nitzschioides* などが出現した。

試料5は、内湾指標種群を中心に一部外洋性種をまじえる群集組成であるとみなすことができる。種数・殻数ともに豊富である。なかでも *Paralia sulcata* がきわめて優占し、随伴種として *Cyclotella stlorum*、*Auliscus caelatus*、*Actinopteryx senarius*、*Thalassionema nitzschioides*、*Cymatotheca weissflogii* などが比較的高率で出現した。

一方、ボーリング試料中のB1～B24サンプルの分析結果については、第2表に示した。サンプルごとにいくぶん組成を異にするものの、全体に内湾指標種群の *Paralia sulcata* および *Cyclotella stlorum* (*C. striata* を含む) の2種が多産している。

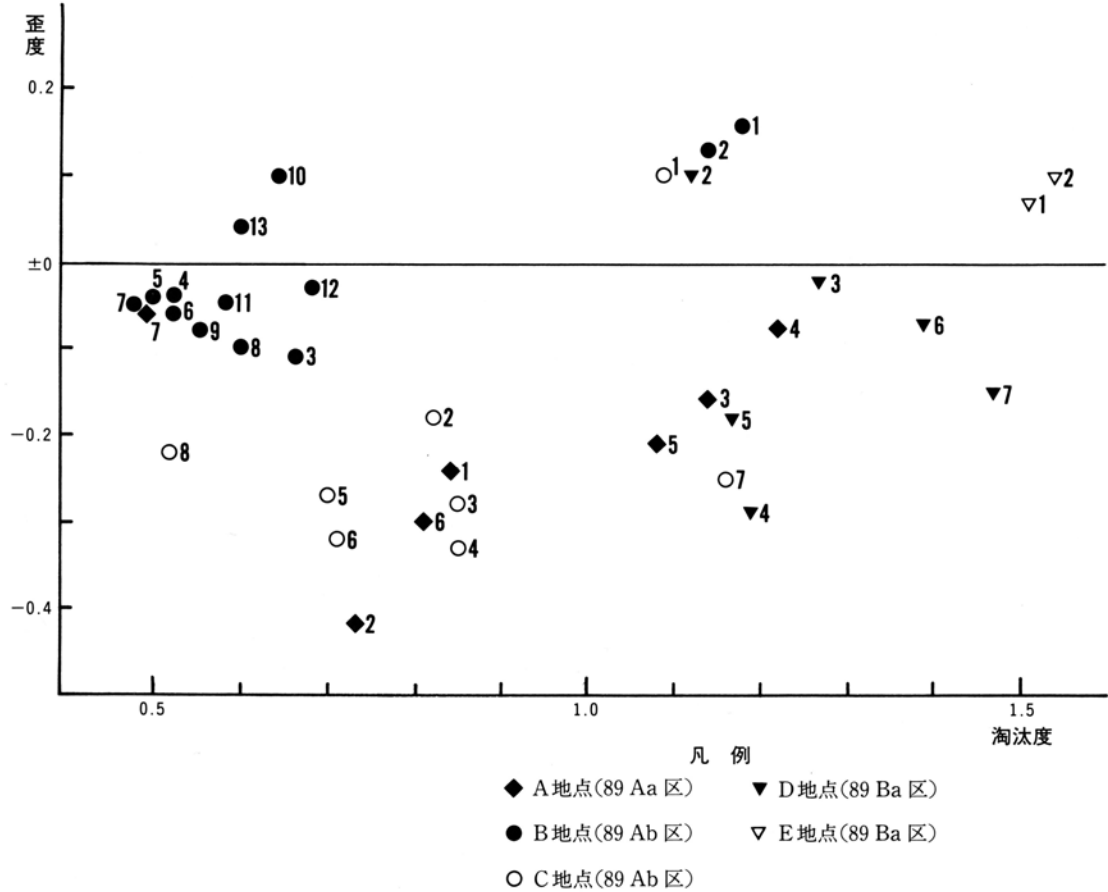
(2) 粒度分析

各試料の粒度分析結果を第1表に歪度-淘汰度分布図を第21図に示した。以下に、各試料の特徴および堆積環境について簡単に述べる。

89A区 (試料番号A-1～7、B-1～13、C-1～8)

試料No.	φ16	φ50	φ84	平均粒径φ	淘汰度	歪度
A-1	-0.20	0.84	1.47	0.64	0.84	-0.24
A-2	-0.06	0.97	1.40	0.67	0.73	-0.42
A-3	0.29	1.60	2.56	1.42	1.14	-0.16
A-4	0.12	1.43	2.56	1.34	1.22	-0.08
A-5	0.47	1.79	2.64	1.56	1.08	-0.21
A-6	0.07	1.12	1.69	0.88	0.81	-0.30
A-7	0.67	1.18	1.64	1.16	0.49	-0.06
B-1	-0.89	0.10	1.47	0.29	1.18	0.16
B-2	-1.00	0.00	1.29	0.14	1.14	0.13
B-3	0.51	1.25	1.84	1.18	0.66	-0.11
B-4	0.51	1.06	1.56	1.04	0.52	-0.04
B-5	0.60	1.12	1.60	1.10	0.50	-0.04
B-6	0.60	1.15	1.64	1.12	0.52	-0.06
B-7	0.56	1.06	1.51	1.04	0.48	-0.05
B-8	0.49	1.15	1.69	1.09	0.60	-0.10
B-9	0.49	1.09	1.60	1.05	0.55	-0.08
B-10	0.79	1.36	2.06	1.42	0.64	0.10
B-11	0.79	1.40	1.94	1.36	0.58	-0.05
B-12	0.69	1.40	2.06	1.37	0.68	-0.03
B-13	0.64	1.22	1.84	1.24	0.60	0.04
C-1	-0.58	0.40	1.60	0.51	1.09	0.10
C-2	-0.21	0.76	1.43	0.61	0.82	-0.18
C-3	-0.14	0.94	1.56	0.71	0.85	-0.28
C-4	-0.19	0.94	1.51	0.66	0.85	-0.33
C-5	0.10	1.00	1.51	0.81	0.70	-0.27
C-6	0.18	1.12	1.60	0.89	0.71	-0.32
C-7	-0.71	0.74	1.60	0.44	1.16	-0.25
C-8	0.29	0.92	1.32	0.80	0.52	-0.22
D-1	-1.54	0.25	3.64	1.05	2.59	0.31
D-2	-0.93	0.09	1.32	0.20	1.12	0.10
D-3	-0.14	1.15	2.40	1.13	1.27	-0.02
D-4	0.42	1.94	2.79	1.60	1.19	-0.29
D-5	-0.10	1.29	2.25	1.08	1.17	-0.18
D-6	-0.28	1.22	2.51	1.12	1.39	-0.07
D-7	-0.51	1.18	2.43	0.96	1.47	-0.15
E-1	-0.38	1.03	2.64	1.13	1.51	0.07
E-2	-0.72	0.67	2.36	0.82	1.54	0.10

第 1 表 粒度分析結果



第21図 歪度—淘汰度分布図

A地点では、平安時代の製塩土器を含む粗粒砂層の上下から7試料(A-1~7)を採取した。A-1~6は全体に中粒~粗粒の淘汰の悪い砂層で、歪度が負に偏っている。A-7はやや淘汰のよい中粒砂である。

B地点、C地点ともに古墳時代の須恵器を含む砂層より上位の砂層から採取した。A地点とはほぼ同じ層準に相当する。B-1・2は、淘汰の悪い粗粒砂、B-3~B-13は比較的淘汰のよい中粒砂で構成されている。

B地点より8m南に位置するC地点では、C-1がB-1・2とよく似た組成を示したが、それより上位の砂層(C-2~8)はB地点(B-3~13)と同層準でありながら粒度組成を異にしている。B-3~13は歪度が±0付近の中粒砂であるのに対し、C-2~8では歪度が大きく負に偏った粗粒砂であることからC地点がより海側に位置し、波の影響を受けたものと考えられる。概念図(第19図)上ではB地点は砂堆の中心部、A地点・C地点は砂堆の前面付近にあたるものと推定される。

89Ba区(試料番号D-1~7、E-1・2)

試料は、海生珪藻を産する腐植質シルトの下位の砂層より採取した。腐植質シルトの放射性炭素年代は 6130 ± 100 y.B.P. (GaK-14975)、 6200 ± 130 y.B.P. (GaK-14973) が得られている。

全体に非常に淘汰の悪い中粒~粗粒砂で構成され、歪度もばらつきがみられることから、比較的流速の大きい不安定な環境下の堆積物であると推定される。

4. 古環境

清水遺跡が立地する以前の第四紀更新世の頃は、ボーリング試料の珪藻分析結果から、外洋につながる内湾的な海が広がっていたと考えられる。その後、不安定な環境下で粗粒砂が更新世の堆積物を覆った。この砂層の上面から縄文時代前期の土器片が検出され、砂層中の木片の放射性炭素年代は、 6310 ± 120 y.B.P. (GaK-14974) という値が得られている。

砂層の上位には厚い腐植質シルト層の堆積がみられ、シルト層下部では、 6310 ± 100 y.B.P.、 6200 ± 130 y.B.P.の縄文時代前期を示す年代値が得られた。本層準(試料2~4)の珪藻分析から内湾性の海が復元され、いわゆる縄文海進の海とみなすことができる。

縄文時代前期以降、腐植質シルトの堆積が続くが、珪藻群集組成の変化から内湾性の海は次第に閉鎖された湿地的な汽水環境(「閉鎖的汽水沼」)へと移り変わっていったことが明らかになった。なお、本層下位よりマツ科の球果が多数発見された。

その後、遅くとも弥生時代前期の頃には上部に砂州性の砂堆が東西方向に帯状に発達しはじめ、古墳時代頃になると付近で製塩が営まれた。この砂堆は製塩の行われていた平安時代までは海に面していたと推定される。一方、台地上では、中世末から近世初頭の、アサリ・マガキ・イタボガキ・ハマグリなどの貝殻を多量に含む廃棄土坑が検出されており、この時期にはまだ海が比較的近くに迫っていたと考えられる。

(森 勇一・伊藤隆彦・前田弘子)

第2表 珪藻遺骸リスト

	Species	Ecological value				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	TOTAL	
		pH	CURR	ECOL	C1																										
1	<i>Achnanthes delicatula</i>	Albi	Ind	Epip	Meha	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	2	*	4	5	
2	<i>Achnanthes haukiana</i>				Meha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	2	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	4	5
3	<i>Achnanthes lanceolata</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	*	5	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	1	*	7	5	
4	<i>Achnanthes linearis</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	2	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	5	7	
5	<i>Actinella brasiliensis</i>	Acph	Liph	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	*	1	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	3	3	
6	<i>Actinopterychus adriaticus</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	
7	<i>Actinopterychus senarius</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2	2	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	7	2	
8	<i>Actinopterychus trilingulatus</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	2	7	
9	<i>Amphora crassa</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2	
10	<i>Amphora ovalis</i> var. <i>libyca</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	*	*	*	*	*	6	1	*	*	*	*	1	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	10	10	
11	<i>Anomoeoneis sphaerophora</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2	2	
12	<i>Asteromphalum flabellatus</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	3	3	4	2	*	6	8	13	29	70	
13	<i>Auliscus caelatus</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	*	3	1	*	1	*	*	*	*	*	*	5	70	5	
14	<i>Bacillaria paradoxa</i>	Ind	Ind	Bent	Meha	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	*	3	1	*	1	*	*	*	*	*	*	*	2	70	5	
15	<i>Caloneis bacillum</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2	
16	<i>Cocconeis diminuta</i>	Albi	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	*	1	*	1	4	3	3	
17	<i>Cocconeis pinnata</i>				Meha	*	*	*	*	*	1	1	*	*	*	1	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	4	3	
18	<i>Cocconeis placentula</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	
19	<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>neglecta</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	1	3	*	*	*	*	*	*	4	2	1	*	*	*	*	*	4	4	4	
20	<i>Cocconeis pseudomarginata</i>				Meha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	1	4	2	1	*	*	3	*	1	1	15	15	13	
21	<i>Cocconeis scutellum</i>				Meha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	4	1	6	1	1	*	*	*	*	*	*	*	13	13	
22	<i>Coscinodiscus</i> sp.				Euha	3	*	*	*	*	1	*	*	*	*	21	5	4	3	*	*	*	*	*	*	*	*	2	40	40	
23	<i>Cyclotella striata</i>				Meha	4	4	3	1	*	*	5	6	123	73	78	118	69	118	109	6	1	19	28	60	38	863	2	863		
24	<i>Cymatoloha weissflogii</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	5	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	8	8	
25	<i>Cymbella lanceolata</i>	Acph	Lipi	Epip	Ind	*	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2	
26	<i>Cymbella leptoceros</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	*	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2	
27	<i>Cymbella minuta</i>	Ind	R-ph	Epip	Ind	*	*	*	*	*	9	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	9	9	
28	<i>Cymbella sinuata</i>	Ind	Lipi	Epip	Ind	*	*	*	*	*	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3	
29	<i>Cymbella tumida</i>	Acph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	7	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	7	7	
30	<i>Dimerogramma fulvum</i>				Euha	*	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	1	2	9	6	*	*	*	3	2	3	28	28		
31	<i>Dimerogramma minor</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	4	1	1	6	*	*	*	*	1	*	1	1	19	19		
32	<i>Diplooneis bombus</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	4	5	2	3	2	*	*	*	1	1	1	1	19	19		
33	<i>Diplooneis elliptica</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3		
34	<i>Diplooneis interrupta</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3	
35	<i>Diplooneis ovalis</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	1	*	*	*	*	1	*	1	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2	3	7	7	7		
36	<i>Diplooneis puella</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	3	1	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3		
37	<i>Diplooneis smithii</i>	Alph	Ind	Epip	Meha	*	*	*	*	*	*	20	*	*	*	1	1	2	*	1	*	*	*	4	1	3	30	3	30		
38	<i>Eumotia diodon</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2		
39	<i>Eumotia flexuosa</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1		
40	<i>Eumotia pectinalis</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	*	*	*	*	13	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	15	15		
41	<i>Eumotia pectinalis</i> var. <i>minor</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1		
42	<i>Eumotia praeurupta</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	*	*	*	4	1	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	6	6		
43	<i>Eumotia pseudopectinalis</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	1		
44	<i>Fragilaria brevistriata</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	*	2	1	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	5	5			
45	<i>Fragilaria construens</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	1	3	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	5	5		
46	<i>Fragilaria construens</i> var. <i>hispida</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	1		
47	<i>Fragilaria pinnata</i>	Acph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	5	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	5	5			
48	<i>Fragilaria virescens</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3			
49	<i>Glyphodesmis</i> sp.				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2			
50	<i>Gomphonema acuminatum</i> var. <i>corundum</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	*	*	*	*	1	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3		
51	<i>Gomphonema angustatum</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
52	<i>Gomphonema augur</i> var. <i>turris</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	2			
53	<i>Gomphonema gracile</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	*	*	*	*	5	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	5	5			
54	<i>Gomphonema olivaceum</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
55	<i>Gomphonema parvulum</i>	Ind	R-ph	Epip	Ind	*	*	*	*	10	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	11	11			
56	<i>Gramatophora oceanica</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
57	<i>Gyrosigma strigiris</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	*	*	*	*	*	*	*	7	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
58	<i>Hantzschia amphioxys</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	*	*	*	*	*	7	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	8	8			
59	<i>Mastogloia elliptica</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
60	<i>Melosira ambigua</i>	Ind	Liph	Plan	Ind	*	*	*	*	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3			
61	<i>Navicula alba</i>				Euha	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
62	<i>Navicula elgimensis</i>	Alph	R-bi	Bent	Ind	*	*	*	3	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	3			
63	<i>Navicula goeppertiana</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
64	<i>Navicula lyra</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1	3	2	*	4	*	*	*	*	3	5	2	9	30			
65	<i>Navicula lyroides</i>				Euha	*	*	*	*	*	1	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	1	1			
66	<i>Navicula marina</i>				Euha	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*													

謝辞

小文を草するにあたり、以下の方々にお世話になった。記して感謝申し上げる。

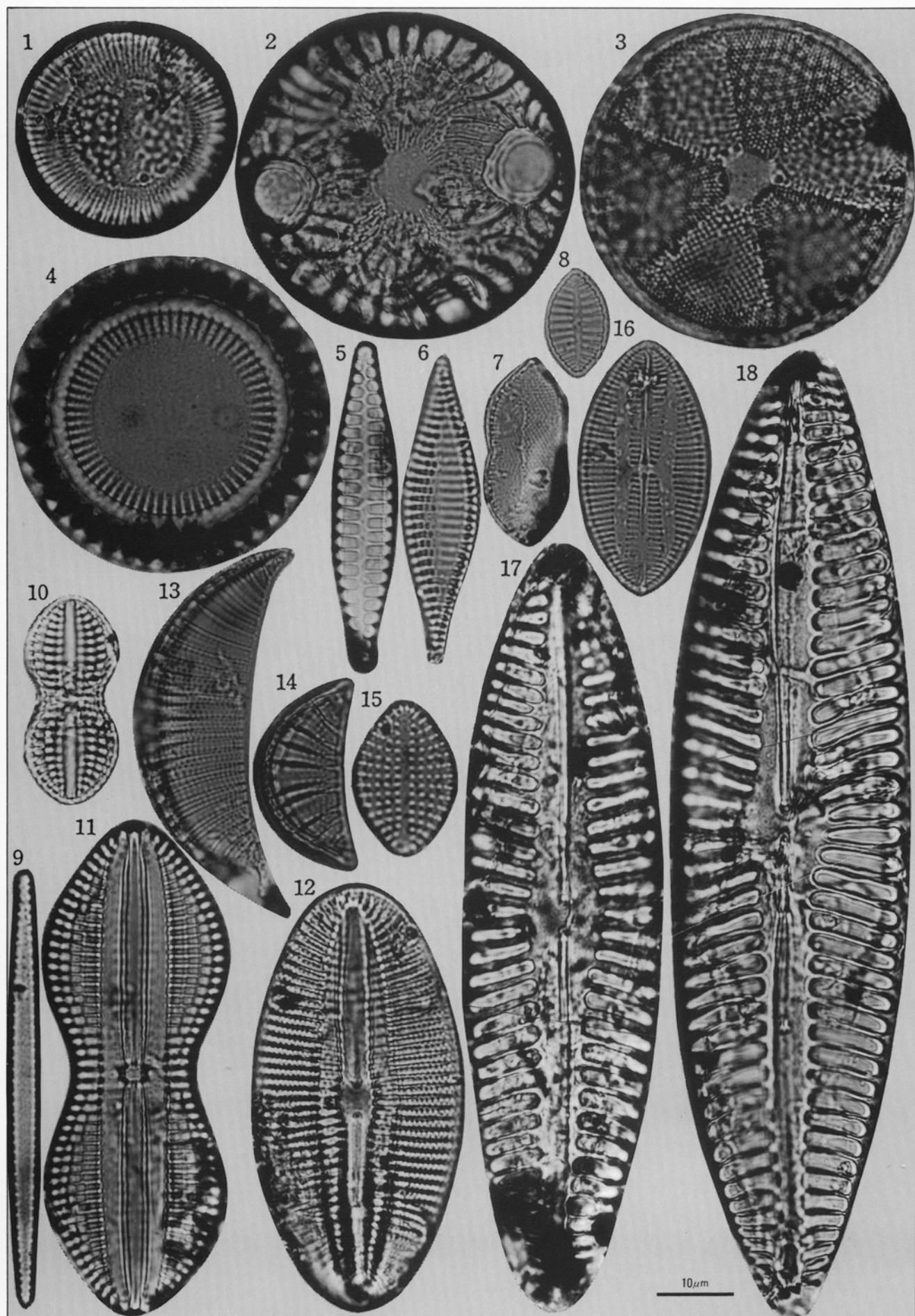
海津正倫氏（名古屋大学）・鹿島 薫氏（九州大学）。

参考文献

- 地学団体研究会（1982），土と岩石（自然をしらべる地学シリーズ3），東海大学出版会，200p.
- 森 勇一・伊藤隆彦・楯真美子・永草康次（1990），濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成，（財）愛知県埋蔵文化財センター年報（平成元年度），131-142
- 大久保雅弘・藤田至則（1984），地学ハンドブック，築地書館，233p.
- 碎屑性堆積物研究会（1983）堆積物の研究法－礫岩・砂岩・泥岩－，地学団体研究会，378p.
- Cholnoky, B.J. (1968), Die Ökologie der Diatomeen Binnengewässern. Cramer, Germany. 699p.
- Foged, N. (1954), On the Diatom flora of some Funen lakes. *Fol. Limnol. Scandinavica*, **6**, 76p.
- Foged N. (1978), Diatoms in Eastern Australia *Bibliotheca Phycologica* 41:1-242
- Hendey, N.I. (1964), An introductory Account of the smaller algae of British coastal waters. Part V : Bacillariophyceae (diatom). Her Majesty's Stationary office, London, 317p.
- Hustedt, F. (1930) Bacillariophyta. *Die Süßwasser Flora Mitteleuropas*, **10**, G. Fischer. Jena, 466p.
- Hustedt, F. (1937-1938), Systematische und Ökologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra. nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch. Hydrobiol. Suppl*, **15**, 131-177.
- Hustedt, F. (1955), Marine Littoral Diatoms Beaufort, North Carolina. Duke University Marine Station. Bull. No. 6:1-67
- Hustedt, F. (1927-1966), Die Kieselalgen Deutschland, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. *Kryptogamen Flora von Deutschland*, Teil 1-3, Leipzig, W. Deutschland. 920p., 845p., 816p.
- 鹿島 薫（1986），沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と完新世の古環境変遷，地理学評論，**59**，383-403.
- 加藤君雄・小林 弘・南雲 保（1977），八郎潟調整池のケイソウ類，八郎潟調整池生物相調査会報告，63-137.
- 小杉正人（1988），珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用，第四紀研究，**27**，1-20.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986・1988), Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, *Pascher A. Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 876p., 596p.
- Mori, S. (1986), Diatom Assemblages and Late Quaternary Environmental Changes in the Nobi Plain, Central Japan. *J. Earth Sci. Nagoya Univ.*, **34**, 109-138,
- 森 勇一・伊藤隆彦（1989），古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷，（財）愛知県埋蔵文化財センター年報（昭和63年度），76-91.
- 森 勇一・伊藤隆彦（1990），愛知県岡島遺跡における珪藻遺骸群集，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集 岡島遺跡報告書，43-47.（財）愛知県埋蔵文化財センター
- Patrick, R. and C.W. Reimer (1966・1975), The Diatoms of the United States. *Monogr. Acad. Nat. Sci. Philadelphia*, no 13, Philadelphia. 688., 213p.
- Schoeman, F.R. (1973), A Systematical and Ecological Study of the Diatom Flora of Lesotho with special Reference to the water quality. Pretoria, South Africa. 355p.

珪藻遺骸の顕微鏡写真（第22図） バースケールは10 μ m

- | | |
|--|---|
| 1. <i>Cyclotella stylon</i> Brightwell | 10. <i>Diploneis weissflogii</i> (A. Schmidt) Cleve |
| 2. <i>Auliscus caelatus</i> Bailey | 11. <i>Diploneis crabro</i> Ehrenberg |
| 3. <i>Actinocyclus senarius</i> (Ehr.) Ehrenberg | 12. <i>Diploneis smithii</i> (Bréb.) Cleve |
| 4. <i>Palaria sulcata</i> (Ehr.) Cleve | 13. <i>Rhopalodia musculus</i> (Kütz.) O. Müller |
| 5. <i>Opephora matyi</i> Heribaud | 14. <i>Rhopalodia musculus</i> (Kütz.) O. Müller |
| 6. <i>Nitzschia lanceolata</i> Grunow | 15. <i>Rhaphoneis surirella</i> (Ehr.) Grunow |
| 7. <i>Nitzschia pandriformis</i> Gregory | 16. <i>Navicula lyra</i> Ehrenberg |
| 8. <i>Achnanthes delicatula</i> (Kütz.) Grunow | 17. <i>Navicula yarrensensis</i> Grunow |
| 9. <i>Thalassionema nitzschioides</i> Grunow | 18. <i>Navicula yarrensensis</i> Grunow |



第22図 珪藻遺骸の顕微鏡写真

第V章 考 察

I. 縄文時代前期土器について

1. はじめに

今回の調査でB a区より縄文時代早期から前期にかけての土器が検出された。縄文時代早期後半の土器型式に関しては、磯部幸男氏らは知多半島先端部の遺跡群の調査によって早期後半の粕畑式→上の山式→入海式→石山式とする大枠として確立している土器編年に加えて石山式土器に続く前期初頭の土器型式として塩屋式土器を設定した⁴⁾、その後この土器群は早期末の時期とされた²⁾。前期初頭の土器型式として、豊橋市石塚貝塚出土土器もとに石塚下層式土器³⁾、前期中葉として銚ノ木式土器がおかれていたが⁴⁾、磯部氏、山下勝年氏は南知多町清水ノ上貝塚の調査結果に基づいて前期初頭の土器型式として清水ノ上I式、前葉として清水ノ上II式を設定した⁵⁾。これにより愛知県西半の前期前半は清水ノ上I式→清水ノ上II式→銚ノ木式とする編年が成立した。

清水遺跡の縄文土器は洪積台地崖面直下の小平坦面上の上層砂層中より検出された。この砂層は直接洪積面にのり、上面は現表土のため削平されているが、包含層は攪乱を受けていない単純層である。また、包含層は範囲が狭く、層厚も薄いことから検出された遺物は時期的にまとまりのある状況と考えられる。

今回出土した第I群土器はわずかな小破片であるが、口縁部の貼り付け隆帯の特徴から塩屋式土器に比定され、時期は現在の編年から早期末に位置付けられる。主体となる第II群土器は、器形や中心となる文様構成などから清水ノ上II式に近似したものと考えられるが、以下この土器群について考える。

2. 分類と対比

第II群土器は既に記したように1～10類に分類される。ここでは各類についてこの時期の標準的な資料となる清水ノ上貝塚出土土器と比較する⁶⁾。以下のように清水ノ上I式は文様構成からA～Dの4類に、同じくII式はA～Kの11類に分類されている⁷⁾。

清水ノ上I式 縁帯部をもつ土器群

- A：縁帯部に縦位あるいは斜位の細線文 口縁部に刺突文あり
- B：縁帯部に縦位あるいは斜位の細線文 口縁部に刺突文なし
- C：縁帯部無文 口縁部に刺突文あり
- D：縁帯部無文 口縁部に刺突文なし

清水ノ上II式 縁帯部全体に刺突、押捺による文様を施す土器群

- A：横方向に押引き状の刺突文列を廻らす
- B：斜方向の刺突列を廻らす
- C：縦方向の刺突列を廻らす
- D：横位の刺突文を横方向に直線状に連続して廻らす
- E：不規則に縦方向の刺突列を廻らす

F：斜位の爪形文状の刺突を横方向に廻らし横方向の羽状文を構成する

G：横位の爪形文状の刺突を横方向に廻らす

H：横位あるいは斜位の縦方向爪形文列を廻らす

I：不定方向の爪形文を施す

J：横方向に連続爪形文を廻らす

K：縁部下端に刺突あるいは刻み目を施した部分

ここでは、とくに断らない限り清水ノ上式土器の分類はII式のものをさす。

1・2類 1類と2類は、いずれもアナダラ属の貝殻を原体とする刺突文を口縁部に対して平行に連続して施すことによって刺突文列を廻らす文様構成である。II群の中で最も量が多く、出土土器の中で構成の主体となるものである。これはII式A類と基本的には同じ文様構成で、A類も型式の主要な位置を占めている。この構成でA類は前型式から続いて縁部を明確に作り出して施文を行っている。口縁部の肥厚した部分に施文しており、縁部の幅も1・2類と比較して狭い傾向にある。また、縁部の下端に同じ貝殻原体による刺突角度の異なる刺突列あるいはヘラ状器具による爪形文列を廻らすものがある。1・2類は、口縁部を肥厚する例はほとんど無く、縁部下端の別形態の刺突文列を廻らすものも存在せず、縁部を区分する傾向がA類に比して弱い。文様原体に関しては貝殻の腹縁の原形を残すものが大部分で、特に2類は全てに認められる。これに対してA類は腹縁の形状が残るものが少なく、ある程度刺突部分を加工している原体を使用するものがほとんどである。器形に関しては1・2類は平縁を基本としながら波状口縁が少数ながら存在する（8・10・24）が、II式には明確なものは認められないようである。また、1・2類のかなりの割合の個体は口唇部に刺突あるいは刻み目を有するが、A類で施される例はなく、I・II式全体でもわずかである。

3類 3類は1・2類と同じく貝殻原体の文様である。わずかな小破片であり、口縁部に羽状になる刺突文列を最低一組廻らせる以外全体の文様構成などについては不明である。刺突文列を横方向の羽状の構成にする点ではF類に類似するが、F類はヘラ状器具で爪形文状の刺突文を施しており、やや相違する。

4類 4類は1・2類と比較して少量ながら出土土器の主要部分を占める。文様構成については1・2類と近似しており、施文原体がヘラ状器具によることのみが相違する。縁部を明確に作らないこと、縁部の幅などについても1・2類と同様である。原体が相違する以外A類と文様構成は同じであり、A類との差異も1・2類と同様である。また、刺突文列が羽状になることを除けば、F類の細いヘラ状器具による刺突文列を施す土器に類似しているとも考えられる。器形については平縁を基本として波状口縁があり、この点でも1・2類と共通している。

5類 5類は「C字状」あるいは「D字状」爪形文と呼ばれている土器である。少量であるが確実に主要な土器類に伴うようである。口縁部に爪形文列を廻らすJ類に対応する。J類は清水ノ上II式で主要部分を占めるようである。

- 6 類 6 類は少量ながら、主要な土器類に確実に伴う。D 類に対応する。
- 7 類 7 類は 1 類と 6 類の刺突文列を組み合わせた文様構成であり、主要な土器類に伴うと考えられる。対応する土器は存在しない。
- 8 類 8 類は口縁部下部に横方向の指ツマミ痕列を施し、縁帯部が退化しつつもこれを画するような文様構成をもつものである。縁帯部については①無文、② 2 類と同じくアナダラ属の貝殻原体の斜位の刺突を数条横方向に廻らす、③アナダラ属の貝殻原体の横位の縦方向に連続する刺突を横に間隔をあけて施す、の 3 種類の文様構成がある。K 類は縁帯部内無文のものを含み、①と同様の構成をとるようであるが、K 類は爪形文あるいは刻み目を廻らし相違する。②は A 類に文様構成が類似するが、A 類は縁帯部下部に指ツマミ痕を廻らすものはない。③は C 類と文様構成は類似するが、縦方向の刺突をアナダラ属の貝殻の原形を残す原体によって縁帯部より下部にも施文し、C 類は縁帯部を爪形文によって大部分画するなど若干の相違点がある。指ツマミ痕列によって縁帯部を画する文様構成は II 式には存在せず、I 式に多く認められ、若干時期の逆上るかのようであるが、②・③の特徴的な刺突文列の存在から新しい時期に属し、II 群の主要な土器に確実に伴うものと考えられる。
- 9 類 9 類は細線文を施すものである。多くは検出されていないが、土器群において主要な構成部分をなすものと考えられる。文様構成から、①斜格子文、②不定斜方向、③縦方向羽状、の 3 種類がある。①はへら状器具による単細線と半截竹管状の器具によるものがあるが、単細線によるものが主体的であると考えられる。②はへら状器具による単細線によるものである。③は半截竹管状の器具による。①・②は、清水ノ上 I・II 式には認められない。③は I 式 A・B 類に近似し混入の可能性がある。
- 10 類 10 類の縄文施文のものは少量であるが、羽状縄文に関しては主要な土器類に伴うと考えられる。清水ノ上 I・II 式には確実に伴わない。

このように、出土した土器の分類の中で主体的なものである 1・2・4 類に関しては、清水ノ上 II 式の主要部分となっている A 類などに基本的な文様構成が存在し対応するが、施文原体、縁帯部の形態・幅などに相違が認められる。3 類についても同様と考えられる。5・6 類は II 式に対応する土器類が存在する。7 類は文様を構成する要素については存在するが、文様そのものは対応するものはない。8 類は、文様構成そのものが存在するものもあるが、構成要素に相違があり、基本的には対応しないと考えられる。9 類は主要な土器類であるが、対応するものはない。10 類の縄文原体による施文を行うものは存在しないようである。全体を通じて見た場合、縁帯部の断面・幅などの形状、波状口縁と細かいことであるがその頂点から垂下する隆帯の存在 (37・86)、口唇部に刻み目を大部分有することなどの点で II 式と相違する点が認められる。

清水ノ上 II 式からこの土器群を比較する。II 式の主体となる A・F・J 類などの縁帯部に口縁に対して平行方向の刺突列を廻らす文様構成については上記のように若干の差異があるが対応するものは存在する。また、少量であるが D 類は 6 類に対応する。A・F・J 類以外に II 式の主体を占める B・C・E・H 類の文様構成が近似した土器群がする。これ

らに共通しているのは、縁帯部の下端に刺突文列を廻らし、縁帯部に縦方向あるいは斜方向に刺突文列・爪形文列を施す文様構成である。これに類似した例は、8類の100、その他に含めた136と少数であり、基本的に対応するものは存在しない。また、文様構成が明確でないが、縁帯部下部に刺突文列を施し、縁帯部を無文あるいは口縁に近い部分のみに施文するK類はII式において比較的多く認められるようであるが対応するものは存在しない⁸⁾。すなわち、清水ノ上II式において基本となる文様構成をもつB・C・E・H類及びK類がこの土器群には欠落しているといえる。

3. 編年的位置づけ

清水遺跡の出土土器を清水ノ上遺跡出土資料と比較してきたが、若干問題点をまとめる。

文様構成において清水ノ上II式には主体となるものとして①縁帯部に横方向の刺突文列を施す(A・F・J類)②縁帯部に縦方向の刺突文列を施す(B・C・E・H類)の2種類が存在したが、今回の分類にはほとんど②が含まれず、①の系統(1・2・4類)のみが存在する。①②の刺突文の原体は、加工した二枚貝の貝殻・半截竹管・棒状具・ヘラ状具など多種類に及ぶのに対して、基本的にアナグラ属の貝殻の原形を保つ原体とヘラ状の施文具の2種類になる。これはII式の段階の多様な文様構成が簡略化され、単純な形態のみが残り、これにつれ施文具も少数の単純なものが使用されるに至ったことを示すと考えられる。清水遺跡の土器群で比較的出土した9類の細線文の施される土器については、I式のA・B類の縁帯部に数条一組の細線を斜位に傾きを変えて施すことによって鋸歯状の文様構成をなすものに系譜がもとめられる。9類の単細線と半截竹管による斜格子文あるいは不規則な斜線文はこれの形態変化の進んだものと考えられる。しかし、II式段階にはこの系統のものは存在しないようである⁹⁾。10類の縄文施文の種類はII式段階には認められないようである。

器形については、II式の大部分に存在した口縁部を肥厚することによって縁帯部を作り出す手法がほとんど認められない。これにともない縁帯部下端を刺突列によって画するあるいは縁帯部内とは異なる刺突列を縁帯部下端に施すといった文様構成によって縁帯部を意識的に明確にすることもなされなくなる。また、平縁を基本とするが波状口縁が少数ながら存在し、波状口縁の頂点から短い刻み目あるいは押捺痕を有する隆帯を垂下する例がある。波状口縁は清水ノ上I式には存在するがII式には存在しない点や¹⁰⁾、底部については尖底に近い形態のものがあるがすべて丸底であるのに対してI・II式には平底が存在することなど¹¹⁾、基本的な形態に相違が認められる。

清水ノ上II式に続くとされる銚ノ木式土器との関係では、銚ノ木式土器の古い段階とされる土器群には清水遺跡において主体となっている1～4類の刺突文を有する土器類がある程度の割合で含まれる。しかし、土器群の中心となるのは羽状縄文が施される土器類であり、羽状縄文と爪形文が施文される文様構成などが出現し、爪形文でも5類の連続爪形文あるいは側線のある爪形文列などが主体となるようである。清水遺跡の土器群で組成の中心となった土器類を残しつつ、羽状縄文に示される清水ノ上II式には存在せず、清水遺

跡では少量含まれていたような土器類が主体となっている¹²⁾。

清水遺跡の土器群は清水ノ上Ⅱ式土器と基本的な文様構成で共通する部分を持ちつつもより形態的に簡略化、単純化した文様構成・要素を含み、器形についても縁帯部が退化するなどより新しい要素を含む¹³⁾。これに加えてわずかであるがⅡ式以降に出現し盛行する要素が現れる。鉾ノ木式土器とされる一群の土器と対比した場合、共通する土器類も存在するが、主体となる土器類が相違し、基本的な文様要素に差異が存在する。すなわち清水遺跡の土器群は清水ノ上Ⅱ式に近似しながら、より新しい鉾ノ木式との中間的な様相が認められると考えられる¹⁴⁾。

(酒井俊彦)

(注)

- 1) 磯部幸男他 「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」(『古代学研究』41) 1965
- 2) 磯部幸男「塩屋遺跡出土の縄文土器」(『知多古文化研究』Ⅰ 知多古文化研究会) 1984
- 3) 大参義一他 「東海」(『日本の考古学』Ⅱ 鎌木義昌編) 1965
- 4) 前掲注3 参照
- 5) 磯部幸男 「清水ノ上貝塚出土の縄文式土器」(『清水ノ上貝塚』 南知多町教育委員会) 1976
- 6) 前掲注5における第Ⅱ群第1・2類にあたる。
- 7) 山下勝年 「遺物」(前掲注5に同じ)
- 8) K類は口縁部まである個体が示されておらず、口縁部に縁帯部が存在し、施文されている可能性がある。
- 9) この時期の東海地方土器群と類縁関係にあり、類似した型式変化をする中越式土器においては、前期初頭から前葉にかけての土器の形態変化が連続してとらえられている。中越式土器の在地系の土器は8段階に分けられており、この土器に施される細線文については最古の段階から第1段階：縁帯部に鋸歯状の斜走沈線あるいは数条一組の沈線による粗い斜格子文、第2段階：縁帯部が形骸化し歯状具・半截竹管・へら状具による数条から1条の沈線の粗い斜格子文が施される、第3段階：縁帯部が消失し単沈線の斜格子文が施される、と変化し、以降は細線文は施されなくなるという変遷を示すとされる。この縁帯部と細線文の関係は第1段階が清水ノ上Ⅰ式、第3段階が清水遺跡の土器群に相当し、当地域においても同様の変遷を示し、両者は併行関係にあると考えられる。しかし、中越遺跡の報告書によれば清水ノ上式土器との関係はⅠ式が中越式と、Ⅱ式が次の前期中葉の神ノ木式と併行関係にあるとされ、時期的な差が生じている。現在のところ羽状縄文の盛行の時期などの他の状況から中越式と清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式及び清水遺跡土器群、神ノ木式と鉾ノ木式が併行関係にあると考える。また、清水ノ上Ⅱ式の型式組成に細線文を有する土器類がなく、今後の検討課題となる。参考文献 長野県宮田村教育委員会 『中越遺跡』 1990
- 10) 中越式土器では注9の第1・2段階の土器は平縁で、第3段階で波状口縁が出現し、波頂部から短い隆帯が垂下するとされる。清水遺跡の土器群は清水ノ上Ⅱ式より新しい時期と考えられるから、Ⅰ式において存在した波状口縁がⅡ式においてなくなり、再び清水遺跡の土器群で出現することになり検討を要する。
- 11) 平底が清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式の分類のどの土器に対応するのか不明であり、検討を要する。
- 12) 増子康真「名古屋市鳴海町鉾ノ木貝塚の研究」(『古代人』32) 1976
- 13) 縁帯部の退化について山下氏の御教示を受けた。
- 14) 鉾ノ木式についてはまだ資料的に不十分であり、清水遺跡との比較検討は資料の増加を待つてさらに行う必要がある。

II. 清水遺跡出土の製塩土器

1. はじめに

清水遺跡からは弥生時代、古墳時代、平安時代の製塩土器が出土しており、弥生時代を除いて形式的に知多半島地域圏内に属する。同型式の製塩土器の分布圏内の確実な製塩遺跡としては東縁に位置する。知多地方の製塩土器については、1950年代より明らかにされてきた。杉崎章氏は、古墳時代から平安時代までの製塩土器の脚には基本的に1類から4類までの4つの型式が存在することが明らかにし、その編年の位置付けを行った¹⁾。近藤義郎氏は、杉崎氏の編年の最も古い時期に属する1類を2種類に細分し、各型式の時期的な位置付けを試みた²⁾。さらに立松彰氏は、知多地方の土器製塩の中心的な遺跡である東海市松崎貝塚の第1次の調査によって最終期の1型式を加え、末期の4類と5類の細分化を試みた³⁾。さらに立松氏は、松崎貝塚の第2次の調査結果などに基づいて1類から4類の各型式の細分及び編年的な位置付けを行い⁴⁾、ほぼこれにより知多地方の製塩土器の編年の概要はできあがった。

以上のように知多地方の製塩土器の分類と編年はこれまで各人によって整備されてきており、その大綱については変更の余地はないものと考えられ、以下はこれに依拠しつつ清水遺跡の製塩土器について考える。

2. 弥生時代の製塩土器

A b区より図示しなかったものを含めて脚部が6点が検出された。既に記したようにこれらのうち4点は、A b区南半部の沖積面のⅢ層の下部すなわちA a区のⅣ層に当る層の基層に接する部分より出土した。この層は基本的に遺物をほとんど含まないため伴出した遺物はわずかであり、これによって製塩土器の時期を確定することはできない。また、同層位のごく少量の出土遺物は、縄文時代晩期から古墳時代にわたり、層位によっても時期は決定しえない。また、他の2点は平安時代のS D01の埋土中より検出されたものである。このため製塩土器の形態的特徴を他地域と比較して時期を推測する。

遺物で記したように叩き目を有するもの(213~215)とないもの(216と他1点)、やや小形で叩き目のないもの(217)があり、形態的に異なる種類のものが存在する。これらの脚部を有する製塩土器は、大枠として大阪府南部から和歌山県に分布する弥生時代の製塩土器に類似する⁵⁾。この地域の製塩土器については早くは近藤義郎氏が和歌山県南部古目良遺跡の調査成果に基づいて分類を行っており⁶⁾、その中で目良式土器B類とされたものがこの時期の製塩土器として存在する。和歌山県北部から淡路島にかけての地域においては白石太一郎氏が製塩土器の編年と分類を行い、弥生時代から奈良時代までの製塩土器についてA~G類までの7類に分類し編年を行っている⁷⁾。この中でA類及びB類が弥生時代に属す。また大阪府南部の遺跡の調査結果に基づいて酒井龍一氏がこの時期の製塩土器の分類を行い⁸⁾、同地域の弥生時代から奈良時代にかけて広瀬和雄氏が分類と編年の位置付けを試みている⁹⁾。広瀬氏は、脚台を有するものをI~Ⅳの4型式に分類しているが、脚台I式とされるものが弥生時代後期にかかる¹⁰⁾。

今回検出された製塩土器は近藤氏の目良式土器B類と併行関係にあり、白石氏のA類、広瀬氏の脚台I式に形態的に類似するものである。近藤氏は目良式土器B類を伴出土器より弥生時代後期後葉としている。白石氏はA類を弥生時代中期末葉から後期の時期とし、広瀬氏は脚台I式を畿内第V様式後半～庄内式期としている。これらの編年的位置付けから出土した製塩土器は弥生時代後期を中心として、一部古墳時代初頭の時期に属す可能性が考えられる。しかし、同地域のこの時期の製塩土器の脚部の形態変化として次第に小形化し脚台から倒杯型になる傾向にあり、脚部そのものには叩き目を施さなくなるようである。ゆえに出土した製塩土器の叩き目を有する脚台型のものに関しては、この地域のものと比較する限り小形化はそれほど進んでおらず、弥生時代後期に属するものと考えられる。

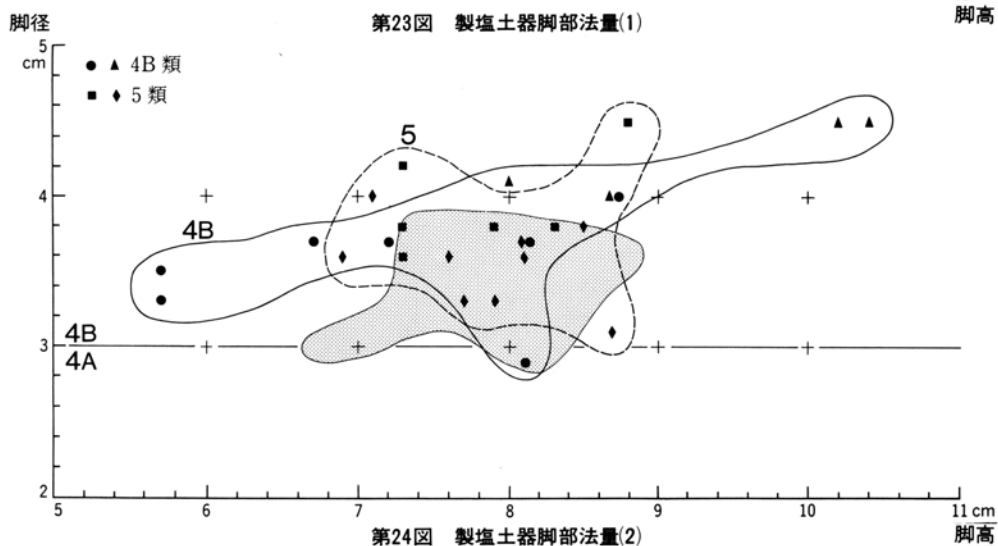
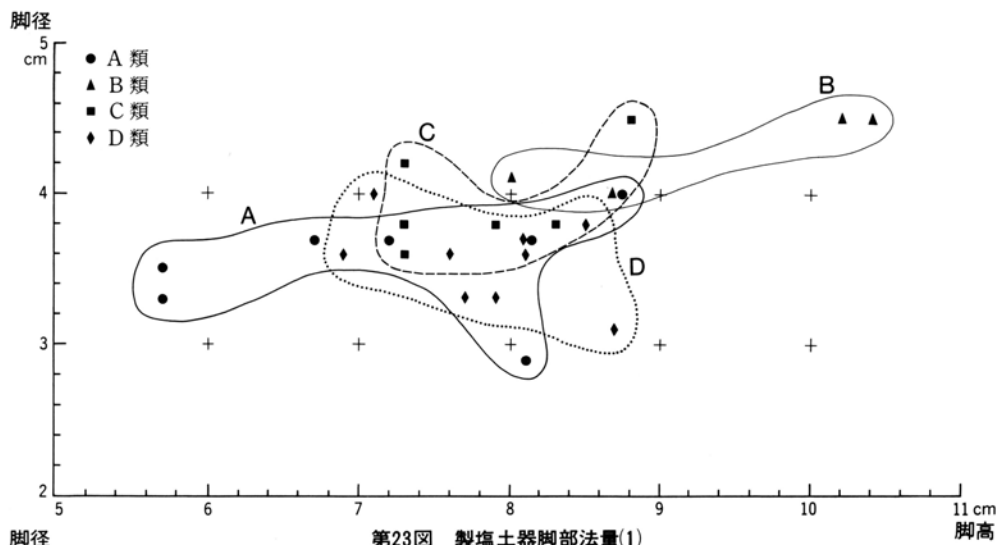
大阪府南部の泉佐野市湊遺跡から同時期の製塩土器が一括して多量に出土している¹¹⁾。その脚部の調整技法については、叩きのみのもの約55%、叩きとそれ以外の調整のもの約21%、叩きを施さず撫でを含めた他の調整によるもの約24%である。すなわち叩きによる調整を行うものは全体の約76%、全く叩きによる調整を行わないものは約24%であり、全体の約4分の1は叩き目をもたない。同地域のこの時期の製塩土器には叩きによる調整を行わない脚部が一定の割合で存在するようである。このことから叩き目のない216は、形態的に叩き目をもつものと大きな相違はなく、出土地点も同じであることなどから叩き目をもつものと同時期であると考えられる。図示したなかでS D01より出土し、他の個体と出土地点の異なる217は叩き目をもたず小形であり、やや退化した形態であることからこの中でも時期的に若干新しいと考えられる¹²⁾。

3. 古墳時代の製塩土器

遺物で記したようにこの時期の製塩土器の脚部が10点出土しているが、杯部は検出されず全形の分かるものはない。これらの筒状の脚部を有する形態のものは、知多地方において杉崎氏の分類では1類とされ、古墳時代後半の時期があたえられている。近藤氏は、この1類を下端部の形状などより1A・1Bの2種に細分している¹³⁾。さらに東海市松崎貝塚の調査結果などに基づいて立松氏は近藤氏の分類の1A類を細分する形で形態分類を行っている¹⁴⁾。これによれば、近藤氏の1A類すなわち丁寧な外面調整で脚部の下端に平坦面を作り出す形態のものを1A：脚部の径、脚高とも1類のなかで最小のもの、1B：1A類より大形のものに細分し、近藤氏の1B類にあたる脚部の下端が摘んだ状態で平坦面を作り出さず外面調整の粗雑なものを1C類としている。時期は1A：5世紀末葉～6世紀前葉、1B：6世紀中葉～後葉、1C：6世紀末～7世紀前葉とされる。

今回出土した製塩土器については、古墳時代の遺物包含層と考えられるAb区黒青色土から出土した製塩土器には他の遺物は伴出せず、他の個体も時期の異なる包含層と溝より出土したものであり直接時期決定できない。形態的には外表面はあまり調整されず手圧痕が明瞭に残り、下端部は平坦面を作り出さないものであり、近藤氏の分類の1B類、立松氏の1C類に相当し、これと同時期のものと考えられる。

4. 平安時代の製塩土器



A a 区から多量に杯部と脚部が出土した。これらは同層位より検出されたが、脚部については形態的にA～Dの4類に分類することが可能である。A類からD類までの器面調整および形態の差異は漸移的なものであり、傾向性が認められ、時間的な差異と考えられる。外面調整については、丁寧な調整により成形痕を撫で消すA類から次第に調整がなされず指圧痕が残るB・C類となり、最終的にはほとんど無調整のD類に変化していく。形態に関しては下端に向かって円錐状に先細りするいわゆる角型のA・B類と手圧痕の残る棒状の「にぎりなし」のC・D類に分類される。杯部の形態に関しては、A類：内底面が凹み脚部からの杯部の立上りの比較的急な漏斗の受け口的な形態、B類：内底面の凹みが消失し杯部の立上りが緩やかになる漏斗の受け口的な形態、C・D類：杯部の立上りが水平に近く平底の鉢状の形態であり、A類からD類に一貫性をもって変化するようである。A類からD類の脚高と脚径（脚の基部の径）との関係を示せば第23図のとうりである。個体数が少ないが、脚高・脚径とも小形のA類から大形のB類に変化した後にその中間的なC類に変化し、D類はC類とほぼ同様の法量を保つ。

この時期の製塩土器については杉崎氏の分類の4類を受けて、立松氏が松崎貝塚の調査資料に基づく細分とその後続く型式の設定を行なっている¹⁵⁾。杉崎氏の4類を4A類と

してこれより脚径が太く大形化した形態のものを4 B類とし、4 B類が新しく、その次の型式として5類をおいている。5類の脚部は、5 A：棒状の基部の太いもので粗雑な調整が加えられる水平断面円形の形態、5 B：成形痕が器面に凹凸となって残り基部の水面断面がやや方形で細い形態、に細別され、脚高はA・B類とも差はなく型式的に4類に近い5 A類が先行するとしている。

今回出土した製塩土器の分類と立松氏の分類との対応関係については、A・B類はその形態から4類に属し、大部分は基部径2.0cm以上であり、4 B類に対応する¹⁶⁾。(第24図) C類は形態と調整の状態より5 A類に対応し、D類は同じく5 B類に対応する¹⁷⁾。第24図にA・B類を4 B類にC・D類を5類として脚高と脚径の関係を示したが、立松氏の分類の5 B類(網フセ部分)とC・D類は近似した数値をとる。立松氏は具体的に数値を示していないが5 B類は5 A類より脚径が若干細いとされ、C・D類の脚径からもその傾向がうかがわれる。(第23図)

これらの製塩土器の所属時期については松崎貝塚などにおける伴出遺物から4 B類が9世紀後半から10世紀前半、5 B類が10世紀後半から11世紀前半とされる¹⁸⁾。A a区のⅢ層からはほぼ同時期の灰釉系陶器、土師器甕が出土しておりこの时期的な位置付けと対応していると考えられる。

5. まとめ

以上からⅠ：弥生時代後期、Ⅱ：古墳時代末、Ⅲ：平安時代前期～中期の3時期に土器製塩が遺跡周辺において行われたことが推測されるが、その状況については時期によって異なる。遺跡の立地する砂堆はA a区のⅢ層の堆積した時期すなわちⅢ期を含む平安時代前半に形成されたものと考えられる。Ⅰ期においてはまだ砂堆は存在せず、この時期の製塩土器の出土したA a区及びA b区の南半は海水域である。A b区のA a区Ⅳ層に当たる層は砂堆の最下部にあたり、同層から出土したⅠ期の製塩土器は砂堆形成開始時の二次堆積の遺物である。またS D01は平安時代末の時期であり、埋土中から出土したⅠ期の製塩土器は混入である。遺物の出土量と出土状態からⅠ期の製塩作業の行われた範囲及び規模は明らかにしえないが、碧海台地の半島状の先端から湾入部の100mほどの間の現在台地と砂堆の接する地区において行われたと考えられる。砂堆の形成以前は狭い砂浜であったと推測され、同じ時期でも若干新しくなるがS D01の埋土から2個体検出されたことからこの砂浜と背後の碧海台地縁辺部において行われていたものと考えられる。

Ⅰ期の製塩土器は形態より大阪府南部から和歌山県北部の瀬戸内海沿岸地域の直接の影響を受けたものと考えられる。これまで数多くの製塩遺跡が知られ、調査されてきたが渥美半島地域を含めて愛知県内に類例はなく、型式的に後続するものも存在しないようである¹⁹⁾。おそらく海を通じた交流によって出現したものであり、人間そのものの移動に伴うものと推測される。これはこの地域に生じた需要に応じたものではなかったため定着せずこの形態の製塩は継承されることなく、局部的で一時的なものにとどまったと考えられる。現在のところ知多地方の土器製塩の開始は、東海市塚森遺跡出土の資料に基づき古墳時代

中期5世紀後半とされている²⁰⁾。この時期の資料は東海市近辺に限られ、出土量も少なく、この後一旦中断し、6世紀に入って本格的に製塩が行われるようになり、遺跡数・出土量も増大する。「塚森式土器」は瀬戸内地域の影響を受けて出現したようであり²¹⁾、知多地方の独自の製塩土器である1類はこれに型的に連続するものと考えられている²²⁾。これは、I期とは相違して自生的な需要に対応したものであったために存続し、独自の形態の土器を作り出し本格的な製塩が開始されたと推測される。

II期については、A b区の碧海台地崖面直下において砂堆の砂層下の包含層中より出土していることから、I期と同様の地区で砂堆形成以前の狭い海岸線で製塩が行われたと考えられる。しかし、調査範囲は製塩作業の行われた部分から外れており、その規模・範囲などについては明らかにしえない。また、前後の型式が検出されておらず、同時期の他の遺物もほとんど出土していないことから、一時的な小規模なものの可能性が高い。

砂堆の形成時のIII期は、9世紀後半から11世紀前半までの約200年にわたると考えられる。多量に出土したが、製塩作業の行われていた区域から流れてきた2次堆積的な層からの出土遺物であり、操業期間などを考慮した場合に一定時期の規模などについて実態を示したものではない。碧海台地と接続する砂堆上の緩斜面において製塩作業が行われたと推測され、実際の規模等については不明である。砂堆の形成によって製塩に適した環境が生まれ、他時期に比較して大規模に継続的に行われたものと推測される。

今回の調査は製塩遺跡に関するものとしては、知多地方以外では少ない例である。出土遺物などに関しては同地域のこれまでの認識に沿ったものであるが、I期の位置付けなどについては今後の課題である。

(酒井俊彦)

(注)

- 1) 杉崎 章 「知多半島における古代漁村集落の土器」(『古代学研究』15・16) 1956
同「東海地方における古代海浜集落の文化」(『歴史研究』10) 1962
- 2) 近藤義郎 「知多・渥美地方における製塩土器の研究」(『日本塩業の研究8』日本塩業研究会) 1965
- 3) 立松 彰 「第IV区の調査」(『松崎貝塚』東海市教育委員会) 1977
- 4) 立松 彰 「知多地方における製塩土器の編年」(『知多古文化研究』I 知多古文化研究会) 1984
- 5) 近藤義郎 「原始・古代」(『日本塩業大系 原始・古代・中世』日本専売公社) 1980
- 6) 近藤義郎 『古目良遺跡』岡山大学考古学研究報告第3冊 1964
- 7) 森 浩一・白石太一郎 『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』同志社大学文学部考古学調査報告第2冊1968 白石太一郎「畿内周辺地域における奈良時代の製塩遺跡について」(『古代文化』20-10 古代学研究会) 1968
- 8) 酒井龍一 「和泉に於ける『伝統的Ⅴ様式』に関する覚え書」(『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのⅢ 豊中・古池遺跡調査会) 1976
- 9) 広瀬和雄 「小島東遺跡」(『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会) 1978
- 10) 広瀬和雄 「近畿地方における土器製塩」(『考古学ジャーナル』298) 1988
- 11) 『湊遺跡発掘調査報告書』和泉佐野市教育委員会1982
- 12) 泉佐野市教育委員会 鈴木陽一氏のご教示を受けた。
- 13) 前掲注2 参照
- 14) 前掲注4 参照
- 15) 前掲注3 参照
- 16) 前掲注4における4A・4Bの分類に従った。A・B類の差異は何を示すのか明確にしえないが、時期差と考えておく。

- 17) 立松氏は前掲注3において杉崎氏の4類を分類し、5類を加えて[4A・(4B)]→[5A・5B]とする型式の細分・編年案を示された。その後未確定だった4B類を分立して前掲注4において[4A・4B]→[5]とした。この分類では前案の4B類と5A類を合わせて4B類とし、前案の5B類のみを5類としている。すなわち前案の分類に従って示せば、[4A・4B+5A]→[5B]と変更された。このため新しい分類の4B類とA・B類および新しい5類とC・D類の比較・対応について若干齟齬があるが、以下前掲注3の旧分類に沿って記す。
- 18) 前掲注4参照。
- 19) 渥美地域の最も古い製塩土器は渥美町青山貝塚から出土しており、瀬戸内地域の影響によって成立したものとされ、類例は松崎貝塚でも出土しているようである。時期は古墳時代中期とされる。
- 20) 前掲注4参照
- 21) 立松 章 『塚森遺跡』(『松崎貝塚第2次発掘調査報告書』東海市教育委員会) 1984
- 22) 前掲注4参照

第Ⅵ章 まとめ

今回の調査では縄文時代から江戸時代中期にかけての遺構・遺物が検出されたが、縄文時代前期の土器群、製塩土器及び中世末の貝塚についての検討が今後の課題となる。

縄文前期の土器については愛知県西部域における土器編年上の位置を若干考察したが、前後の土器型式と比較して内容が把握でき、各土器類の系統も一応たどることが可能である。しかし、出土量が少なく、ほとんどが小破片であり器形などについて明らかにすることはできない。また、単純層からまとまった状況で検出されたが、早期の土器など明らかに時期的に遡るものが少量含まれることからすべて同一時期のものではなく、分類されなかったより新しい時期のものを含む可能性もある。さらにこの土器群と同時期と考えられる資料で良好なものがなく不明であるが、これに加えるべき土器類が存在することも考えられる。この時期の土器群が層位的に把握できる資料との対比などを通じて型式の組成内容と編年の位置付けを明らかにし、さらに資料の増加によって分布的な位置付けも考える必要がある。

西三河の三河湾沿いで各時代を通じて発掘調査によって土器製塩を確認した例はほとんど存在しない。今回遺跡の位置するかつての砂堆上などで弥生時代から平安時代にかけて断続的に土器製塩が行われていたことが明らかになったが、その中で問題になるのは弥生時代の製塩である。従来当地域においては古墳時代中期以降に土器製塩が開始されたとされるが、さらに時代を遡る時期に行われていたことが明らかになった。しかし、資料的に限られており、付随する他の遺物も出土していない。この東海地方における土器製塩の中で占める位置については、類例の増加及び三河地域の数遺跡において認められる畿内地域との結び付きを示す資料の検討などを待ってさらに考えたい。

西尾市の南西地域の碧海台地の縁辺部には中世末を中心とした時期のいわゆる貝塚が点在する。C区において検出された貝殻の堆積・廃棄土坑もその一つである。16世紀前半、この調査区を中心とする区域では貝殻の大廃棄土坑、粘土の採掘坑を掘るなど、土地改変が集中的に行われる。しかし、これは短期間で終り16世紀後半・17世紀は空白となる。18世紀に入ると集落が形成され、遺構・遺物の量が再び増加する。これは、矢作川の流路変更による土地利用と集落域の変化に伴うものであるが、その実態については当地域の同時期の集落跡の調査及び水田開発に関する文献資料の検討を通じて明らかにしたい。

清水遺跡の調査によって得られた資料は時期も種類も多様である。今後西三河の地域史に新たな知見を加えるために、他の資料や異なる分野の成果を検討してその内容を深めることが必要と考えられる。

(酒井俊彦)

付 表

主要遺構一覽表

遺構番号	調査区別遺構番号	深さ(m)	長径(m)	短径(m)	時 期	遺構番号	調査区別遺構番号	深さ(m)	長径(m)	短径(m)	時 期
溝						SK056	89Ca SK28	0.3	0.4	0.3	
SD01	89Ab SD01				平安時代末	057	89Ca SK47	0.2	0.5	0.4	
02	89Ca SD01				江戸時代中期	058	89Ca SK43	0.1	1.2	0.7	
土壇						059	89Ca SK41	0.2	0.4	0.3	
SK001	89Bb SK31	0.3	1.5	0.9		060	89Ca SK40	0.2	0.6	0.5	
002	89Bb SK30	0.8	4.6		近世	061	89Ca SK39	0.2	0.5	0.4	
003	89Bb SK27	0.3		0.4		062	89Ca SK42	0.6	1.9		近世
004	89Bb SK27	0.1		0.2		063	89Ca SK11	0.7			中世末
005	89Bb SK26	0.1	0.8	0.5		064	89Cb SK69	0.1	0.9	0.9	
006	89Bb SK24	0.1	1.2			065	89Cb SK68	0.2	4.1	3.2	
007	89Bb SK23	0.5	1.4	1.2		066	89Cb SK67	0.8			中世末
008	89Bb SK22	0.2	0.6	0.2		067	89Cb SK65	3.7	8.1		中世末
009	89Bb SK21	0.5			近世	068	89Cb SK66	0.8		5.2	中世末
010	89Bb SK20	0.5				069	89Cb SK64	1.0	10.5	5.4	中世末
011	89Bb SK08	0.3	1.0	0.7		070	89Cb SK63	0.8		4.5	中世末
012	89Bb SK07	0.2	0.5	0.5		071	89Cb SK70	0.3	1.2	1.0	
013	89Bb SK09	0.3	0.7	0.6		072	89Cb SK48	0.6			
014	89Bb SK10	0.2	0.5	0.5		073	89Cb SK47	2.0	7.6		中世末
015	89Bb SK12	0.2	0.4	0.3		074	89Cb SK45	0.5	1.1	7.5	
016	89Bb SK14	0.1	0.7	0.5		075	89Cb SK46	1.0		2.5	
017	89Bb SK16	0.6		1.4	近世	076	89Cb SK42	0.1	0.4	0.4	
018	89Bb SK04	0.2	0.7	0.6		077	89Cb SK44	0.1	0.5	0.4	
019	89Bb SK05	0.2	0.6	0.5	近世	078	89Cb SK43	0.2	0.5	0.5	
020	89Bb SK03	0.5	1.1	0.8		079	89Cb SK14	0.2	0.7	0.7	
021	89Bb SK01	0.3				080	89Cb SK15	0.2	1.1	0.9	
022	89Bb SK02	0.2	0.5	0.3		081	89Cb SK16	0.1	0.8	0.7	
023	89Bb SK17	0.4		2.0		082	89Cb SK17	0.2	1.0	0.9	
024	89Ca SK01	0.5			中世末	083	89Cb SK52	0.3	0.7	0.3	
025	89Ca SK02	0.3	1.0	0.8		084	89Cb SK49	0.2	6.2	2.3	
026	89Ca SK44	0.1	0.3	0.3		085	89Cb SK19	0.2	0.6	0.4	
027	89Ca SK07	0.3	0.8	0.7		086	89Cb SK30	0.4	1.2	0.5	近世
028	89Ca SK05	0.2	0.9	0.8		087	89Cb SK13	0.3	0.7	0.6	
029	89Ca SK06	0.2	0.4	0.4		088	89Cb SK31	0.3	1.2	0.8	
030	89Ca SK08	0.2	2.2	1.7	江戸時代中期	089	89Cb SK22	0.1	0.5	0.4	
031	89Ca SK09	1.1	1.7	1.3	江戸時代中期	090	89Cb SK23	0.1	0.4	0.3	
032	89Ca SK04	0.2	0.5	0.4		091	89Cb SK18	0.1	0.9	0.6	
033	89Ca SK03	0.3	0.6	0.5		092	89Cb SK11	0.3	1.2	1.2	
034	89Ca SK46	0.6	0.9	0.9		093	89Cb SK24	0.2	1.0	0.9	
035	89Ca SK15	0.8	0.9	0.8	近世	094	89Cb SK25	0.4	2.1	1.7	近世
036	89Ca SK14	0.4	0.6	0.6	近世	095	89Cb SK08	0.3	1.6	1.2	近世
037	89Ca SK13	0.3	0.5	0.4		096	89Cb SK58	0.2	0.6	0.5	
038	89Ca SK12	0.4	1.3	1.0		097	89Cb SK39	0.2	4.9	3.8	
039	89Ca SK17	0.1	0.4	0.2		098	89Cb SK54	0.2	0.9	0.8	
040	89Ca SK16	0.3	0.5	0.5		099	89Cb SK55	0.1	1.1	1.1	
041	89Ca SK21	0.5		0.7	近世	100	89Cb SK56	0.2	0.7	0.7	
042	89Ca SK22	0.4		0.9	近世	101	89Cb SK26	0.5			
043	89Ca SK20	0.2	0.9			102	89Cb SK27		0.9		
044	89Ca SK45	0.4	0.9	0.6		103	89Cb SK35	0.4	1.3	1.1	近世
045	89Ca SK26	0.2	0.5	0.5	近世	104	89Cb SK34	0.2	2.0	1.0	
046	89Ca SK25	0.5	1.3			105	89Cb SK09	0.1		0.9	
047	89Ca SK33	0.3	0.7	0.6	近世	106	89Cb SK32	0.5	3.1		
048	89Ca SK35	0.3	0.5	0.3		107	89Cb SK51	0.4	1.3		
049	89Ca SK38	0.3				108	89Cb SK30	0.2		1.6	
050	89Ca SK36	0.2				109	89Cb SK72	0.6		1.1	
051	89Ca SK37	0.4	1.2	0.8		110	89Cb SK33	0.3	4.5	0.8	近世
052	89Ca SK34	0.1	0.5	0.4		111	89Cb SK07	0.2	1.3	1.2	
053	89Ca SK32	0.3	0.8	0.6	近世	112	89Cb SK29	0.1	1.0	0.9	
054	89Ca SK30	0.3	0.8	0.4		113	89Cb SK40	2.7	9.8		中世末
055	89Ca SK29	0.3	1.0	0.8							

掲載遺物一覧表

1. 縄文土器

※法量単位cm

番号	登録番号	器種	分類	部位	番号	登録番号	器種	分類	部位	番号	登録番号	器種	分類	部位
1	89Ba-329	深鉢	1類	口縁部	58	89Ba-179	深鉢	2類	体部	115	89Ba-246	深鉢	9類	体部
2	89Ba-257	深鉢	1類	口縁部	59	89Ba-114	深鉢	2類	体部	116	89Ba-208	深鉢	9類	体部
3	89Ba- 90	深鉢	1類	口縁部	60	89Ba- 70	深鉢	3類	口縁部	117	89Ba-293	深鉢	9類	体部
4	89Ba- 7	深鉢	1類	口縁部	61	89Ba-305	深鉢	3類	体部	118	89Ba-311	深鉢	9類	体部
5	89Ba-224	深鉢	1類	体部	62	89Ba-105	深鉢	3類	体部	119	89Ba-184	深鉢	9類	体部
6	89Ba-323	深鉢	1類	口縁部	63	89Ba-307	深鉢	4類	口縁部	120	89Ba-227	深鉢	9類	体部
7	89Ba- 18	深鉢	1類	口縁部	64	89Ba-214	深鉢	4類	口縁部	121	89Ba-269	深鉢	10類	体部
8	89Ba- 4	深鉢	1類	口縁部	65	89Ba- 77	深鉢	4類	口縁部	122	89Ba-262	深鉢	10類	体部
9	89Ba- 5	深鉢	1類	口縁部	66	89Ba-186	深鉢	4類	口縁部	123	89Ba- 67	深鉢	10類	体部
10	89Ba-189	深鉢	1類	口縁部	67	89Ba-157	深鉢	4類	体部	124	89Ba-267	深鉢	10類	体部
11	89Ba- 22	深鉢	1類	体部	68	89Ba-324	深鉢	4類	体部	125	89Ba- 81	深鉢	10類	体部
12	89Ba-118	深鉢	1類	体部	69	89Ba- 87	深鉢	4類	体部	126	89Ba-275	深鉢	10類	体部
13	89Ba-254	深鉢	1類	体部	70	89Ba-206	深鉢	4類	体部	127	89Ba- 86	深鉢		口縁部
14	89Ba-328	深鉢	1類	体部	71	89Ba-295	深鉢	4類	体部	128	89Ba- 78	深鉢		体部
15	89Ba- 8	深鉢	1類	体部	72	89Ba-273	深鉢	4類	体部	129	89Ba-254	深鉢		口縁部
16	89Ba-226	深鉢	1類	体部	73	89Ba-219	深鉢	4類	体部	130	89Ba-259	深鉢		口縁部
17	89Ba-321	深鉢	1類	体部	74	89Ba-238	深鉢	4類	体部	131	89Ba-231	深鉢		口縁部
18	89Ba- 1	深鉢	2類	口縁部	75	89Ba- 66	深鉢	4類	体部	132	89Ba- 13	深鉢		口縁部
19	89Ba-241	深鉢	2類	口縁部	76	89Ba-281	深鉢	4類	体部	133	89Ba-185	深鉢		体部
20	89Ba-17	深鉢	2類	口縁部	77	89Ba-158	深鉢	4類	体部	134	89Ba- 20	深鉢		口縁部
21	89Ba-230	深鉢	2類	口縁部	78	89Ba-285	深鉢	4類	体部	135	89Ba-209	深鉢		口縁部
22	89Ba-101	深鉢	2類	口縁部	79	89Ba-156	深鉢	4類	体部	136	89Ba-317	深鉢		体部
23	89Ba-235	深鉢	2類	口縁部	80	89Ba-151	深鉢	5類	体部	137	89Ba-119	深鉢		口縁部
24	89Ba-221	深鉢	2類	口縁部	81	89Ba-152	深鉢	5類	体部	138	89Ba-289	深鉢		体部
25	89Ba- 97	深鉢	2類	口縁部	82	89Ba-302	深鉢	5類	体部	139	89Ba- 42	深鉢		体部
26	89Ba- 99	深鉢	2類	口縁部	83	89Ba-188	深鉢	6類	口縁部	140	89Ba-147	深鉢		体部
27	89Ba-213	深鉢	2類	口縁部	84	89Ba-298	深鉢	6類	口縁部	141	89Ba- 61	深鉢		体部
28	89Ba-107	深鉢	2類	口縁部	85	89Ba-330	深鉢	6類	口縁部	142	89Ba-142	深鉢		体部
29	89Ba-212	深鉢	2類	口縁部	86	89Ba-308	深鉢	6類	口縁部	143	89Ba- 26	深鉢		体部
30	89Ba-100	深鉢	2類	口縁部	87	89Ba-271	深鉢	6類	口縁部	144	89Ba- 29	深鉢		体部
31	89Ba-300	深鉢	2類	口縁部	88	89Ba-233	深鉢	6類	体部	145	89Ba-164	深鉢		体部
32	89Ba- 98	深鉢	2類	口縁部	89	89Ba- 9	深鉢	6類	体部	146	89Ba- 47	深鉢		体部
33	89Ba-244	深鉢	2類	口縁部	90	89Ba-333	深鉢	6類	体部	147	89Ba-284	深鉢		体部
34	89Ba-180	深鉢	2類	口縁部	91	89Ba-182	深鉢	6類	体部	148	89Ba- 50	深鉢		体部
35	89Ba-313	深鉢	2類	口縁部	92	89Ba-327	深鉢	6類	体部	149	89Ba-134	深鉢		体部
36	89Ba-332	深鉢	2類	口縁部	93	89Ba- 14	深鉢	6類	体部	150	89Ba- 62	深鉢		体部
37	89Ba-153	深鉢	2類	体部	94	89Ba-256	深鉢	7類	口縁部	151	89Ba- 23	深鉢		体部
38	89Ba-109	深鉢	2類	体部	95	89Ba-187	深鉢	7類	口縁部	152	89Ba- 51	深鉢		体部
39	89Ba-120	深鉢	2類	口縁部	96	89Ba-292	深鉢	8類	体部	153	89Ba- 57	深鉢		体部
40	89Ba- 17	深鉢	2類	体部	97	89Ba- 84	深鉢	8類	体部	154	89Ba-263	深鉢		体部
41	89Ba-315	深鉢	2類	体部	98	89Ba- 83	深鉢	8類	体部	155	89Ba-291	深鉢		体部
42	89Ba-249	深鉢	2類	体部	99	89Ba-320	深鉢	8類	体部	156	89Ba- 96	深鉢		体部
43	89Ba-274	深鉢	2類	体部	100	89Ba-335	深鉢	8類	体部	157	89Ba-150	深鉢		体部
44	89Ba- 75	深鉢	2類	体部	101	89Ba-255	深鉢	8類	体部	158	89Ba- 49	深鉢		体部
45	89Ba-108	深鉢	2類	体部	102	89Ba- 85	深鉢	8類	体部	159	89Ba- 60	深鉢		体部
46	89Ba-115	深鉢	2類	体部	103	89Ba-283	深鉢	8類	体部	160	89Ba-172	深鉢		体部
47	89Ba- 10	深鉢	2類	体部	104	89Ba-163	深鉢	9類	口縁部	161	89Ba-316	深鉢		体部
48	89Ba-239	深鉢	2類	体部	105	89Ba-264	深鉢	9類	口縁部	162	89Ba-251	深鉢		体部
49	89Ba-322	深鉢	2類	体部	106	89Ba- 82	深鉢	9類	口縁部	163	89Ba-148	深鉢		体部
50	89Ba- 12	深鉢	2類	体部	107	89Ba-303	深鉢	9類	口縁部	164	89Ba-306	深鉢		体部
51	89Ba-111	深鉢	2類	体部	108	89Ba-304	深鉢	9類	口縁部	165	89Ba- 59	深鉢		体部
52	89Ba-110	深鉢	2類	体部	109	89Ba- 95	深鉢	9類	口縁部	166	89Ba-334	深鉢		体部
53	89Ba-240	深鉢	2類	体部	110	89Ba-174	深鉢	9類	体部	167	89Ba-277	深鉢		体部
54	89Ba- 6	深鉢	2類	体部	111	89Ba-245	深鉢	9類	体部	168	89Ba-270	深鉢		体部
55	89Ba- 11	深鉢	2類	体部	112	89Ba-137	深鉢	9類	体部	169	89Ba-314	深鉢		体部
56	89Ba- 15	深鉢	2類	体部	113	89Ba-319	深鉢	9類	体部	170	89Ba- 76	深鉢		体部
57	89Ba-106	深鉢	2類	体部	114	89Ba- 94	深鉢	9類	体部	171	89Ba-310	深鉢		体部

番号	登録番号	器種	分類	部位	番号	登録番号	器種	分類	部位	番号	登録番号	器種	分類	部位
172	89Ba-39	深鉢		体部	186	89Ba-48	深鉢		体部	200	89Ba-193	深鉢		底部
173	89Ba-198	深鉢		体部	187	89Ba-223	深鉢		体部	201	89Ba-194	深鉢		底部
174	89Ba-176	深鉢		体部	188	89Ba-24	深鉢		体部	202	89Ba-191	深鉢		底部
175	89Ba-265	深鉢		体部	189	89Ba-276	深鉢		体部	203	89Ba-195	深鉢		底部
176	89Ba-31	深鉢		体部	190	89Ba-45	深鉢		体部	204	89Ba-242	深鉢		底部
177	89Ba-124	深鉢		体部	191	89Ba-203	深鉢		体部	205	89Ba-232	深鉢		口縁部
178	89Ba-123	深鉢		体部	192	89Ba-183	深鉢		体部	206	89Ba-272	深鉢		体部
179	89Ba-129	深鉢		体部	193	89Ba-144	深鉢		体部	207	89Ba-160	深鉢		体部
180	89Ba-33	深鉢		体部	194	89Ba-218	深鉢		体部	208	89Ba-261	深鉢		体部
181	89Ba-32	深鉢		体部	195	89Ba-192	深鉢		底部	209	89Ba-80	深鉢		体部
182	89Ba-34	深鉢		体部	196	89Ba-225	深鉢		底部	210	89Ba-229	深鉢		体部
183	89Ba-236	深鉢		体部	197	89Ba-190	深鉢		底部	211	89Ba-161	深鉢		体部
184	89Ba-37	深鉢		体部	198	89Ba-215	深鉢		底部	212	89Ba-301	深鉢		体部
185	89Ba-46	深鉢		体部	199	89Ba-325	深鉢		底部					

2. 弥生時代・古墳時代

番号	登録番号	種別	器種	部位	器高	口径	底径	出土地点	番号	登録番号	種別	器種	部位	器高	口径	底径	出土地点
213	89Ab-47		製塩土器	脚部			4.9	検出	225	89Ab-38		製塩土器	脚部			2.3	SD01
214	89Ab-45		製塩土器	脚部			3.8	検出	226	89Aa-82		製塩土器	脚部			2.4	検出
215	89Ab-46		製塩土器	脚部			3.6	検出	227	89Ab-36		製塩土器	脚部			2.8	包含層
216	89Ab-44		製塩土器	脚部			4.1	検出	228	89Ab-22	土師器	甕	口縁部	12.4			SD01
217	89Ab-50		製塩土器	脚部			3.5	SD01	229	89Ab-24	土師器	甕	口縁-体部	17.8			SD01
218	89Ab-40		製塩土器	脚部				SD01	230	89Ab-23	土師器	甕	口縁-体部	14.4			SD01
219	89Ab-42		製塩土器	脚部				SD01	231	89Ab-25	土師器	甕	口縁-体部	16.4			SD01
220	89Ab-41		製塩土器	脚部				SD01	232	89Ab-26	土師器	甕	口縁-体部	18.6			SD01
221	89Ab-43		製塩土器	脚部				SD01	233	89Ab-32	土師器	甕		17.9			包含層
222	89Ab-39		製塩土器	脚部			2.4	SD01	234	89Aa-19	土師器	高杯	杯部				検出
223	89Aa-81		製塩土器	脚部			2.0	検出	235	89Aa-22	土師器	器台		8.3	7.4	9.0	検出
224	89Ab-37		製塩土器	脚部			1.7	包含層	236	89Aa-24	土製品	不明		6.4		3.4	検出

3. 平安時代製塩土器(脚部)

番号	登録番号	分類	脚高	脚径	番号	登録番号	分類	脚高	脚径	番号	登録番号	分類	脚高	脚径
237	89Aa-56	A類	5.7	2.5	262	89Aa-79	B類		3.5	287	89Aa-119	D類	8.2	2.7
238	89Aa-58	A類	5.7	2.3	263	89Aa-82	B類		3.1	288	89Aa-98	D類	8.7	2.1
239	89Aa-59	A類	6.7	2.7	264	89Aa-73	B類		3.1	289	89Aa-97	D類	8.5	2.8
240	89Aa-54	A類	7.2	2.7	265	89Aa-81	B類		2.9	290	89Aa-120	D類	8.1	2.7
241	89Aa-52	A類	7.6	2.7	266	89Aa-77	B類		2.9	291	89Aa-114	D類	7.9	2.3
242	89Aa-55	A類	8.1	2.7	267	89Aa-92	C類	7.9	2.8	292	89Aa-117	D類	7.7	2.3
243	89Aa-57	A類		2.9	268	89Aa-83	C類	7.3	3.2	293	89Aa-109	D類		3.1
244	89Aa-53	A類	7.2	2.7	269	89Aa-90	C類	7.3	2.6	294	89Aa-107	D類		4.1
245	89Aa-70	A類	8.7	3.5	270	89Aa-85	C類	8.3	2.8	295	89Aa-116	D類		2.9
246	89Aa-69	A類		2.1	271	89Aa-84	C類	8.1	3.2	296	89Aa-111	D類		3.1
247	89Aa-65	A類		2.7	272	89Aa-88	C類	8.8	3.5	297	89Aa-112	D類		4.1
248	89Aa-66	A類		2.1	273	89Aa-89	C類		3.9	298	89Aa-110	D類		2.8
249	89Aa-64	A類		2.4	274	89Aa-91	C類		2.9	299	89Aa-115	D類		3.2
250	89Aa-60	A類		3.4	275	89Aa-87	C類		2.8	300	89Aa-123	D類		3.2
251	89Aa-68	A類			276	89Aa-86	C類		3.2	301	89Aa-103	D類		3.1
252	89Aa-62	A類		2.6	277	89Aa-94	C類		3.3	302	89Aa-101	D類		3.8
253	89Aa-63	A類		2.2	278	89Aa-95	C類		3.2	303	89Aa-129	D類		3.7
254	89Aa-67	A類		3.1	279	89Aa-96	C類		3.8	304	89Aa-130	D類		3.1
255	89Aa-51	A類		2.5	280	89Aa-93	C類		3.9	305	89Aa-126	D類		3.4
256	89Aa-75	B類	8.0	3.1	281	89Aa-121	D類	7.3	2.8	306	89Aa-102	D類		3.2
257	89Aa-71	B類	10.0	3.3	282	89Aa-99	D類		3.0	307	89Aa-127	D類		3.3
258	89Aa-74	B類	10.4	3.0	283	89Aa-108	D類		2.5	308	89Aa-124	D類		3.3
259	89Aa-80	B類		3.2	284	89Aa-122	D類	6.9	2.6	309	89Aa-128	D類		2.5
260	89Aa-76	B類		2.7	285	89Aa-100	D類	7.1	3.0	310	89Aa-125	D類		2.6
261	89Aa-78	B類		3.2	286	89Aa-113	D類	7.6	2.5	311	89Aa-109	D類		4.7

4. 平安時代・室町時代・江戸時代

番号	登録番号	種別	器種	部位	器高	口径	底径	出土地点	番号	登録番号	種別	器種	部位	器高	口径	底径	出土地点
312	89Ba-173	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	372	89Cb-136	陶器	播鉢	底部		30.2		SK066
313	89Ba-169	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	373	89Cb-135	陶器	播鉢	底部		30.2		SK066
314	89Ba-179	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	374	89Cb-139	土師器	皿		2.3	11.4	5.5	SK066
315	89Ba-149	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	375	89Cb-140	土師器	皿		2.5	10.6	5.5	SK066
316	89Ba-175	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	376	89Cb-146	土師器	内耳鍋	口縁部		23.3		SK066
317	89Ba-176	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	377	89Cb-144	土師器	内耳鍋	口縁部		30.2		SK066
318	89Ba-156	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	378	89Cb-143	土師器	内耳鍋	口縁部		20.9		SK066
319	89Ba-133	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	379	89Cb-145	土師器	内耳鍋	口縁部		21.6		SK066
320	89Ba-148	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	380	89Cb-148	土師器	内耳鍋	口縁部		24.4		SK066
321	89Ba-150	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	381	89Cb-149	土師器	羽釜	口縁部		34.0		SK066
322	89Ba-147	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	382	89Cb-153	土製品	土錘					SK066
323	89Ba-184	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	383	89Cb-151	土製品	土錘					SK066
324	89Ba-181	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	384	89Cb-152	土製品	土錘	口縁部				SK066
325	89Ba-157	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	385	89Cb-108	陶器	天目茶碗	口縁部		11.8		SK067
326	89Ba-140	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	386	89Cb-118	土師器	内耳鍋	口縁部		17.0		SK067
327	89Ba-160	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	387	89Cb-115	土師器	内耳鍋	口縁部		18.0		SK067
328	89Ba-165	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	388	89Cb-120	土師器	内耳鍋	口縁部		23.5		SK067
329	89Ba-166	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	389	89Cb-119	土師器	内耳鍋	口縁部		23.6		SK067
330	89Ba-161	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	390	89Cb-111	土師器	内耳鍋	口縁部		21.6		SK067
331	89Ba-163	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	391	89Cb-110	土師器	内耳鍋	口縁部		27.6		SK067
332	89Ba-146	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	392	89Cb-114	土師器	内耳鍋	口縁部		24.6		SK067
333	89Ba-135	灰土器	甕	口縁部				Ⅲ層	393	89Cb-109	土師器	内耳鍋	口縁部		25.4		SK067
334	89Aa- 25	灰土器	甕	口縁部		12.1		Ⅲ層	394	89Cb-117	土師器	内耳鍋	口縁部		24.5		SK067
335	89Aa- 2	灰土器	甕	口縁部		12.1		Ⅲ層	395	89Cb-116	土師器	内耳鍋	口縁部		26.2		SK067
336	89Aa- 32	灰土器	甕	口縁部		17.2		Ⅲ層	396	89Cb-113	土師器	内耳鍋	口縁部		25.0		SK067
337	89Aa- 28	灰土器	甕	口縁部		13.0		Ⅲ層	397	89Cb-112	土師器	内耳鍋	口縁部		23.0		SK067
338	89Aa- 4	灰土器	甕	口縁部		15.8		Ⅲ層	398	89Cb-121	土師器	内耳鍋	口縁部		29.0		SK067
339	89Aa- 6	灰土器	甕	口縁部		16.6		Ⅲ層	399	89Cb-122	土師器	皿			9.0		SK067
340	89Aa- 29	灰土器	甕	口縁部		13.5		Ⅲ層	400	89Cb-123	土製品	土錘					SK067
341	89Aa- 5	灰土器	甕	口縁部		15.0		Ⅲ層	401	89Cb-125	土製品	土錘					SK067
342	89Aa- 27	灰土器	甕	口縁部		18.0		Ⅲ層	402	89Cb-124	土製品	土錘					SK067
343	89Aa- 1	灰土器	甕	口縁部		16.2		Ⅲ層	403	89Cb- 92	陶器	播鉢	口縁部		28.6		SK069
344	89Aa- 26	灰土器	甕	口縁部		21.0		Ⅲ層	404	89Cb- 93	陶器	播鉢	底部			10.0	SK069
345	89Aa- 3	灰土器	甕	口縁部		18.2		Ⅲ層	405	89Cb- 91	陶器	鉢	口縁部		32.2		SK069
346	89Aa- 7	灰土器	甕	口縁部		22.0		Ⅲ層	406	89Cb- 94	陶器	甕	口縁部		34.6		SK069
347	89Aa- 10	灰土器	甕	底部			7.2	Ⅲ層	407	89Cb-105	土師器	羽釜	口縁部		33.4		SK069
348	89Aa- 30	灰土器	甕	底部			7.5	Ⅲ層	408	89Cb-104	土師器	羽釜	口縁部		28.6		SK069
349	89Aa- 11	灰土器	甕	底部			7.0	Ⅲ層	409	89Cb-106	土師器	羽釜	口縁部		23.6		SK069
350	89Aa- 14	灰土器	甕	底部			8.0	Ⅲ層	410	89Cb- 96	土師器	内耳鍋	口縁部		22.0		SK069
351	89Aa- 12	灰土器	甕	底部			7.0	Ⅲ層	411	89Cb- 95	土師器	内耳鍋	口縁部		25.0		SK069
352	89Ab- 2	灰土器	甕	底部			8.5	SD01	412	89Cb-103	土師器	内耳鍋	口縁部		27.0		SK069
353	89Aa- 9	灰土器	長頸瓶	口縁部		13.6		Ⅲ層	413	89Cb- 97	土師器	内耳鍋	口縁部		29.5		SK069
354	89Aa- 35	灰土器	長頸瓶	口縁部		16.5		Ⅲ層	414	89Cb-101	土師器	内耳鍋	口縁部		22.2		SK069
355	89Aa- 18	土製品	土錘					Ⅲ層	415	89Cb- 99	土師器	内耳鍋	口縁部		25.8		SK069
356	89Aa- 17	土製品	土錘					Ⅲ層	416	89Cb- 98	土師器	内耳鍋	口縁部		26.0		SK069
357	89Aa- 31	土師器	甕	口縁部		30.6		Ⅲ層	417	89Cb-100	土師器	内耳鍋	口縁部		27.8		SK069
358	89Aa- 16	土師器	甕	口縁部		33.8		Ⅲ層	418	89Cb-102	土師器	内耳鍋	口縁部		29.6		SK069
359	89Aa- 15	土師器	甕	口縁部		29.0		Ⅲ層	419	89Cb- 79	陶器	天目茶碗	口縁部		13.0		SK070
360	89Aa- 33	土師器	甕	口縁部		29.2		Ⅲ層	420	89Cb- 78	陶器	天目茶碗	口縁部		10.2		SK070
361	89Ca- 52	土師器	皿	底部			4.8	SK063	421	89Cb- 77	陶器	天目茶碗	口縁部		11.3		SK070
362	89Ca- 51	土師器	内耳鍋	底部			8.5	SK063	422	89Cb- 80	陶器	播鉢	口縁部		19.0		SK070
363	89Ca- 1	土師器	内耳鍋	口縁部		32.0		SK063	423	89Cb- 81	陶器	播鉢	口縁部		26.4		SK070
364	89Ca- 54	土師器	内耳鍋	口縁部		27.5		SK063	424	89Cb- 82	陶器	鉢	底部			7.8	SK070
365	89Ca- 55	土師器	内耳鍋	口縁部		26.5		SK063	425	89Cb- 87	土師器	内耳鍋	口縁部		22.2		SK070
366	89Cb-130	陶器	天目茶碗	口縁部		11.0		SK066	426	89Cb- 85	土師器	内耳鍋	口縁部		27.8		SK070
367	89Cb-132	陶器	鉄輪甕	口縁部		16.5		SK066	427	89Cb- 90	土師器	内耳鍋	口縁部		25.6		SK070
368	89Cb-133	陶器	鉄輪甕	底部			11.2	SK066	428	89Cb- 86	土師器	内耳鍋	口縁部		28.5		SK070
369	89Cb-134	陶器	鉄輪甕	底部			9.6	SK066	429	89Cb- 89	土師器	内耳鍋	口縁部		27.6		SK070
370	89Cb-137	陶器	播鉢	底部			8.6	SK066	430	89Cb- 88	土師器	内耳鍋	口縁部		28.0		SK070
371	89Cb-138	陶器	播鉢	底部			9.2	SK066	431	89Cb- 17	陶器	甕	口縁部		26.2		SK113

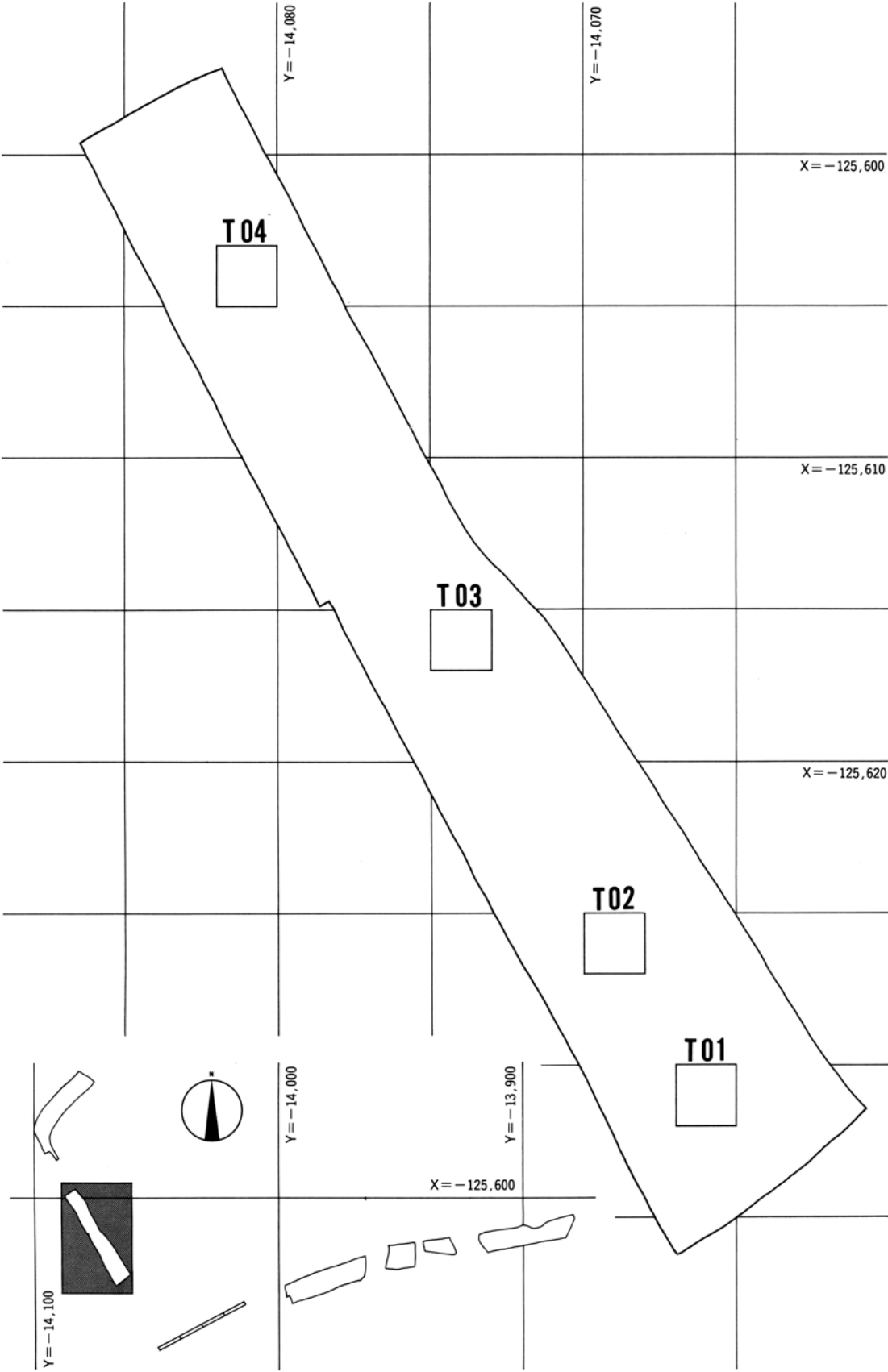
番号	登録番号	種別	器種	部位	器高	口径	底径	出土地点	番号	登録番号	種別	器種	部位	器高	口径	底径	出土地点
432	89Cb- 16	陶器	甕	口縁部		32.4		SK113	487	89Ca- 25	陶器	灰釉碗	体-底部			4.5	SK031
433	89Cb- 23	陶器	鉢	口縁部		30.2		SK113	488	89Ca- 26	陶器	灰釉碗	底部			4.5	SK031
434	89Cb- 21	陶器	鉢	口縁部		31.4		SK113	489	89Ca- 16	陶器	蓋		1.8		9.0	SK031
435	89Cb- 18	陶器	鉢		7.6	19.5	10.2	SK113	490	89Ca- 28	陶器	台付鉢		6.5	18.8	10.5	SK031
436	89Cb- 25	陶器	鉢	底部			11.2	SK113	491	89Ca- 27	陶器	片口鉢	体-底部			6.2	SK031
437	89Cb- 22	陶器	鉢	口縁部		28.2		SK113	492	89Ca- 29	陶器	壺	口縁部		9.8		SK031
438	89Cb- 19	陶器	鉢		14.0	37.5	17.5	SK113	493	89Ca- 31	陶器	甕	口縁部		21.5		SK031
439	89Cb- 20	陶器	擂鉢	口縁部		27.2		SK113	494	89Ca- 32	陶器	鉢	口縁部		36.2		SK031
440	89Cb- 24	陶器	擂鉢	口縁部		26.2		SK113	495	89Ca- 30	陶器	甕	口縁部		32.0		SK031
441	89Cb- 26	陶器	瓶	底部			14.0	SK113	496	89Ca- 35	陶器	擂鉢	口縁部		36.0		SK031
442	89Cb- 15	陶器	壺	口縁部		18.6		SK113	497	89Ca- 36	陶器	擂鉢	口縁部		32.4		SK031
443	89Cb- 29	土師器	内耳鍋	底部			4.8	SK113	498	89Ca- 38	陶器	擂鉢	底部			13.4	SK031
444	89Cb- 28	土師器	内耳鍋	底部			7.0	SK113	499	89Ca- 37	陶器	擂鉢	体-底部			15.5	SK031
445	89Cb- 27	土師器	内耳鍋			10.8	7.0	SK113	500	89Ca- 33	陶器	擂鉢		11.9	28.8	12.5	SK031
446	89Cb- 44	土師器	内耳鍋	口縁部		21.0		SK113	501	89Ca- 34	陶器	擂鉢		12.5	30.5	12.6	SK031
447	89Cb- 43	土師器	内耳鍋	口縁部		22.5		SK113	502	89Ca- 43	土師器	皿			7.8		SK031
448	89Cb- 47	土師器	内耳鍋	口縁部		24.5		SK113	503	89Ca- 44	土師器	皿		1.1	8.2	5.0	SK031
449	89Cb- 45	土師器	内耳鍋	口縁部		25.0		SK113	504	89Ca- 45	土師器	皿			9.0		SK031
450	89Cb- 42	土師器	内耳鍋	口縁部		28.5		SK113	505	89Ca- 46	土師器	焙烙鍋	口縁部		26.0		SK031
451	89Cb- 40	土師器	内耳鍋	口縁部		27.5		SK113	506	89Ca- 41	陶器	甕	口縁部		41.2		SK031
452	89Cb- 38	土師器	内耳鍋	口縁部		25.0		SK113	507	89Ca- 42	陶器	甕	口縁部		47.2		SK031
453	89Cb- 41	土師器	内耳鍋	口縁部		17.2		SK113	508	89Ca- 40	陶器	甕	口縁部		47.2		SK031
454	89Cb- 52	土師器	内耳鍋	口縁部		19.6		SK113	509	89Ca- 40	陶器	甕	底部			16.8	SK031
455	89Cb- 30	土師器	内耳鍋	口縁部		29.5		SK113	510	89Ca- 39	陶器	甕	口縁部		34.8		SK031
456	89Cb- 39	土師器	内耳鍋	口縁部		30.0		SK113	511	89Ca- 56	陶器	灰釉皿		2.5	9.5	4.0	SD02
457	89Cb- 37	土師器	内耳鍋	口縁部		52.0		SK113	512	89Ca- 57	陶器	腰掛茶碗		6.1	9.2	4.2	SD02
458	89Cb- 31	土師器	羽釜	口縁部		37.6		SK113	513	89Ca- 59	陶器	腰掛茶碗		6.5	9.8	4.4	SD02
459	89Cb- 35	土師器	羽釜	口縁部		32.5		SK113	514	89Ca- 58	陶器	灰釉碗		7.0	9.8	5.0	SD02
460	89Cb- 32	土師器	羽釜	口縁部		37.4		SK113	515	89Ca- 62	陶器	灰釉碗	口縁部		9.6		SD02
461	89Cb- 33	土師器	羽釜	口縁部		40.0		SK113	516	89Ca- 61	陶器	鉄釉碗	口縁部		11.5		SD02
462	89Cb- 34	土師器	羽釜	口縁部		43.4		SK113	517	89Ca- 60	陶器	鉄釉碗	口縁部		10.8		SD02
463	89Cb- 36	土師器	羽釜	口縁部		42.0		SK113	518	89Ca- 65	陶器	灰釉碗	底部			5.5	SD02
464	89Cb- 54	土製品	土鍾					SK113	519	89Ca- 66	陶器	灰釉碗	底部			5.5	SD02
465	89Cb- 55	土製品	土鍾					SK113	520	89Ca- 67	陶器	灰釉碗	底部			5.0	SD02
466	89Cb- 56	土製品	土鍾					SK113	521	89Ca- 64	陶器	灰釉碗	体-底部			5.2	SD02
467	89Cb- 59	土製品	土鍾					SK113	522	89Ca- 71	陶器	鉢	口縁部		27.2		SD02
468	89Cb- 58	土製品	土鍾					SK113	523	89Ca- 68	陶器	鉢	口縁部		20.0		SD02
469	89Cb- 57	土製品	土鍾					SK113	524	89Ca- 69	陶器	擂鉢	口縁部		30.6		SD02
470	89Ca- 5	陶器	灰釉碗		5.1	9.8	3.9	SK030	525	89Ca- 70	陶器	擂鉢	口縁部		37.2		SD02
471	89Ca- 6	陶器	灰釉碗		5.3	11.0	4.2	SK030	526	89Ca- 72	陶器	擂鉢	底部			10.0	SD02
472	89Ca- 3	陶器	灰釉碗		5.0	11.5	4.2	SK030	527	89Ca- 73	土師器	内耳鍋			9.0		SD02
473	89Ca- 4	陶器	灰釉碗		5.0	11.5	6.4	SK030	528	89Ca- 74	土師器	内耳鍋		2.1	9.8	5.0	SD02
474	89Ca- 2	陶器	腰掛茶碗		5.5	10.4	4.4	SK030	529	89Ca- 78	土師器	内耳鍋	口縁部		24.1		SD02
475	89Ca- 9	陶器	鉄釉甕	口縁部		18.2		SK030	530	89Ca- 75	土師器	内耳鍋	口縁部		31.0		SD02
476	89Ca- 11	陶器	擂鉢	口縁部		38.0		SK030	531	89Ca- 77	土師器	内耳鍋	口縁部		25.5		SD02
477	89Ca- 10	陶器	擂鉢	口縁部		29.4		SK030	532	89Ca- 76	土師器	内耳鍋	口縁部		28.5		SD02
478	89Ca- 14	土師器	内耳鍋	口縁部		30.2		SK030	533	89Ca- 83	土師器	内耳鍋	口縁部		23.0		SD02
479	89Ca- 13	土師器	内耳鍋	口縁部		39.8		SK030	534	89Ca- 84	土師器	内耳鍋	口縁部		30.0		SD02
480	89Ca- 15	土師器	内耳鍋	口縁部		25.8		SK030	535	89Ca- 79	土師器	内耳鍋	口縁部		24.0		SD02
481	89Ca- 17	磁器	皿		2.5	9.2	5.2	SK031	536	89Ca- 85	土師器	内耳鍋	口縁部		28.6		SD02
482	89Ca- 18	陶器	灰釉碗		4.5	9.0	3.6	SK031	537	89Ca- 82	土師器	焙烙鍋	口縁部		38.2		SD02
483	89Ca- 21	陶器	灰釉碗	口縁部		11.5		SK031	538	89Ca- 80	土師器	焙烙鍋	口縁部		39.2		SD02
484	89Ca- 20	陶器	灰釉碗	口縁部		11.2		SK031	539	89Ca- 81	土師器	焙烙鍋	口縁部		40.0		SD02
485	89Ca- 19	陶器	灰釉碗	口縁部		7.6		SK031	540	89Ca- 86	土製品	土鍾					SD02
486	89Ca- 23	陶器	灰釉碗	体-底部			3.5	SK031	541	89Ca- 87	土製品	土鍾					SD02

図 版

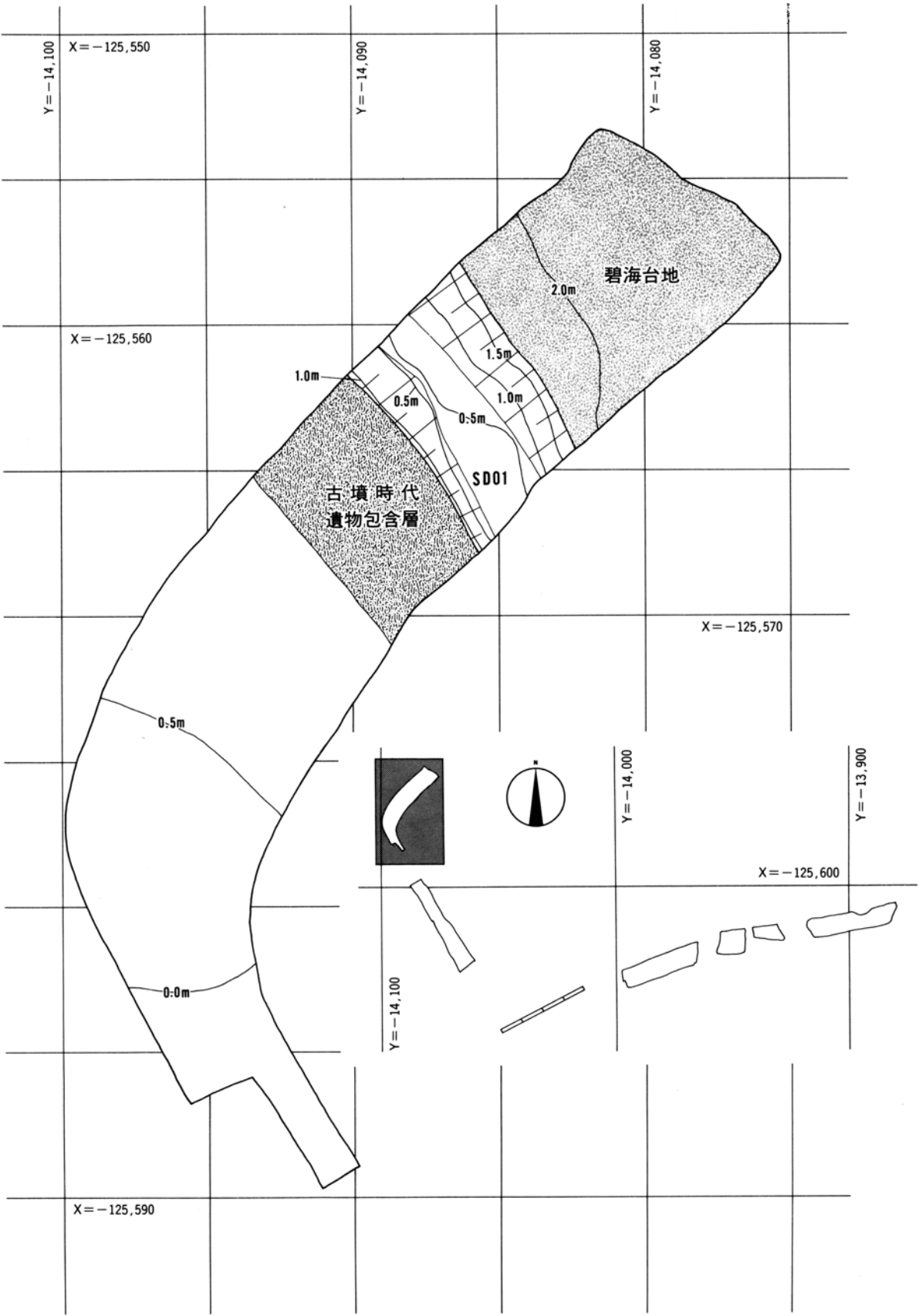
縮 尺

遺構図	1 : 200
遺物実測図	
1 ~ 212	1 : 2
213 ~ 227 ・ 237 ~ 333	1 : 3
228 ~ 236 ・ 334 ~ 505	
510 ~ 541	1 : 4
506 ~ 509	1 : 6
遺物写真	約 1 : 3

図版 1 Aa 区遺構図



図版2 Ab区遺構図



図版3 Ba 区遺構図

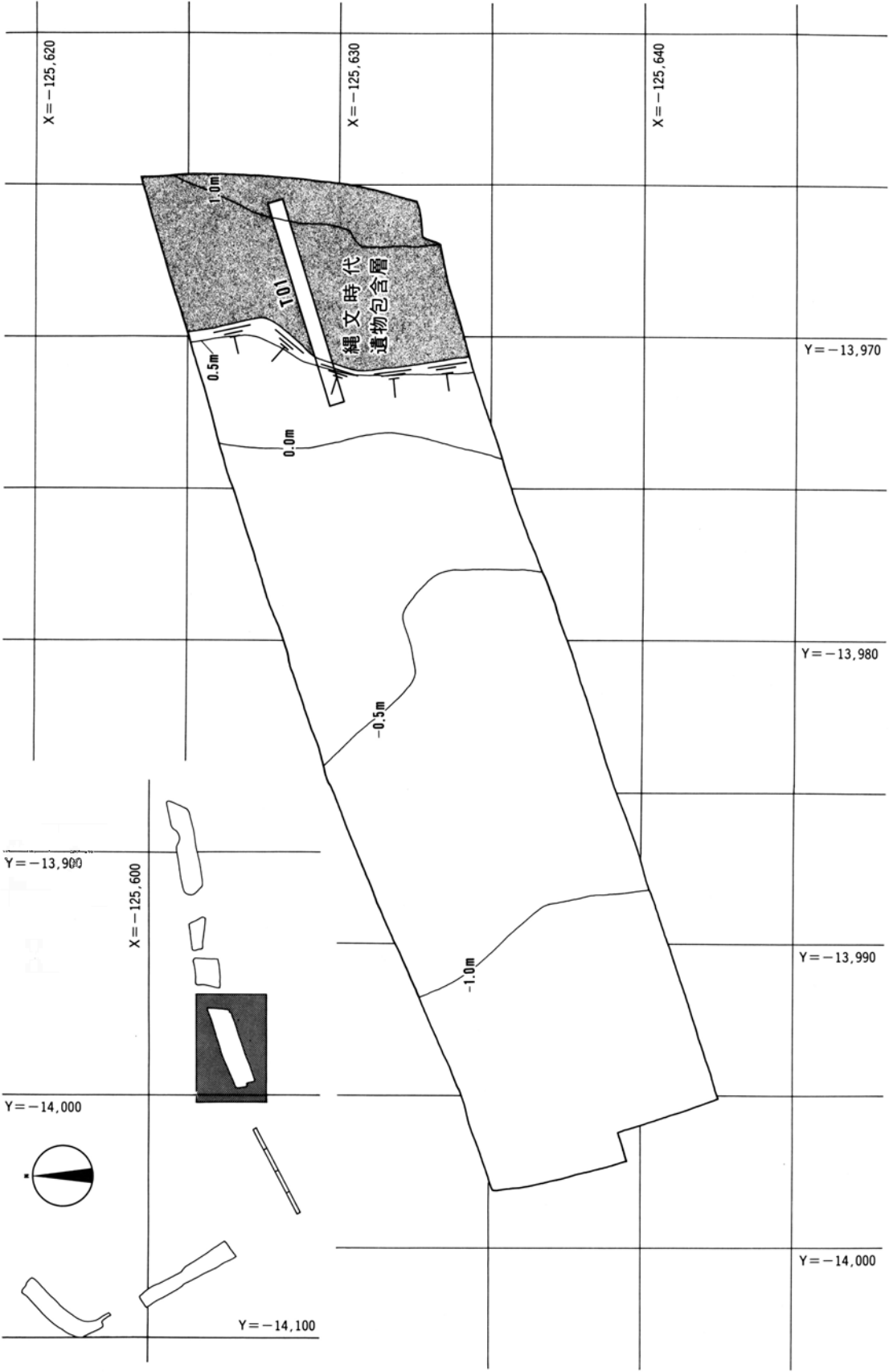
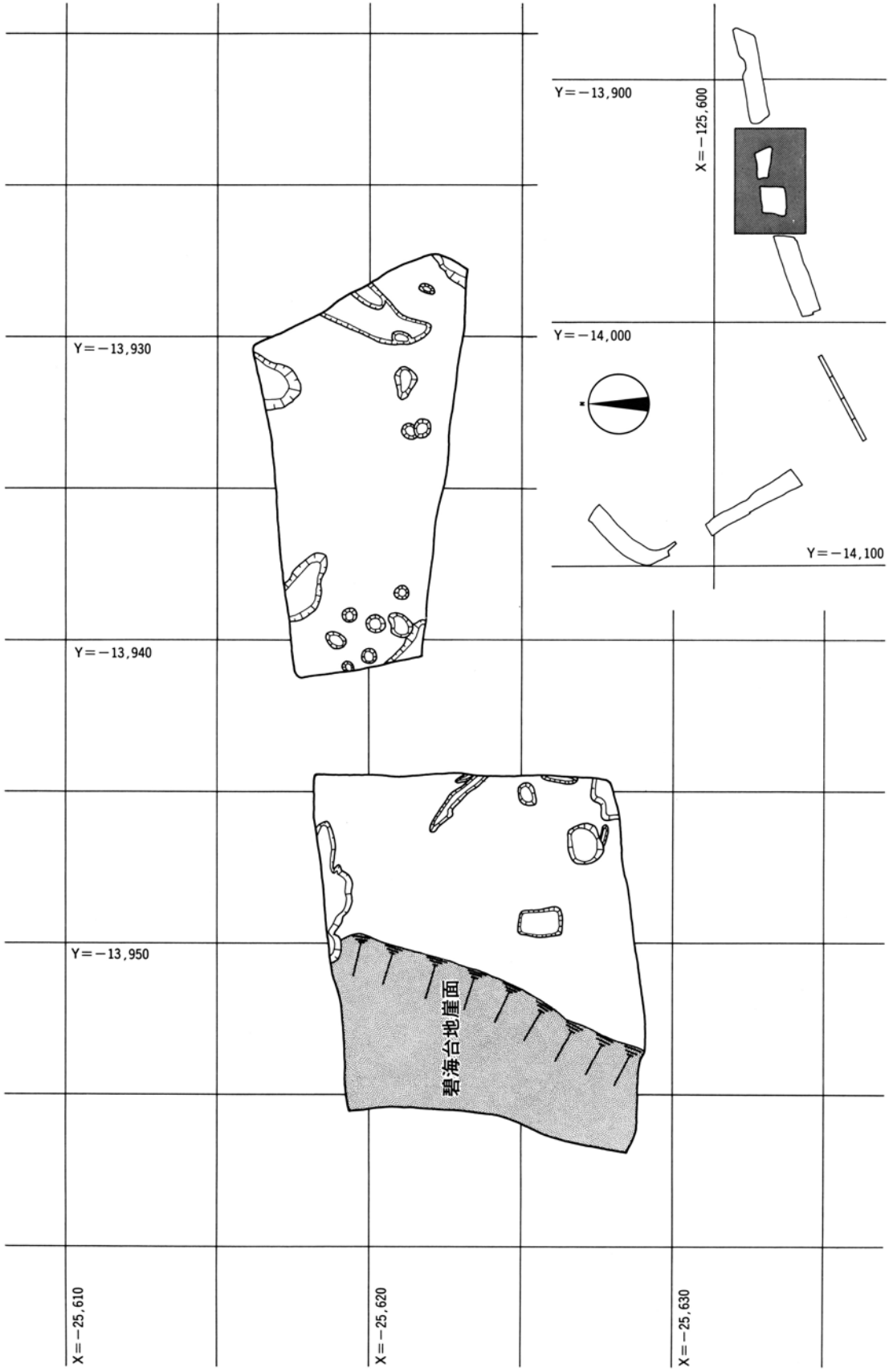
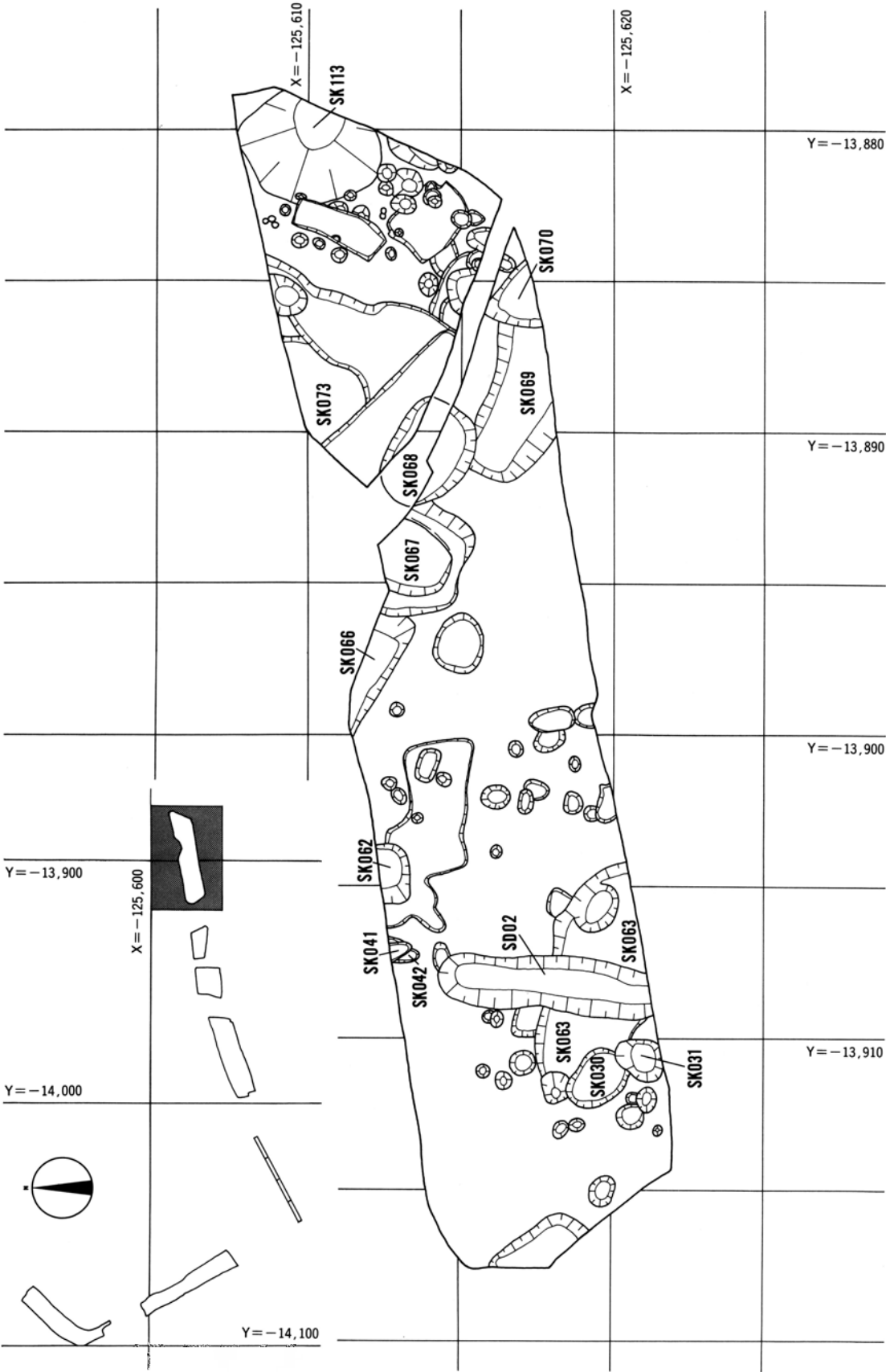
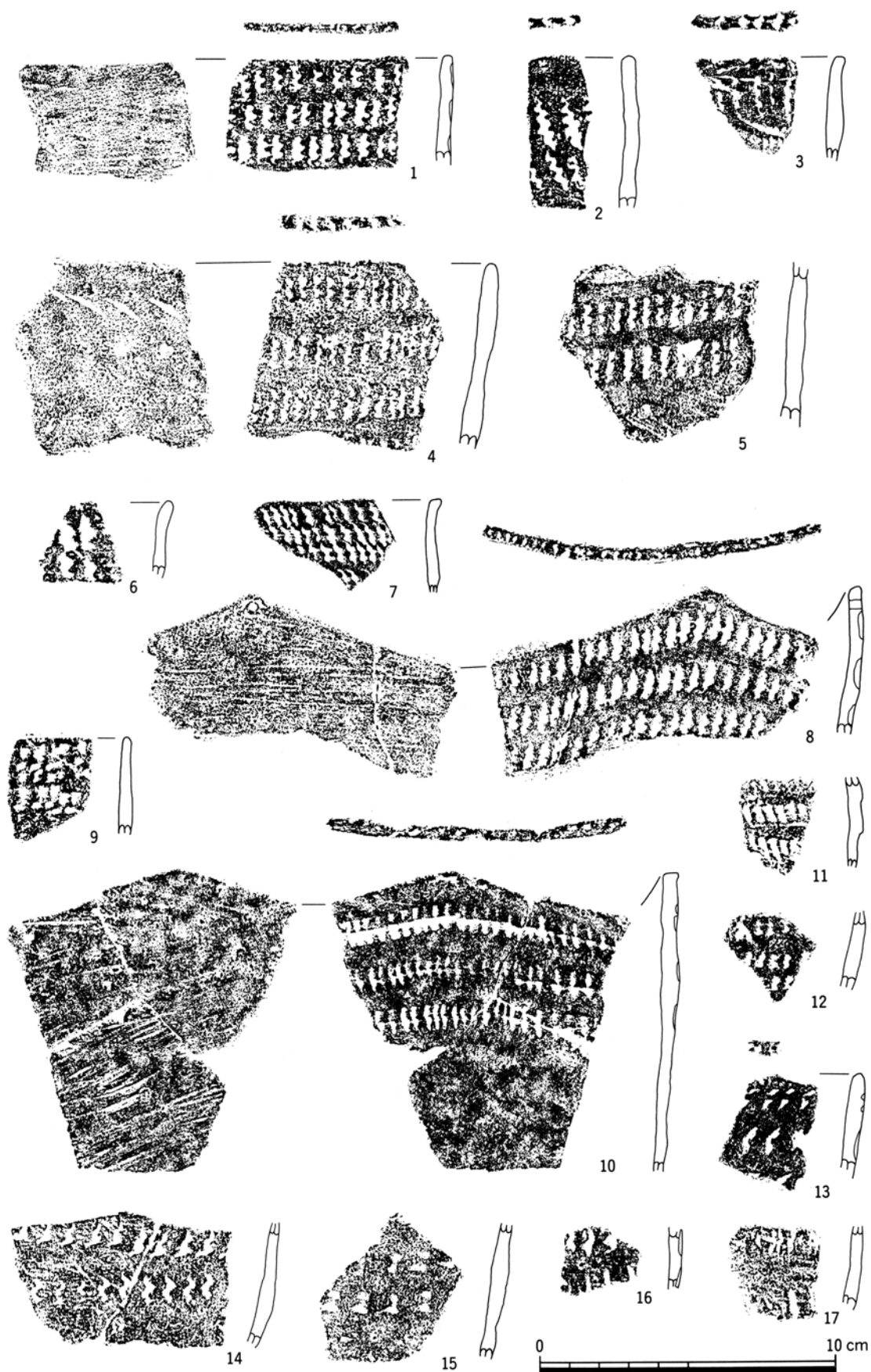


图 4 Bb 区遺構図

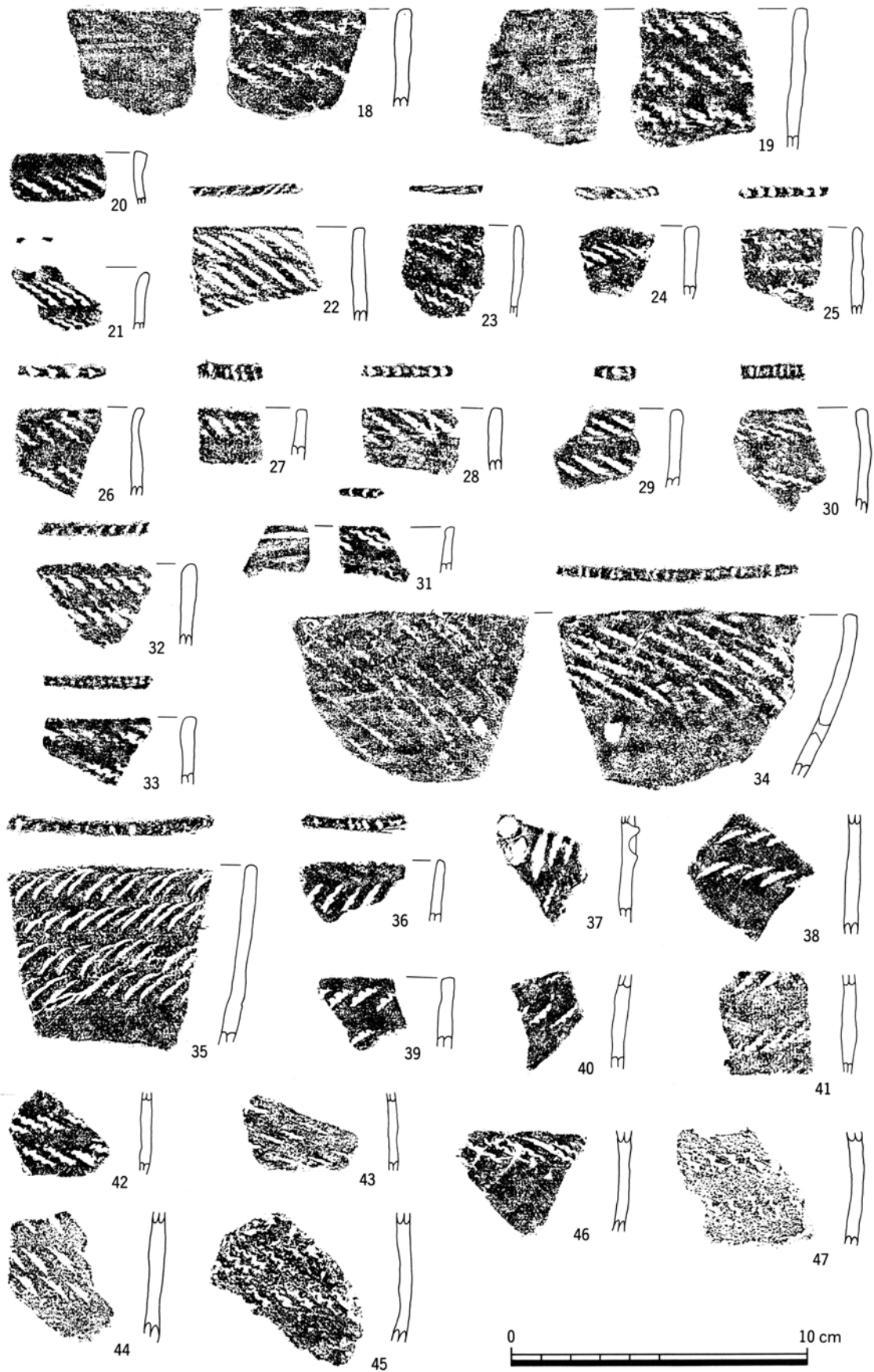


図版 5 C 区遺構図

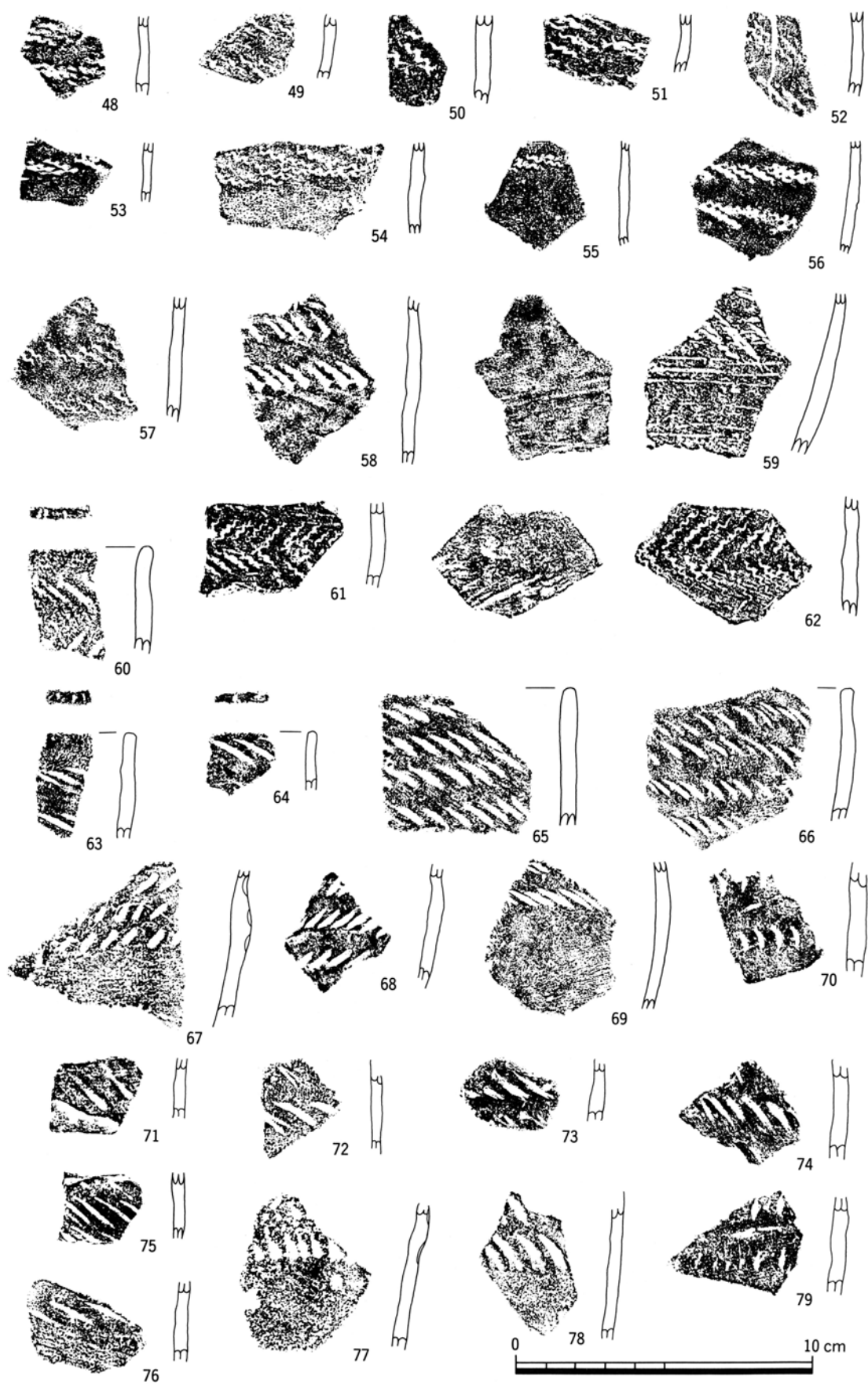


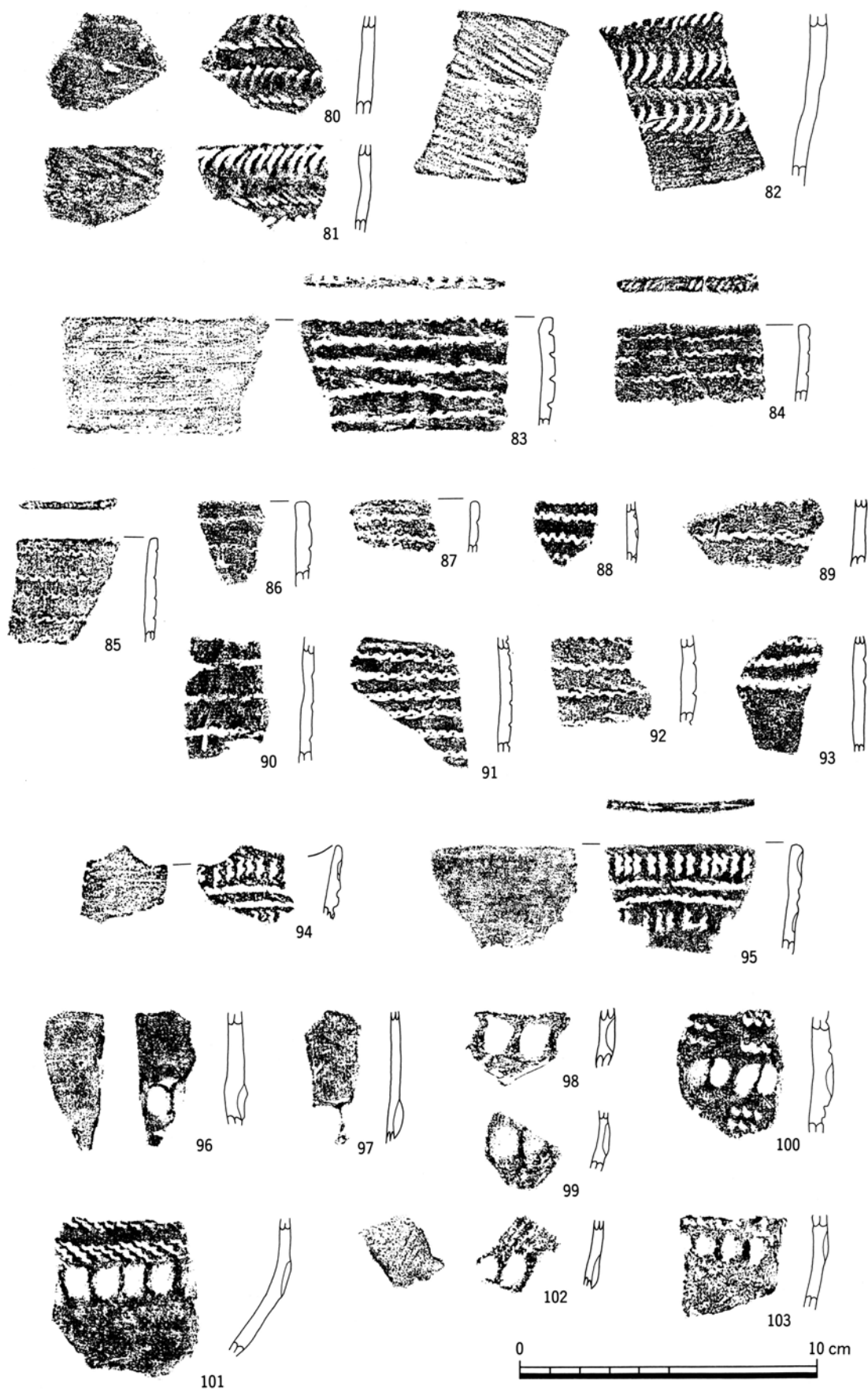


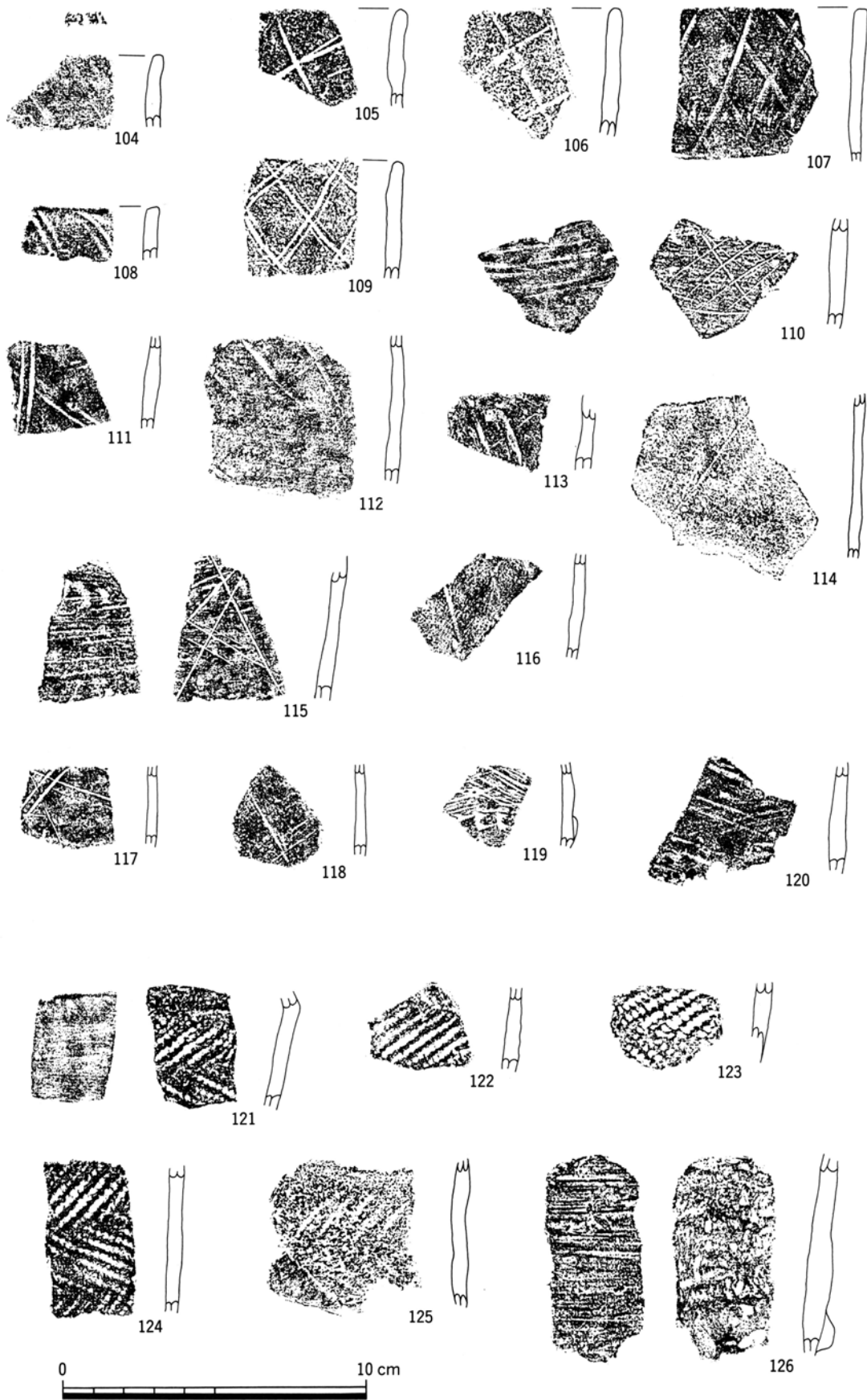
图版 7 出土遺物(2)

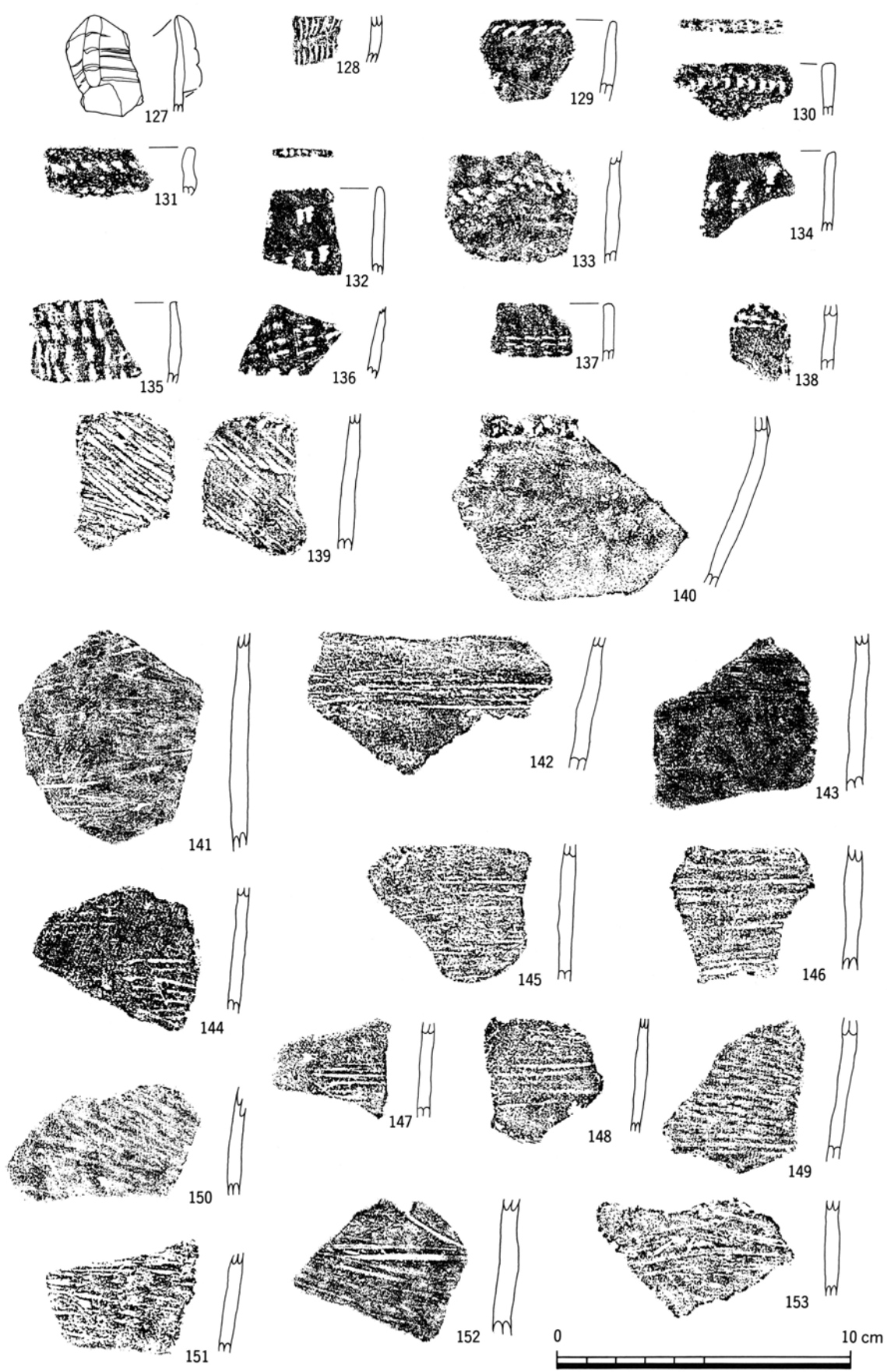


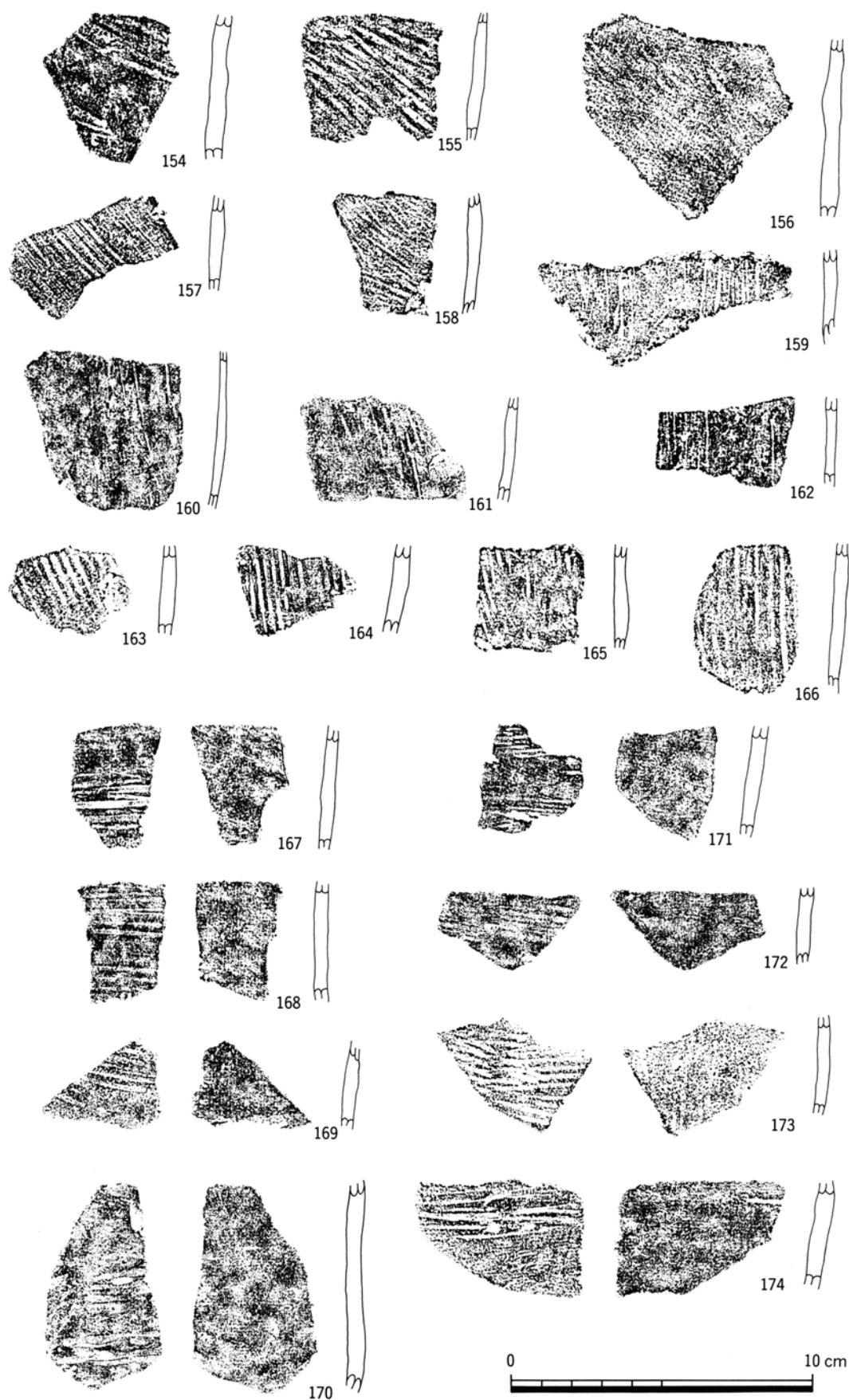
图版 8 出土遺物(3)

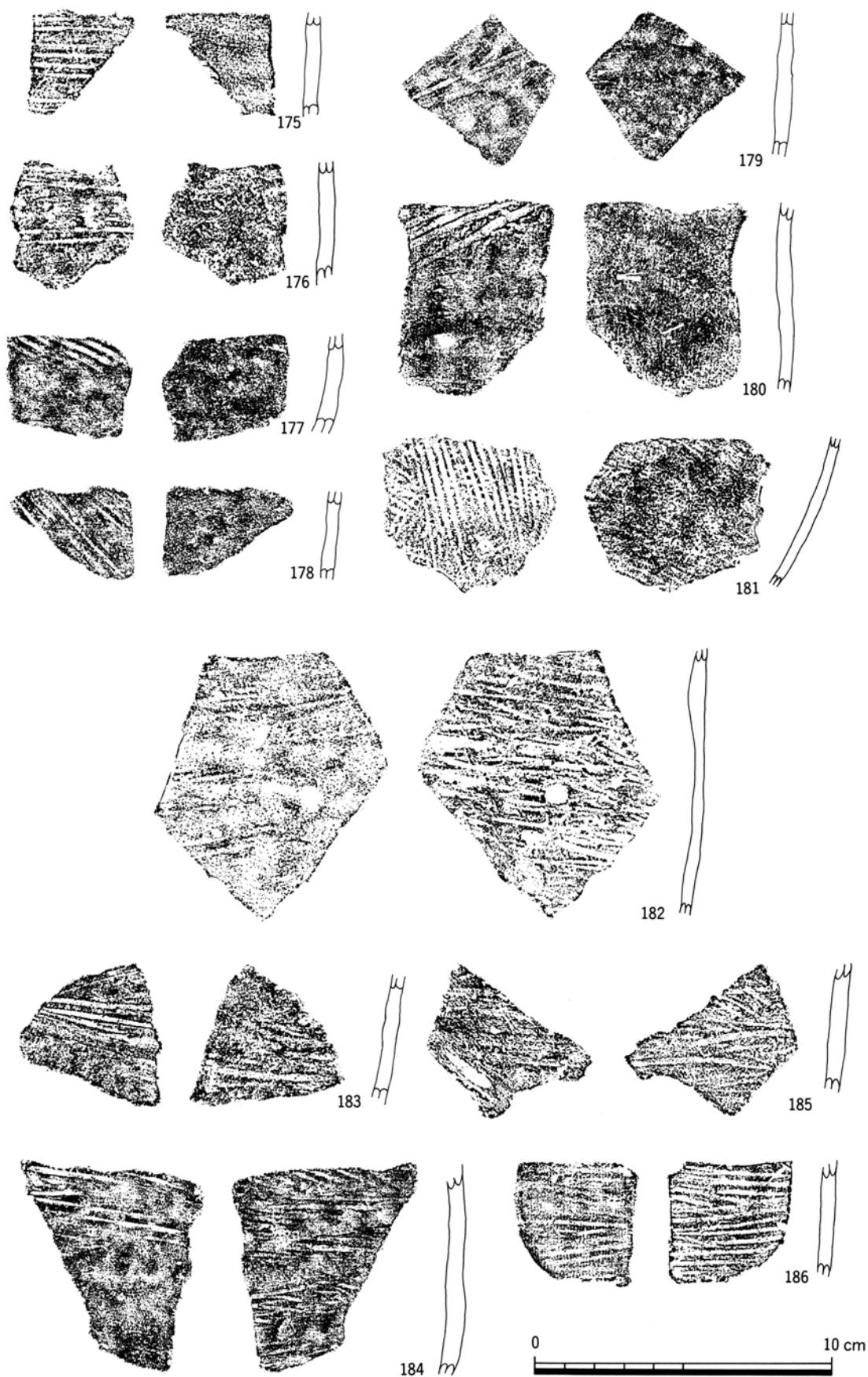


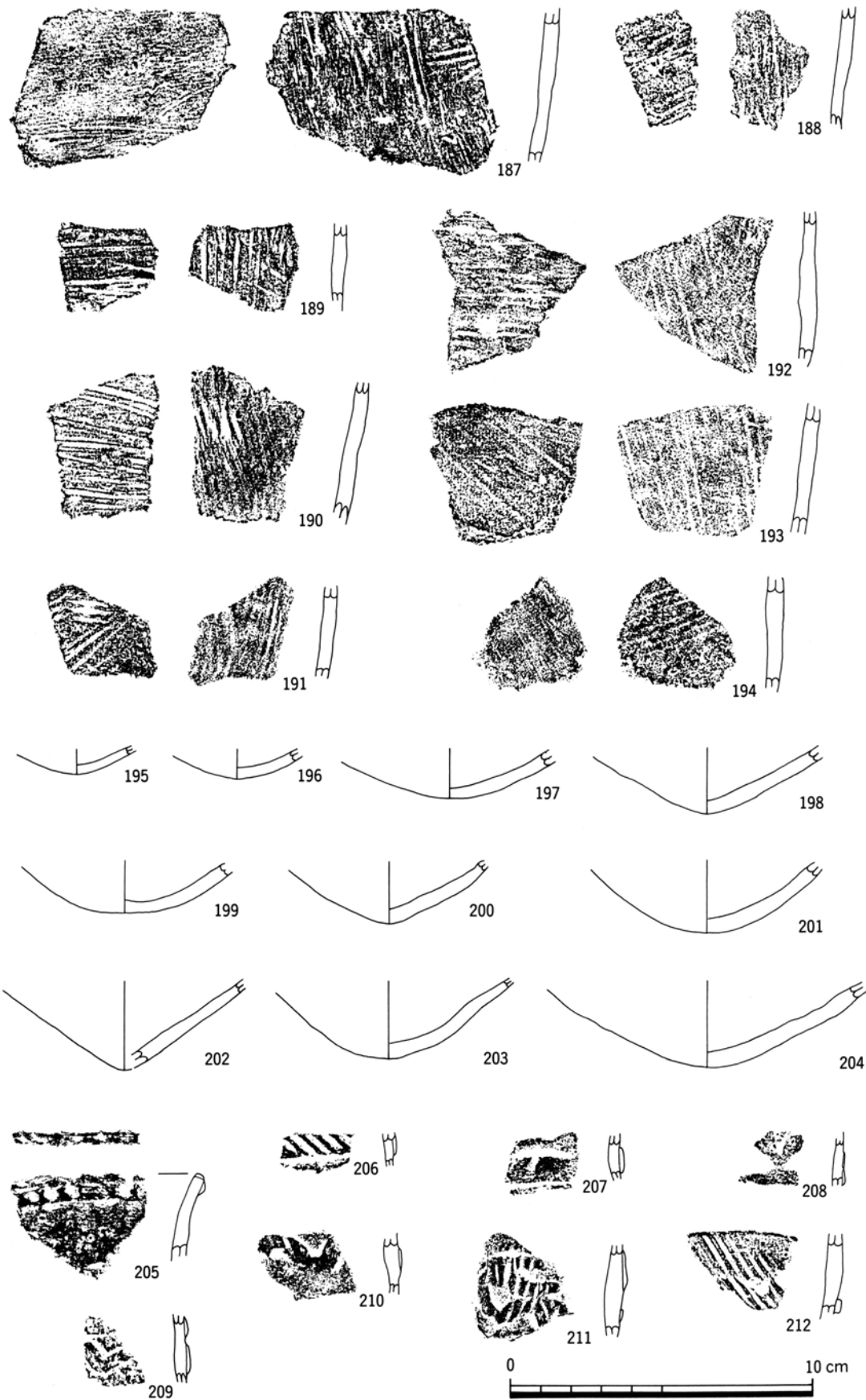


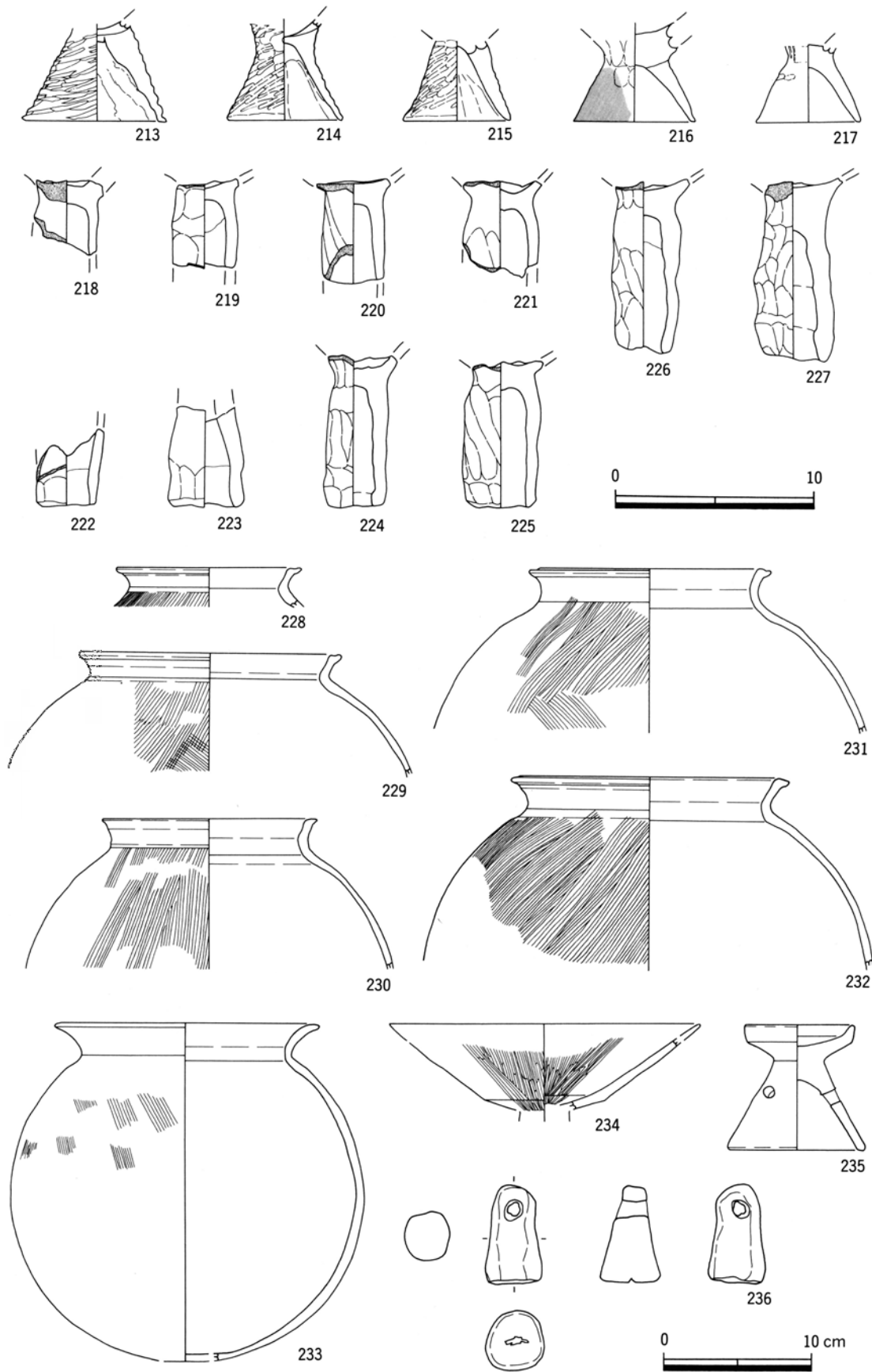


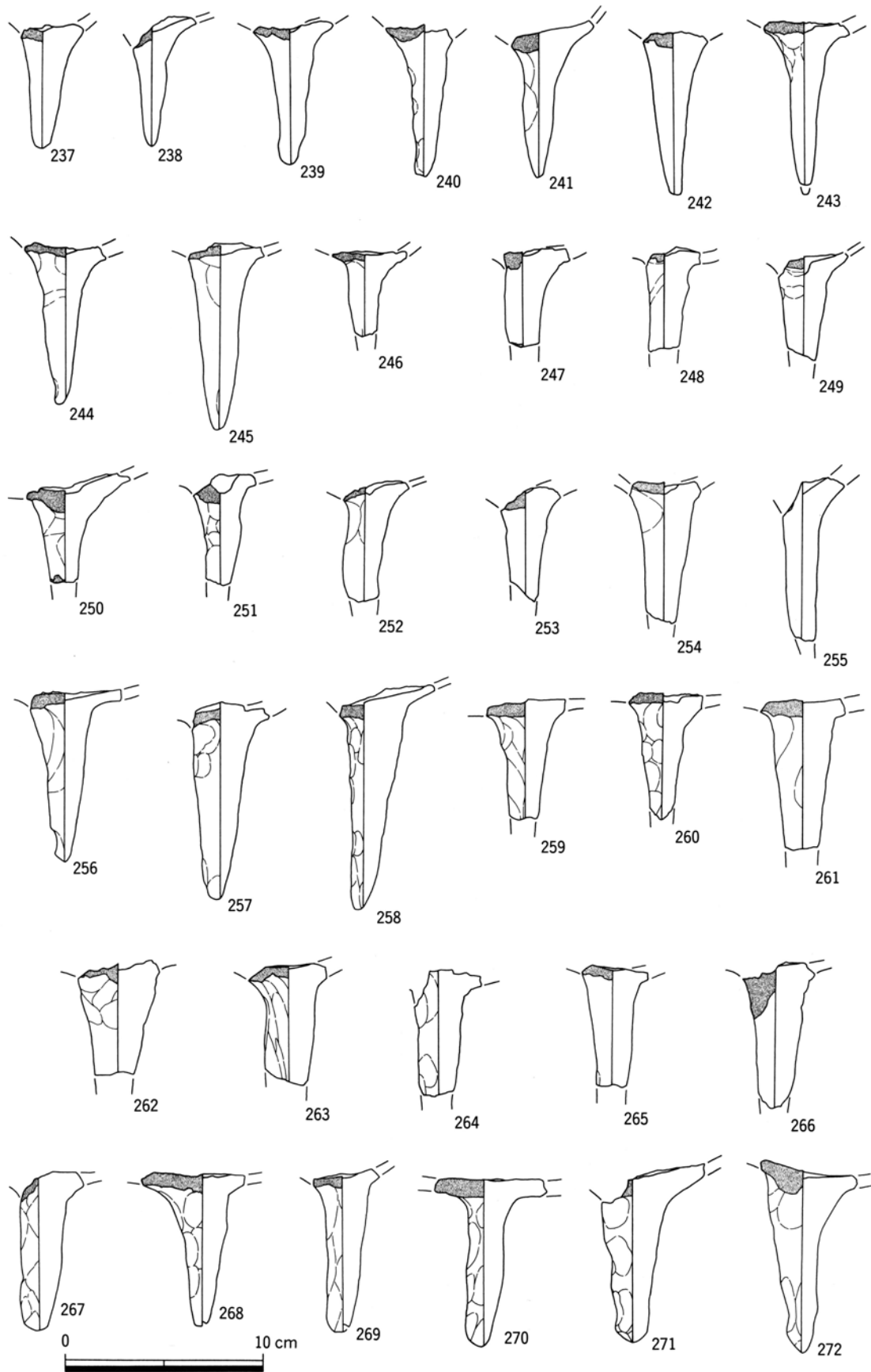


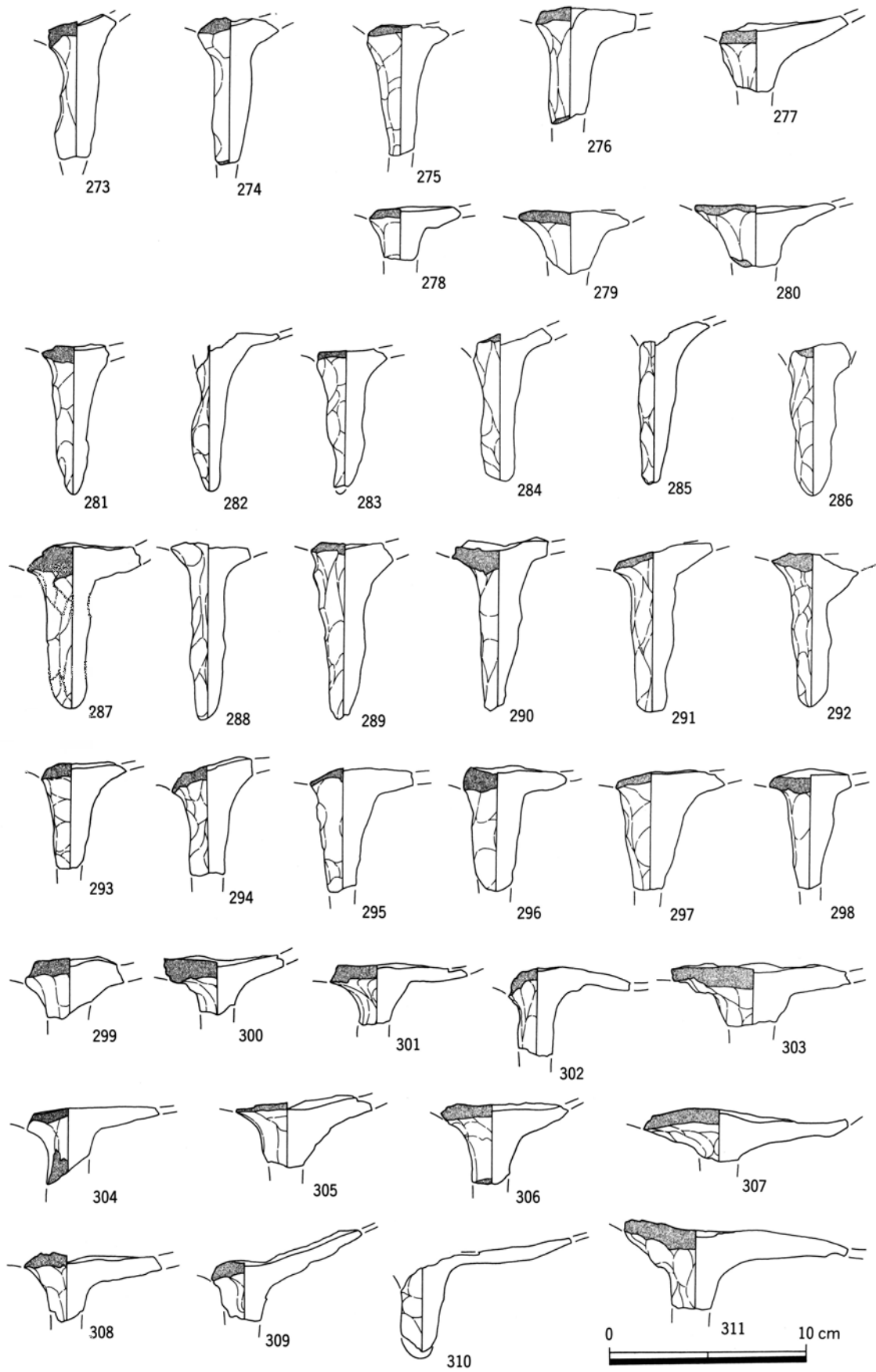


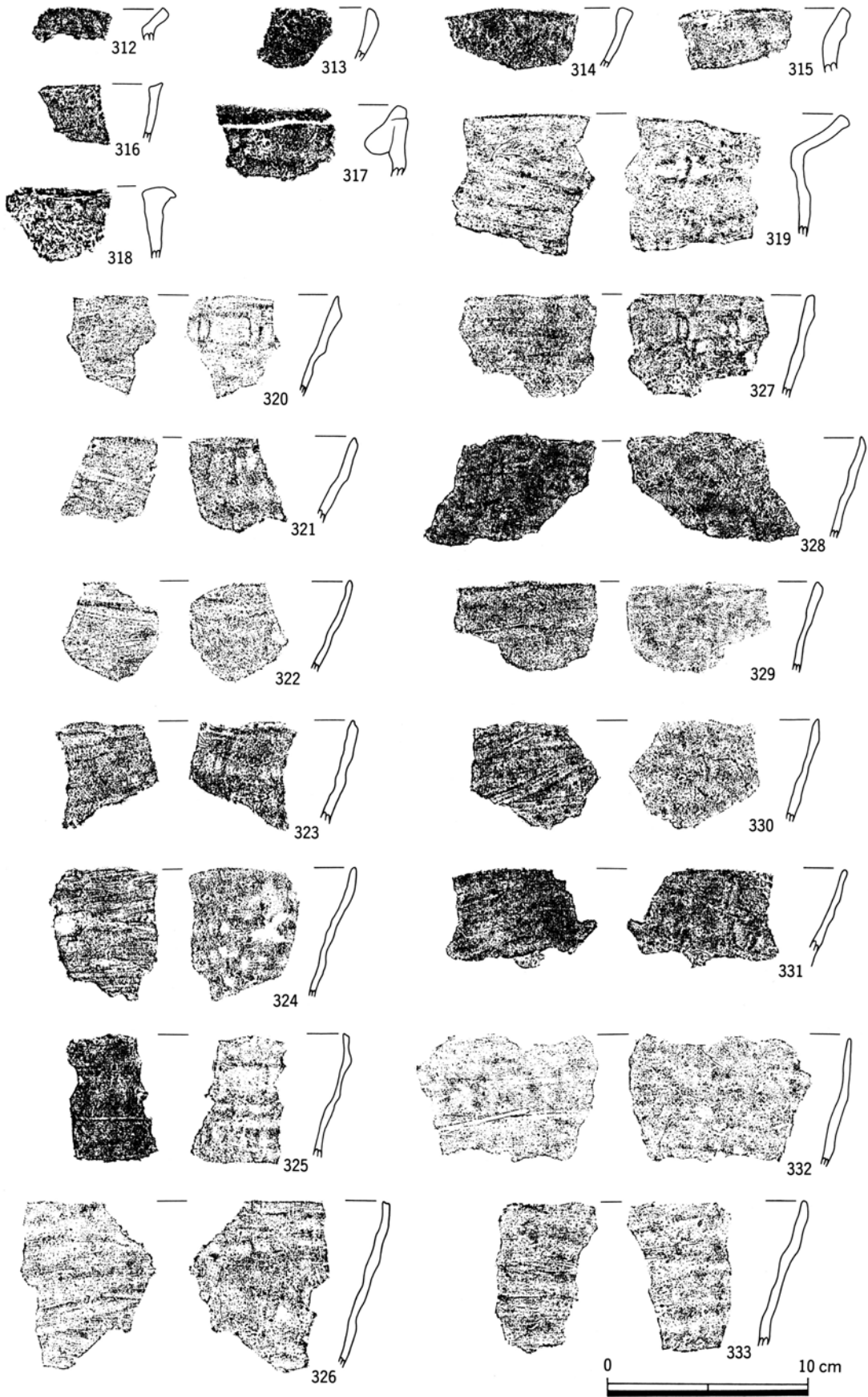


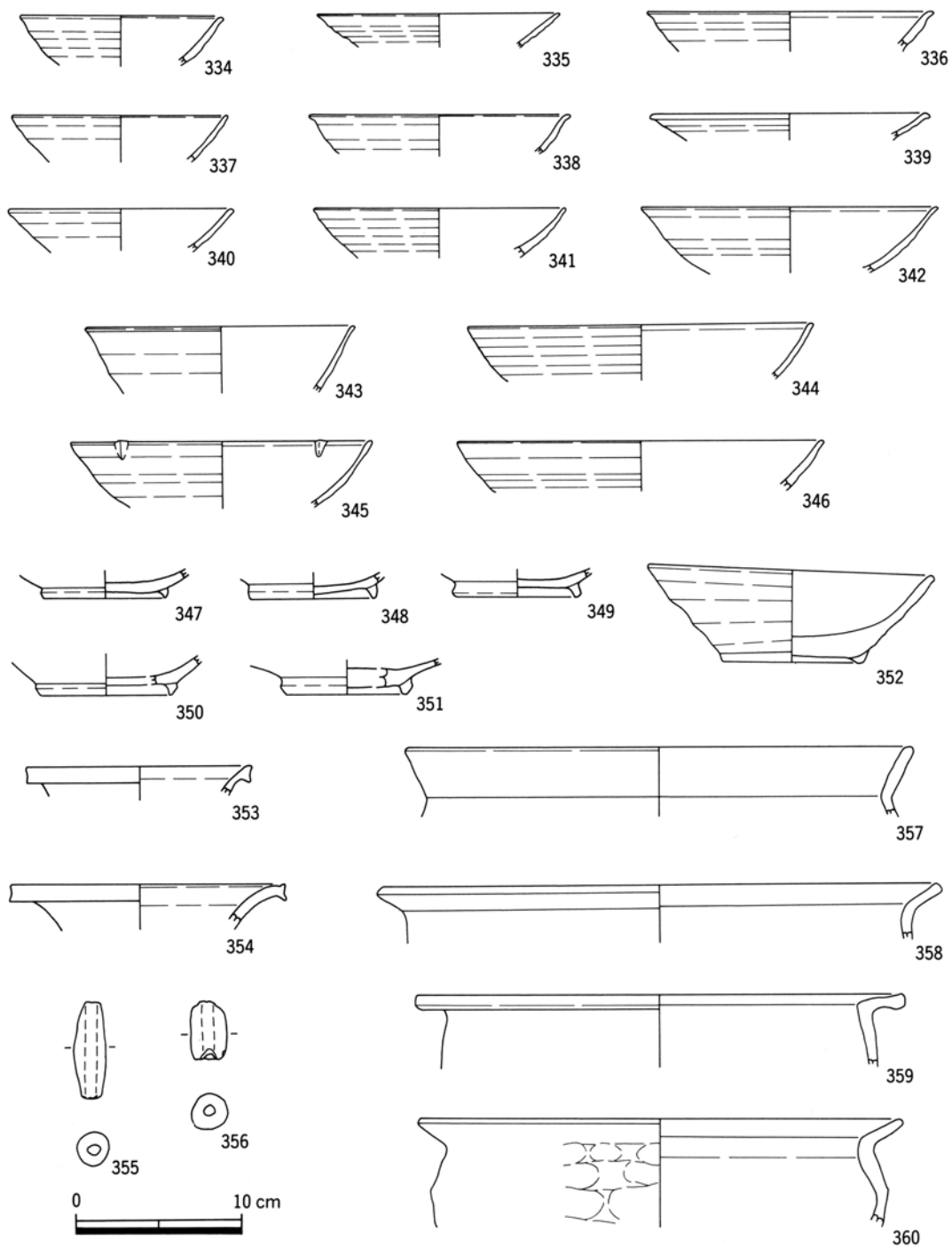


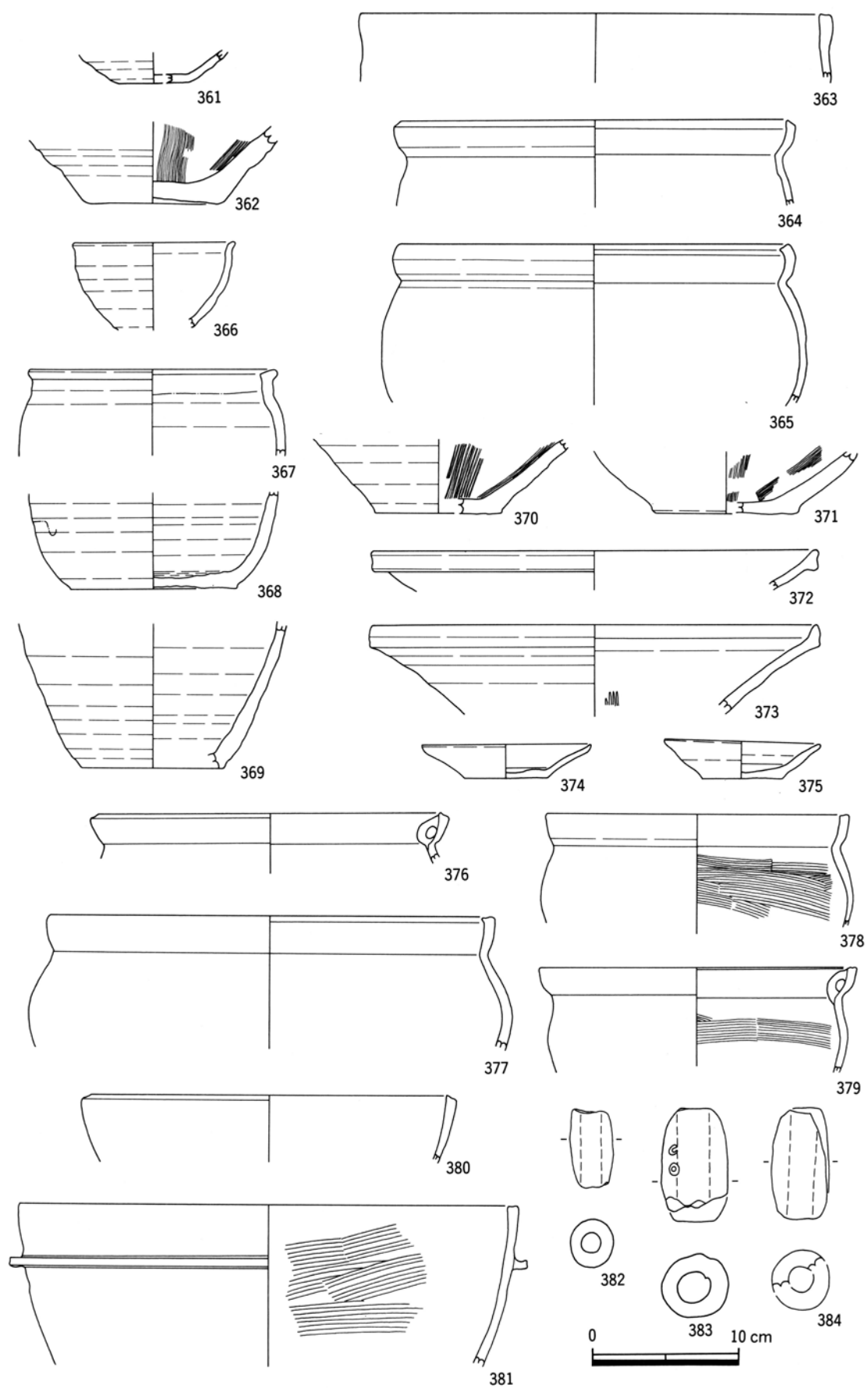


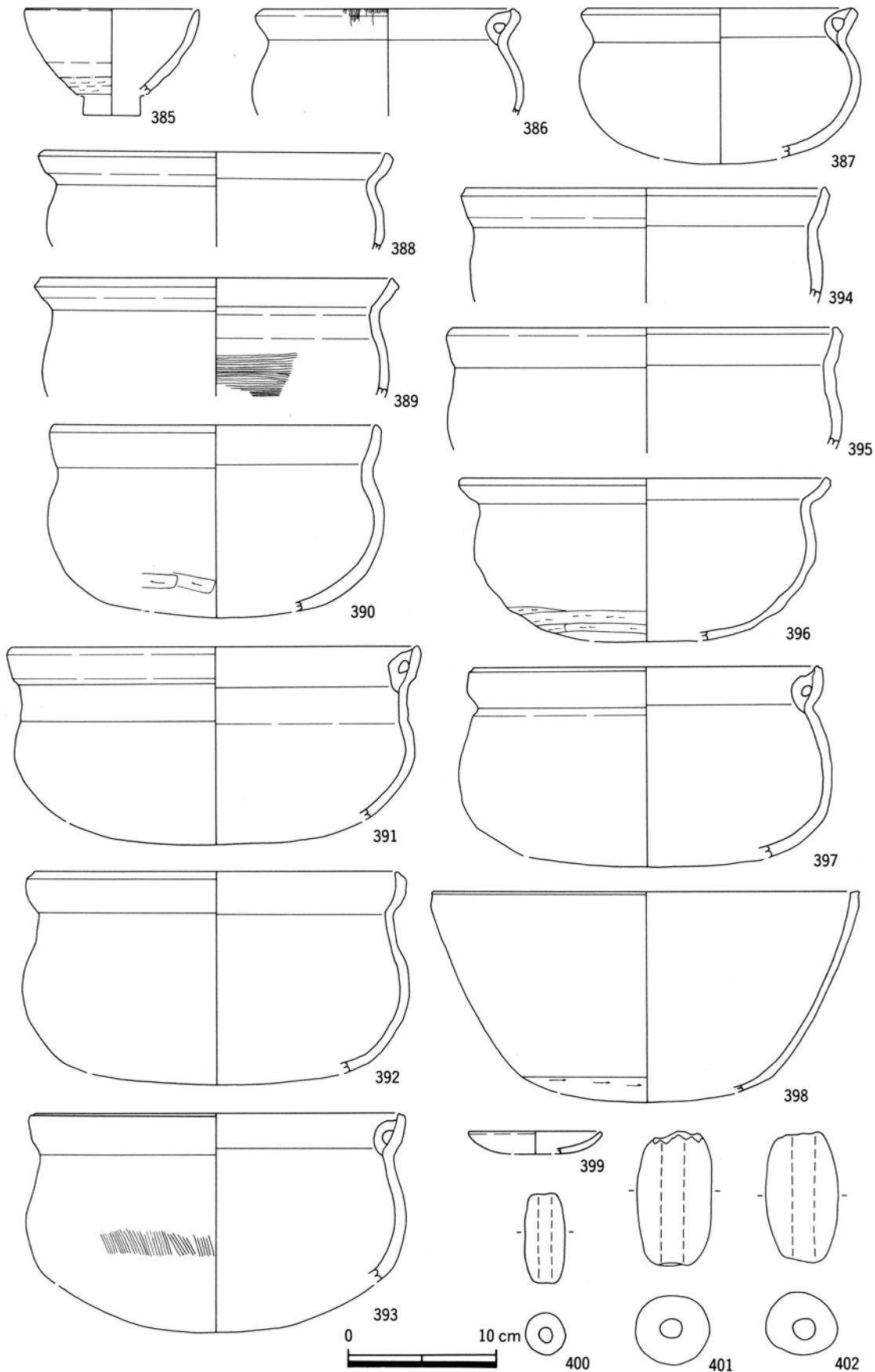


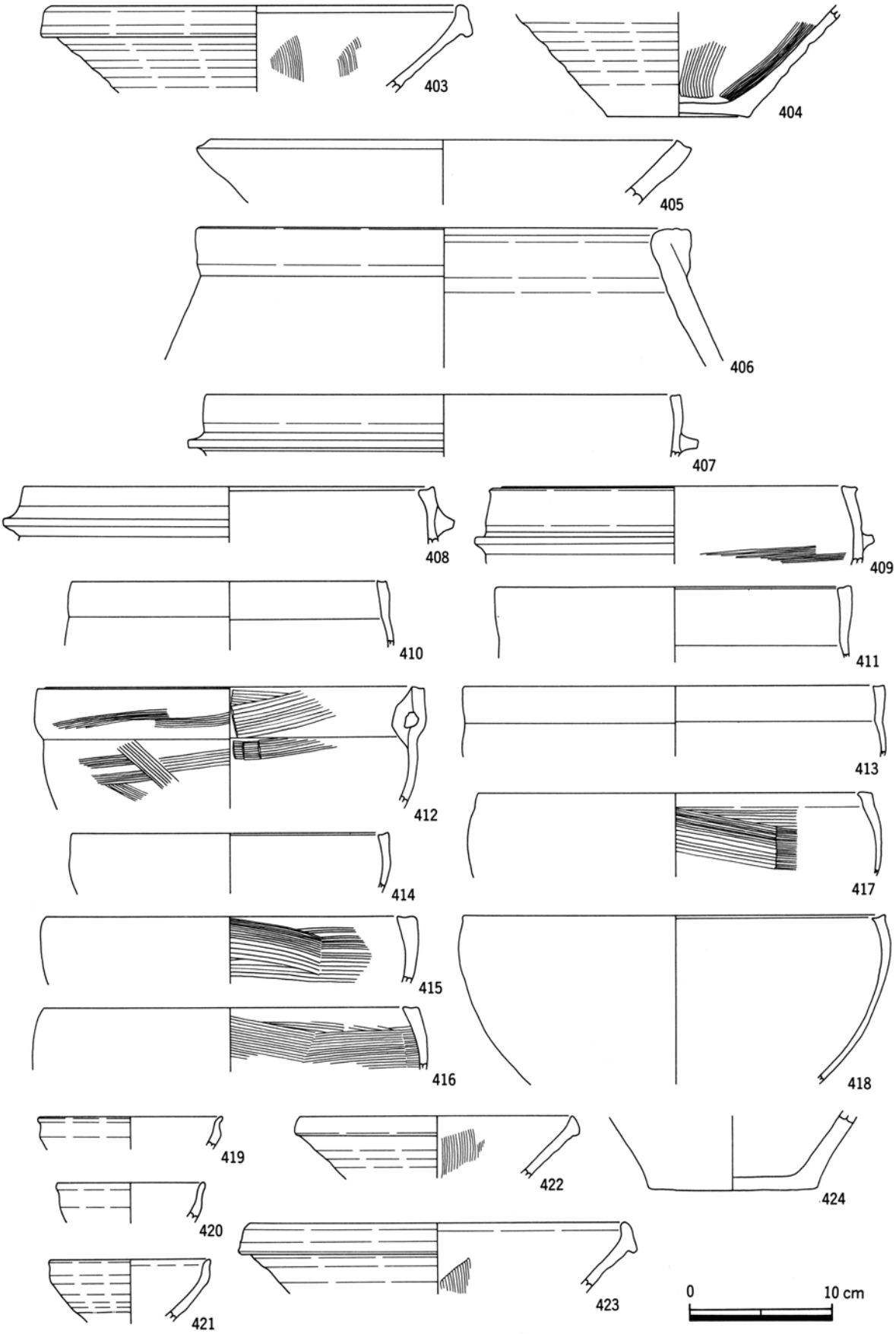


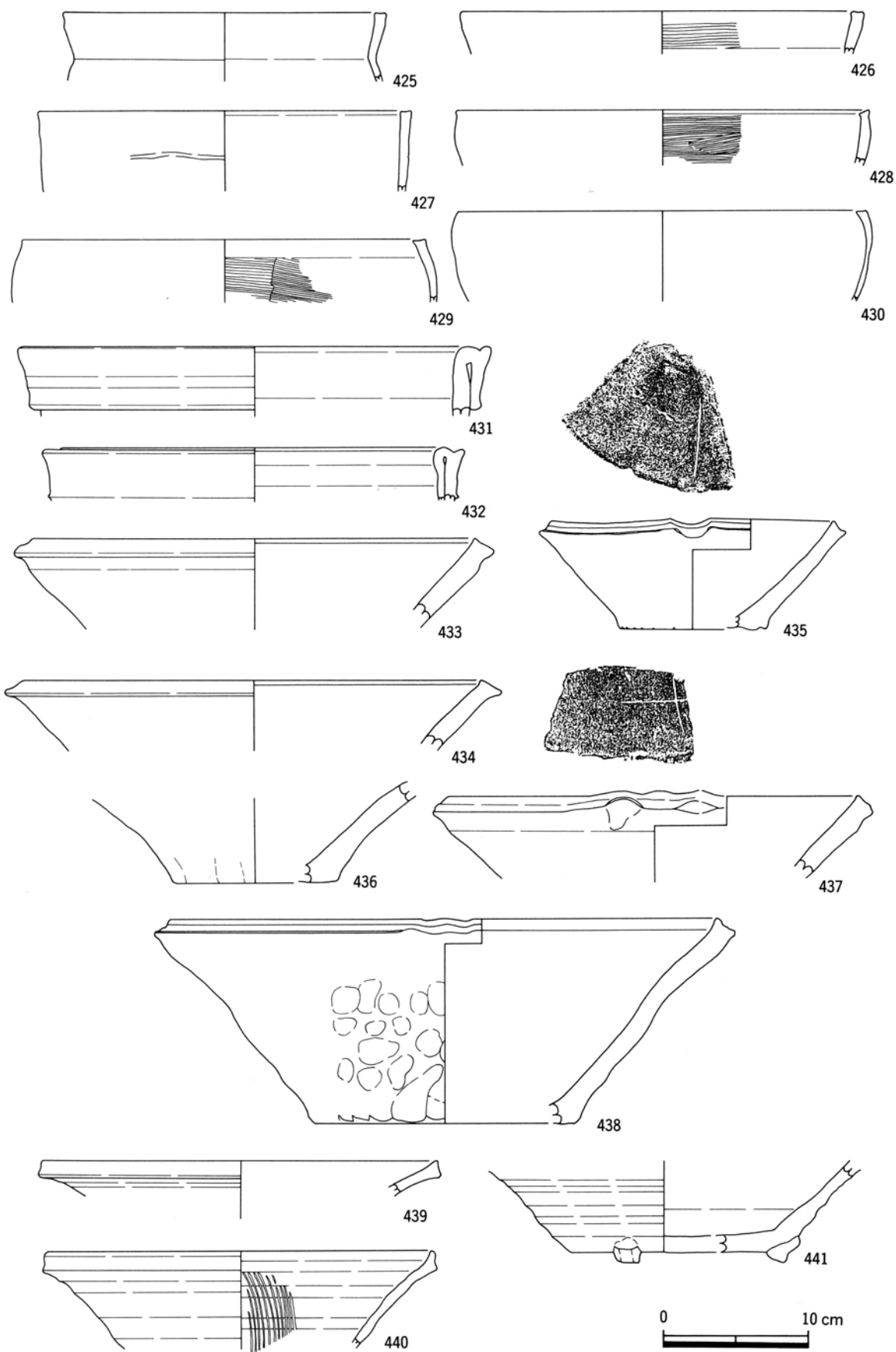


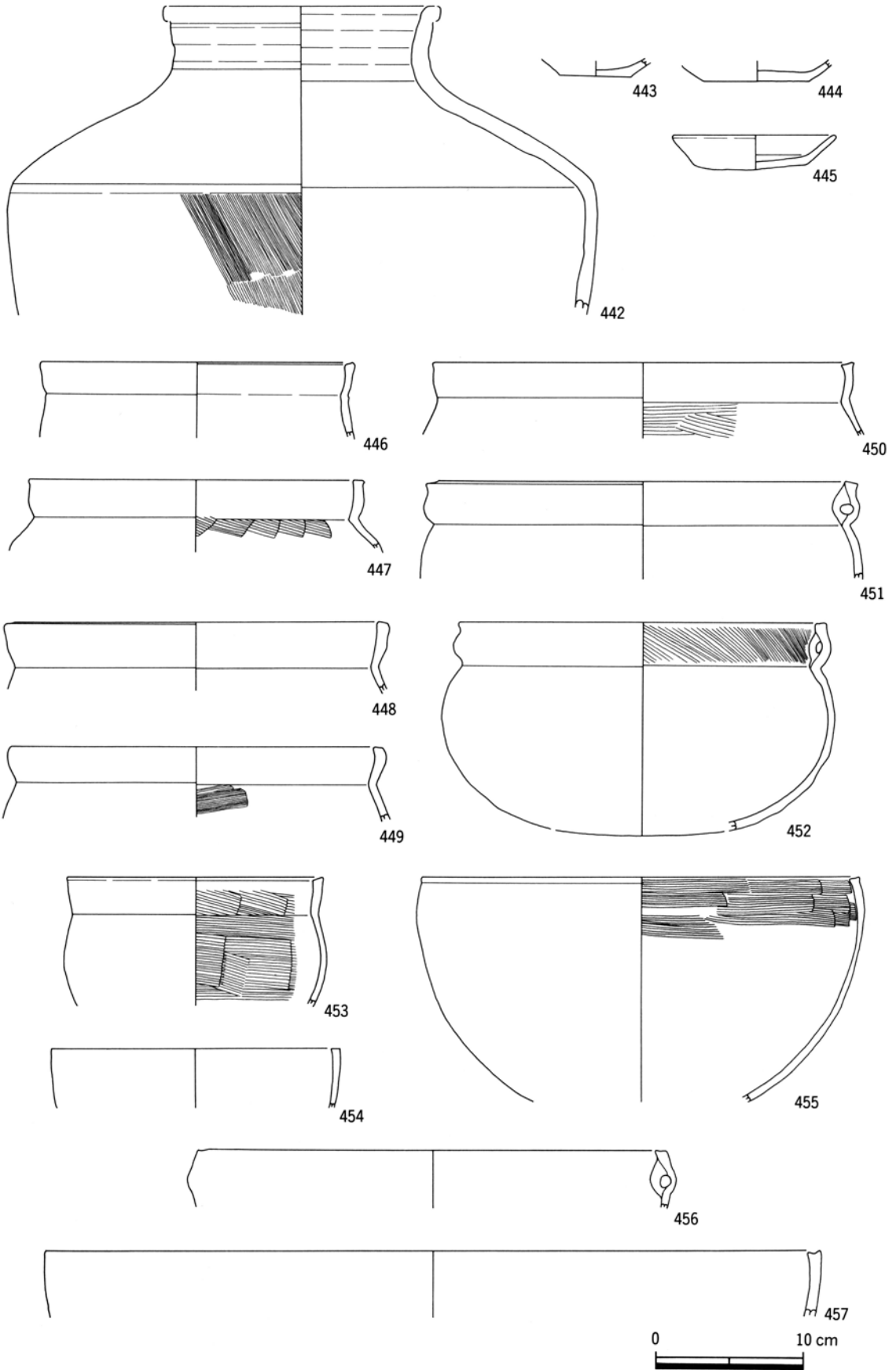


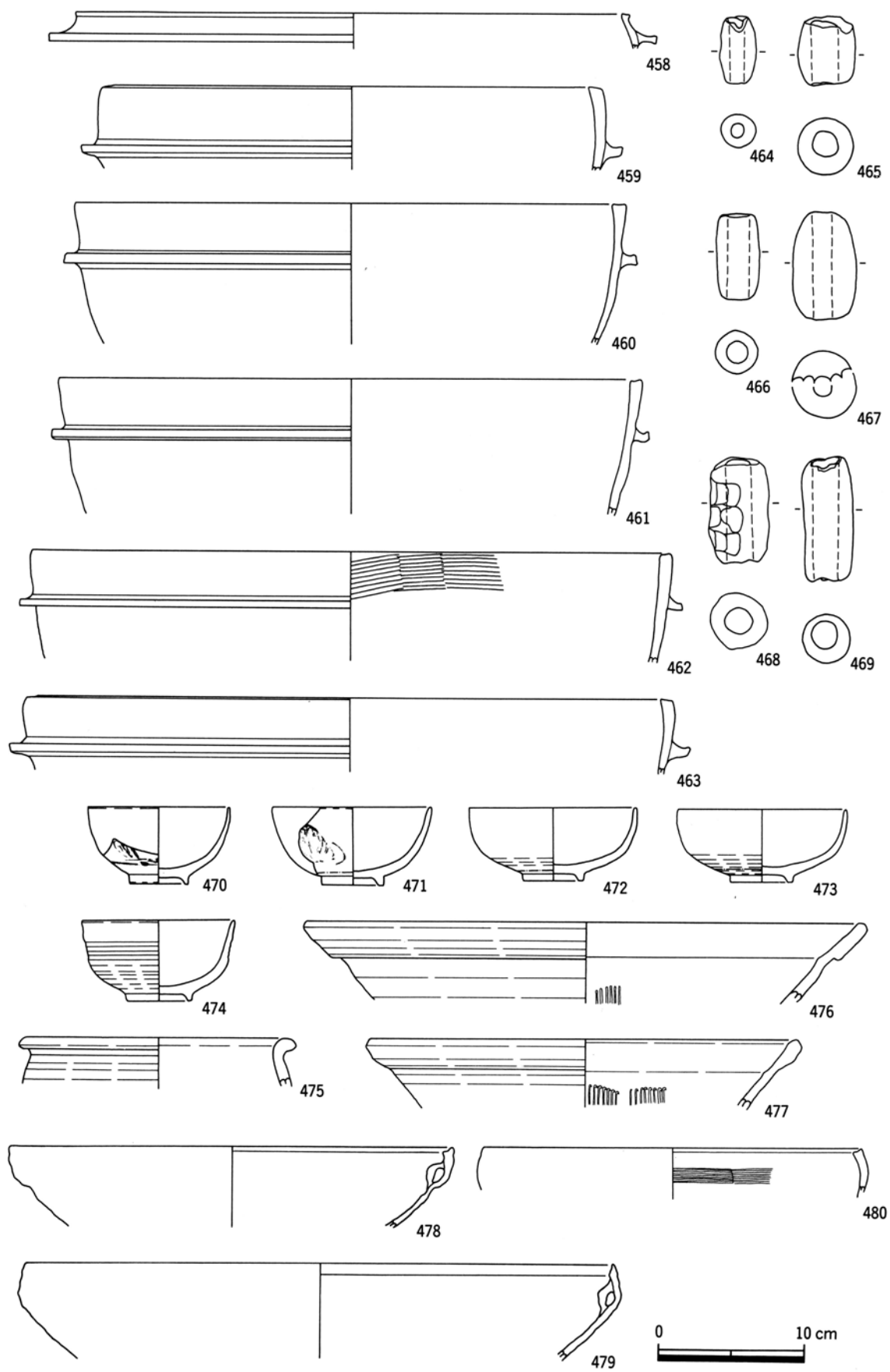


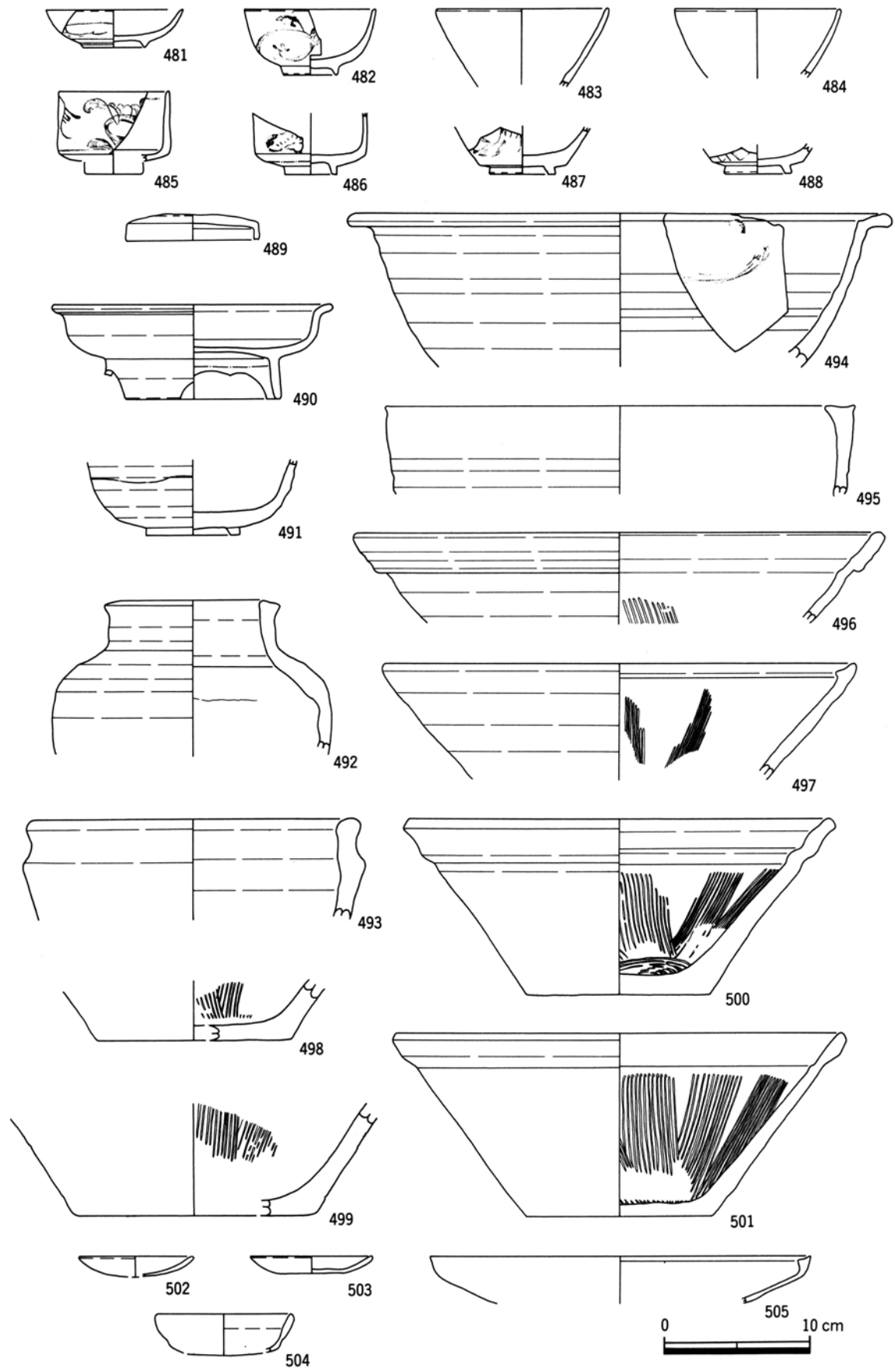






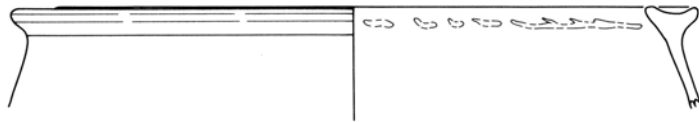




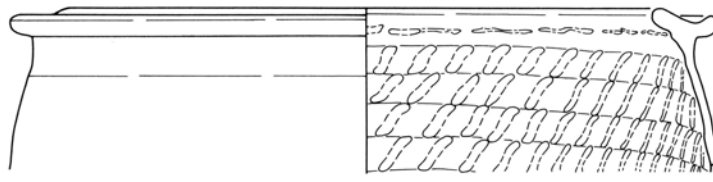




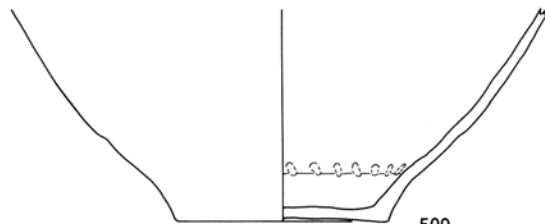
506



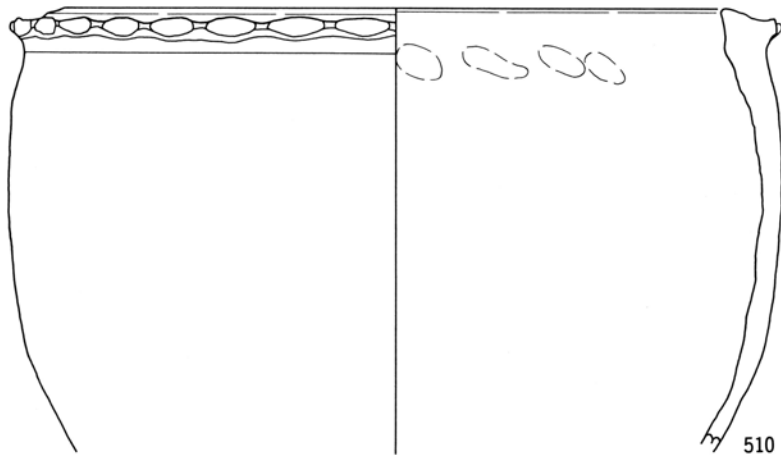
507



508



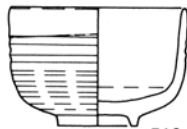
509



510



511



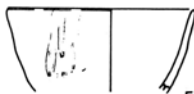
512



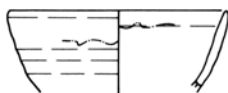
513



514



515



516



517



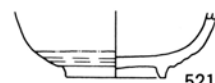
518



519

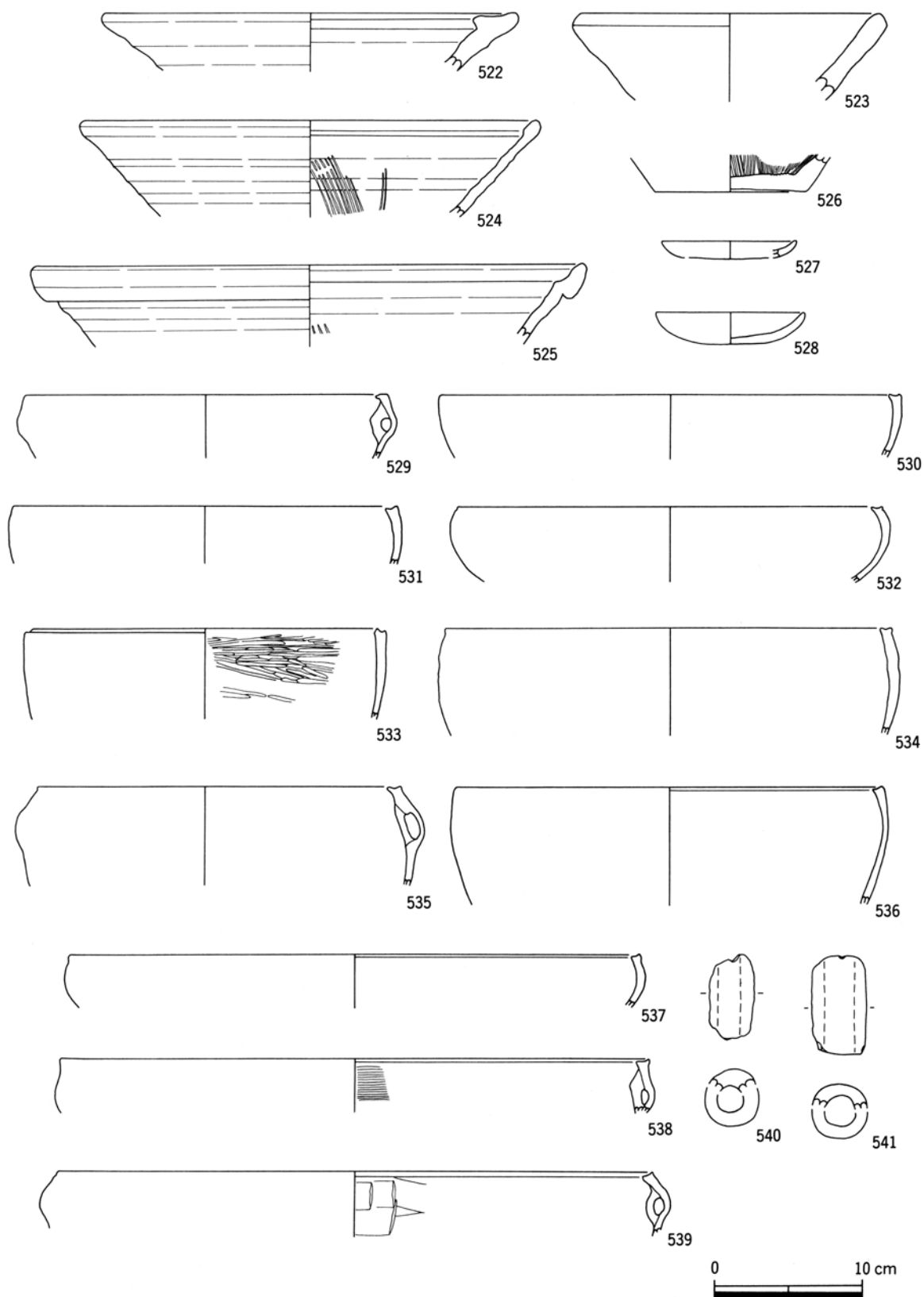


520



521

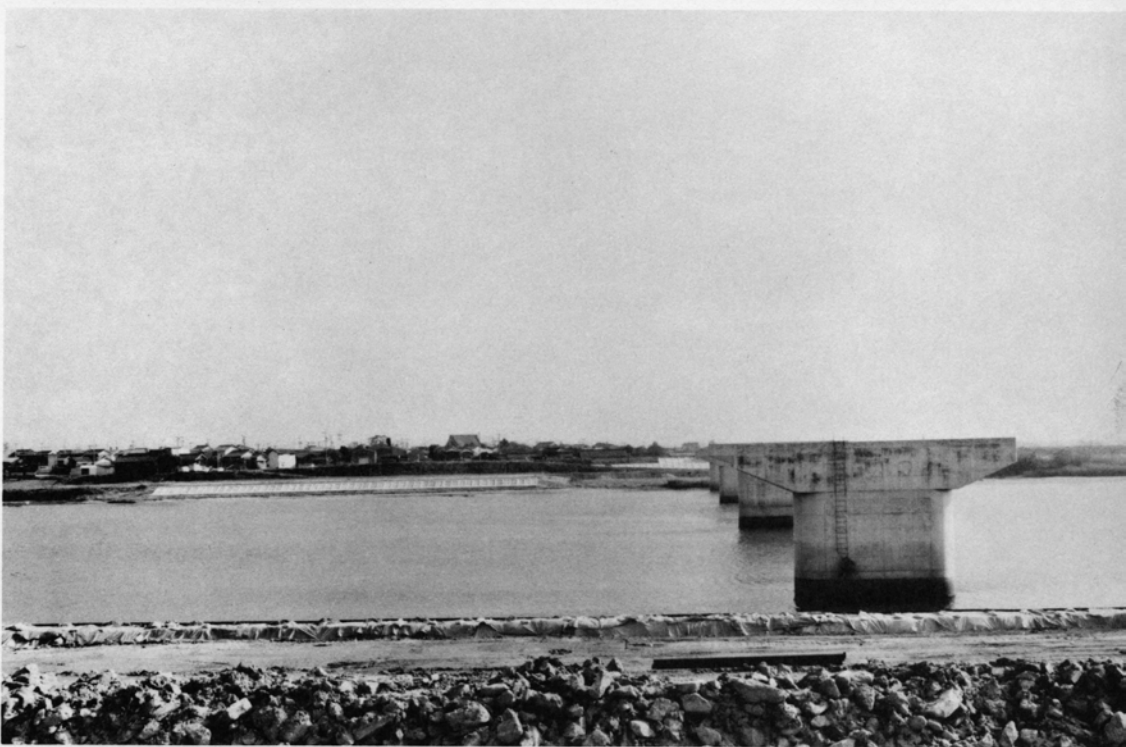




遺跡遠景
(西より)



遺跡遠景
(北より)



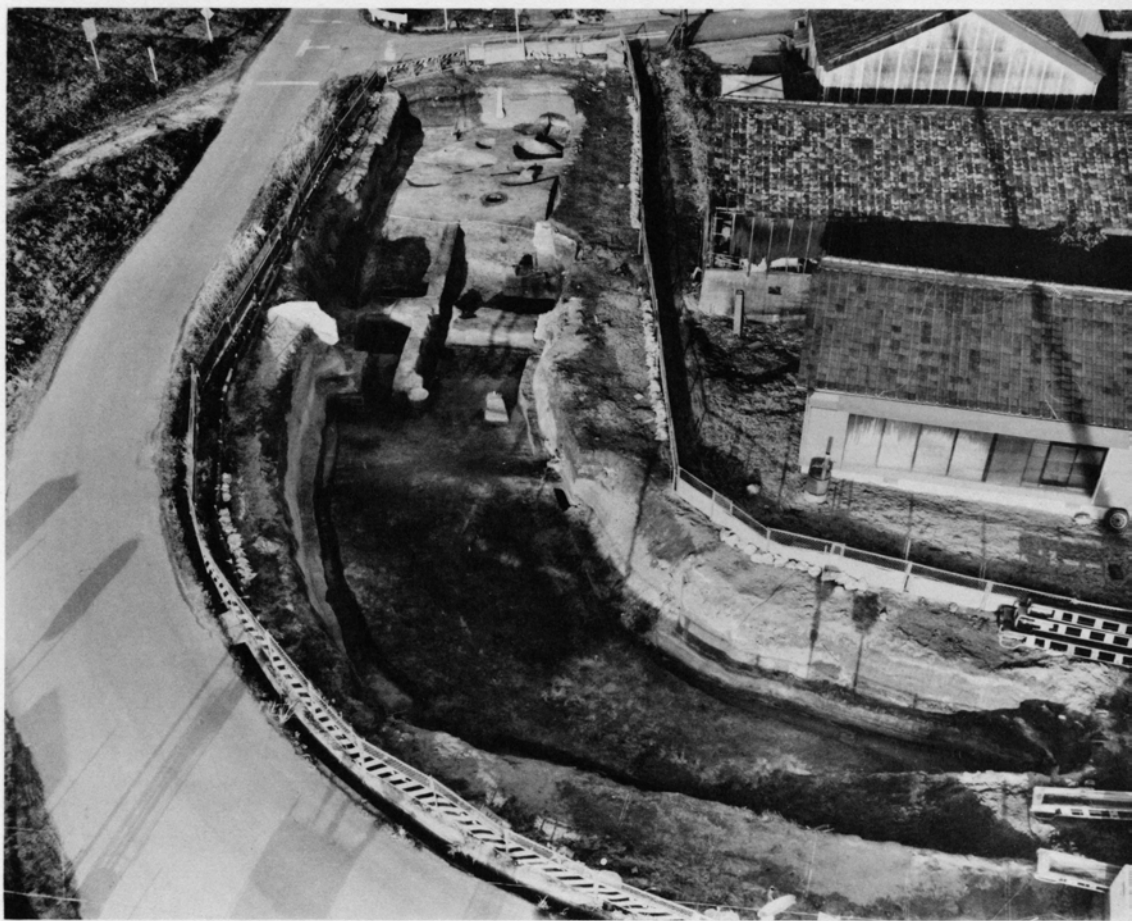
B・C区
航空写真



Aa 区全景
(北西より)



Ab 区全景
(南西より)



Ba 区全景
(西より)



Bb 区全景
(東より)



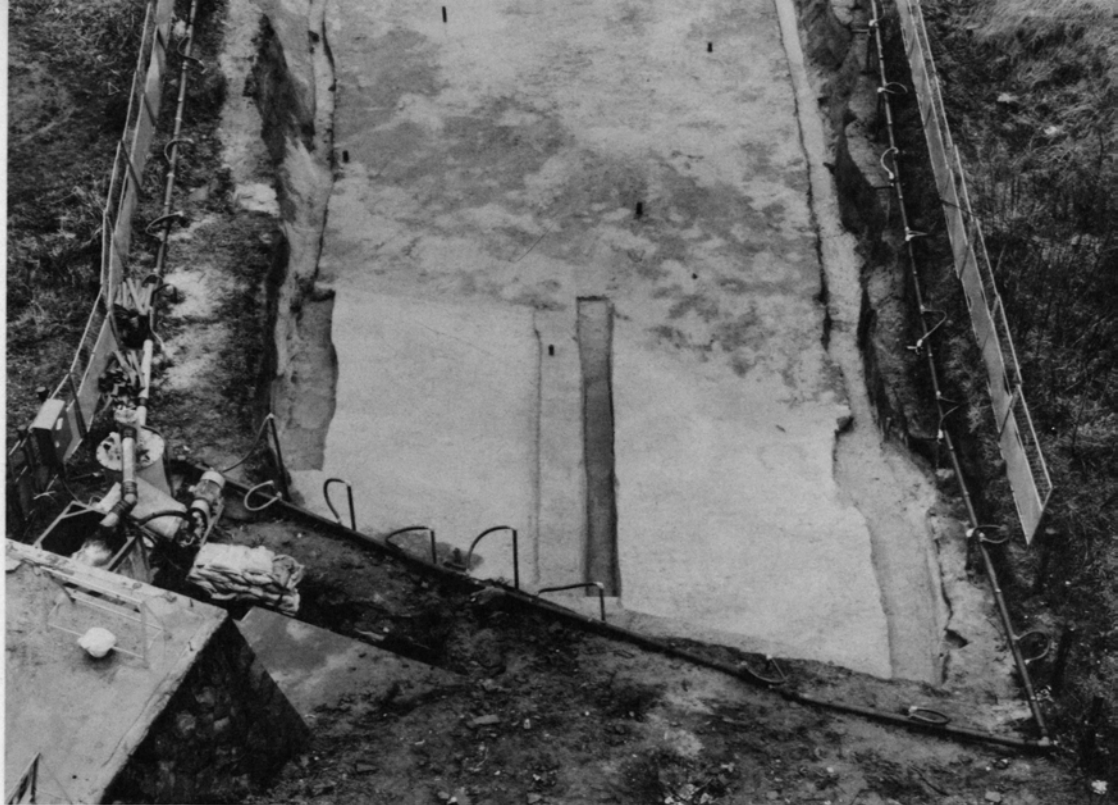
Ca 区全景
(西より)



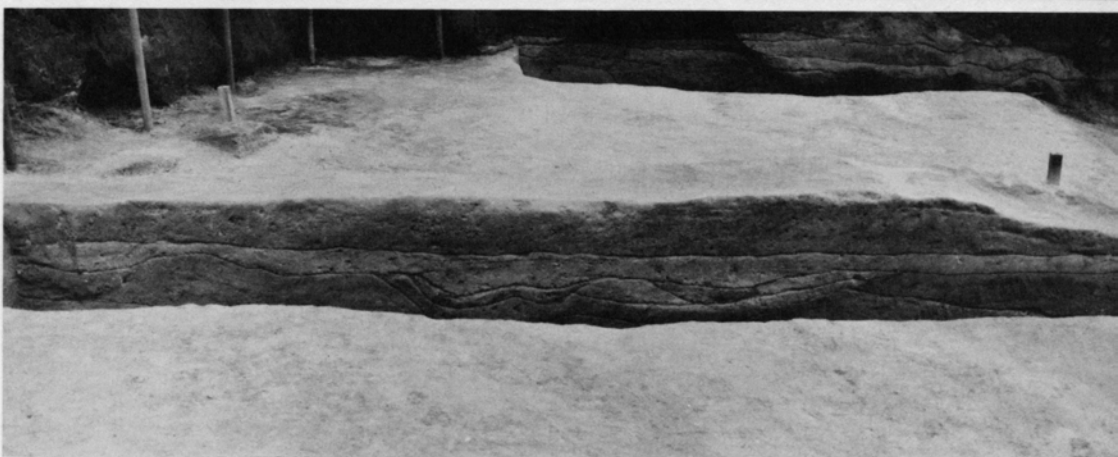
Cb 区全景
(西より)



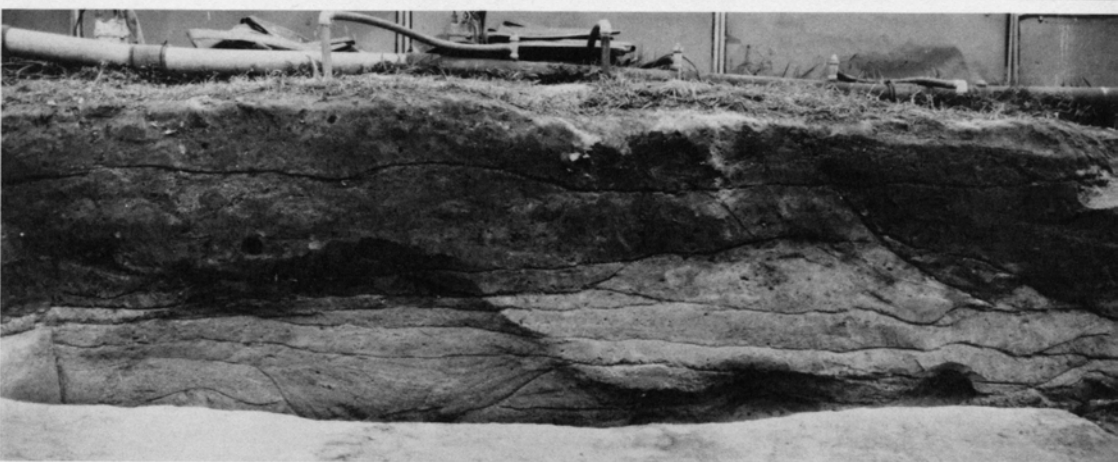
Ba 区小平坦面
(東より)



Ba 区トレンチ 01
南断面



Ba 区南壁
(小平坦面部分)



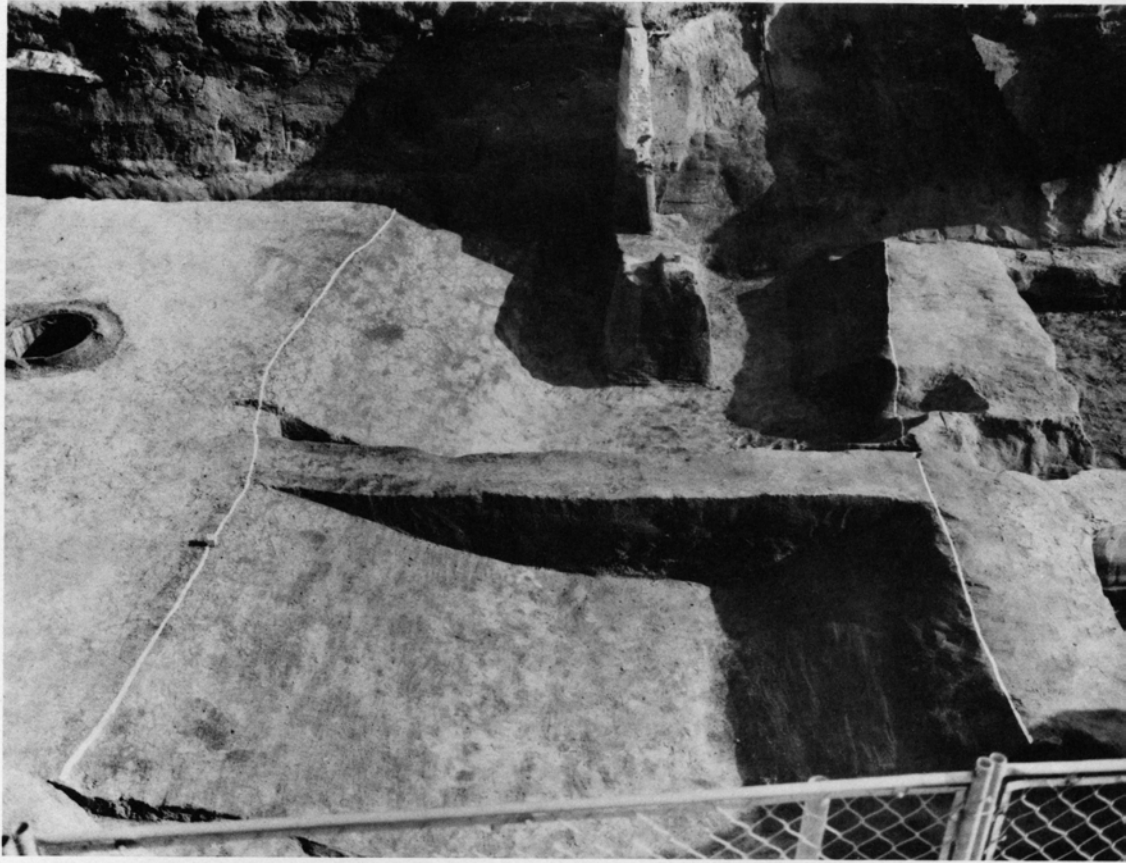
Ba 区南壁
(傾斜地部分)



Aa 区基本層序
(東壁)



SD 01
(北西より)



SD 01
西壁断面



SK 063
南壁断面



SD 02
南壁断面



SK 041・042
北壁断面



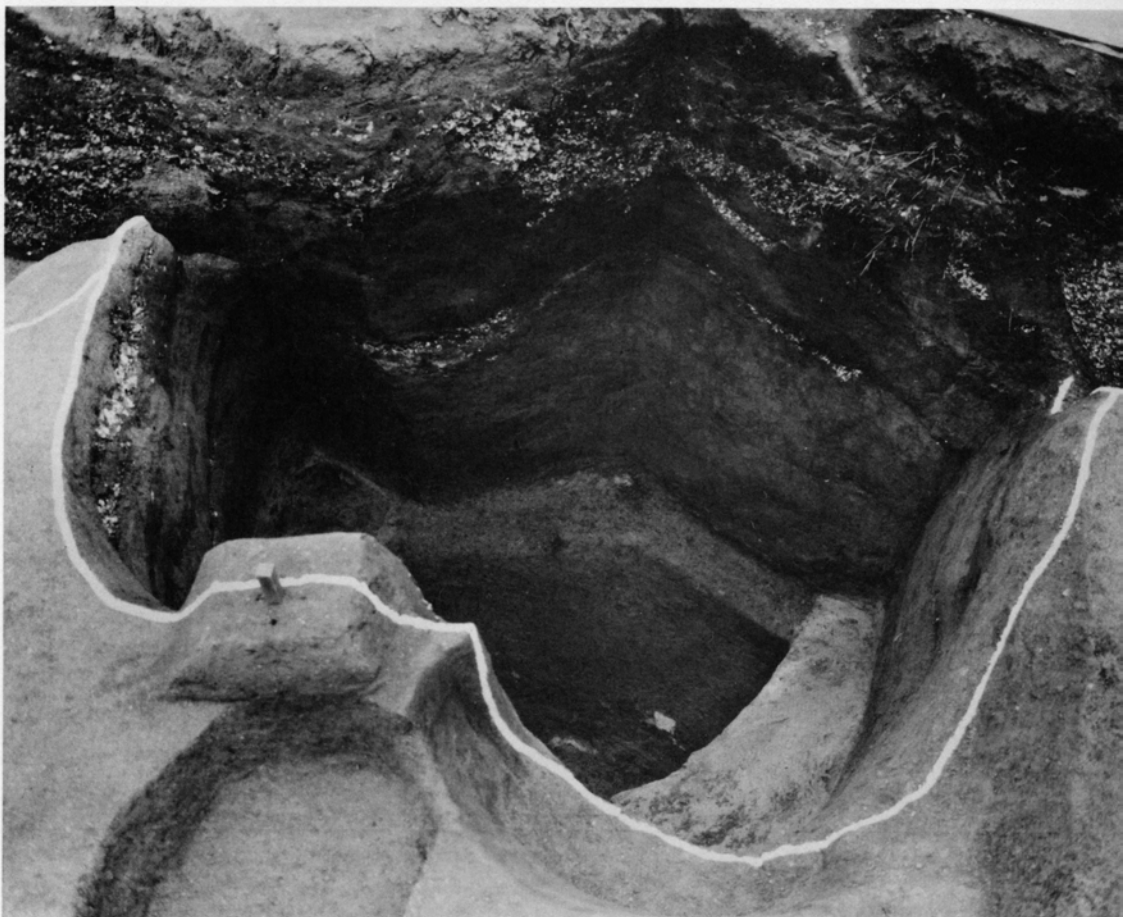
SK 062
北壁断面



SK 066
北壁断面



SK 067
(南より)



SK 067
(北より)



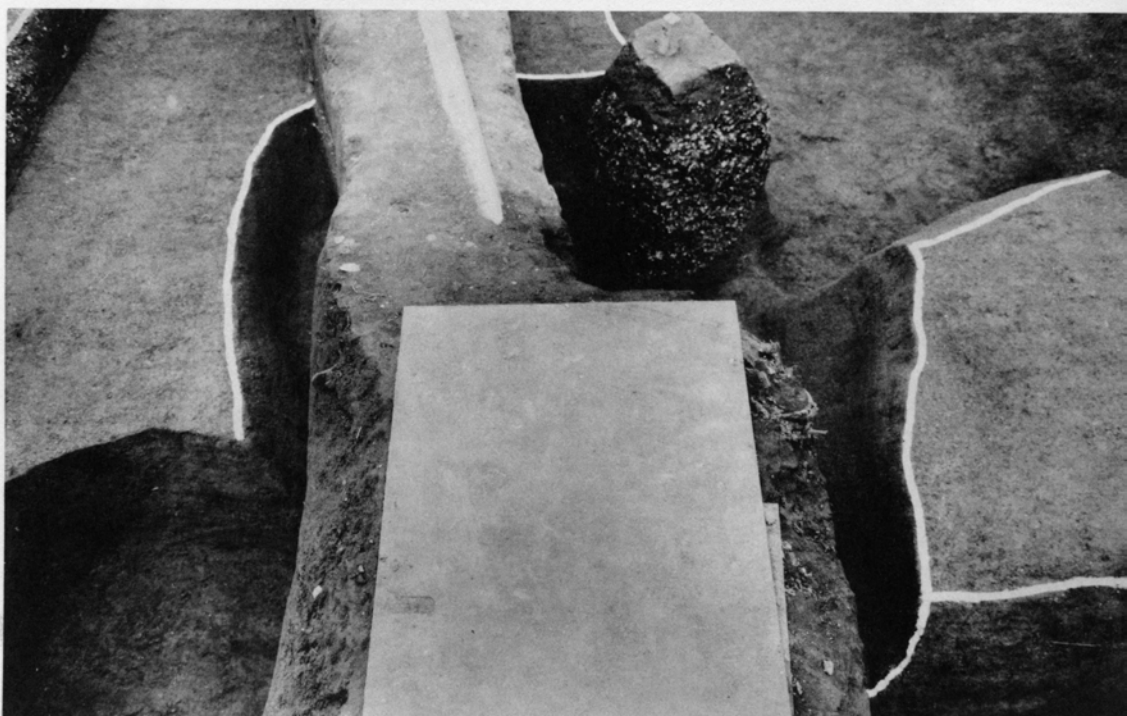
SK 069・070
(西より)



SK 069
南壁断面



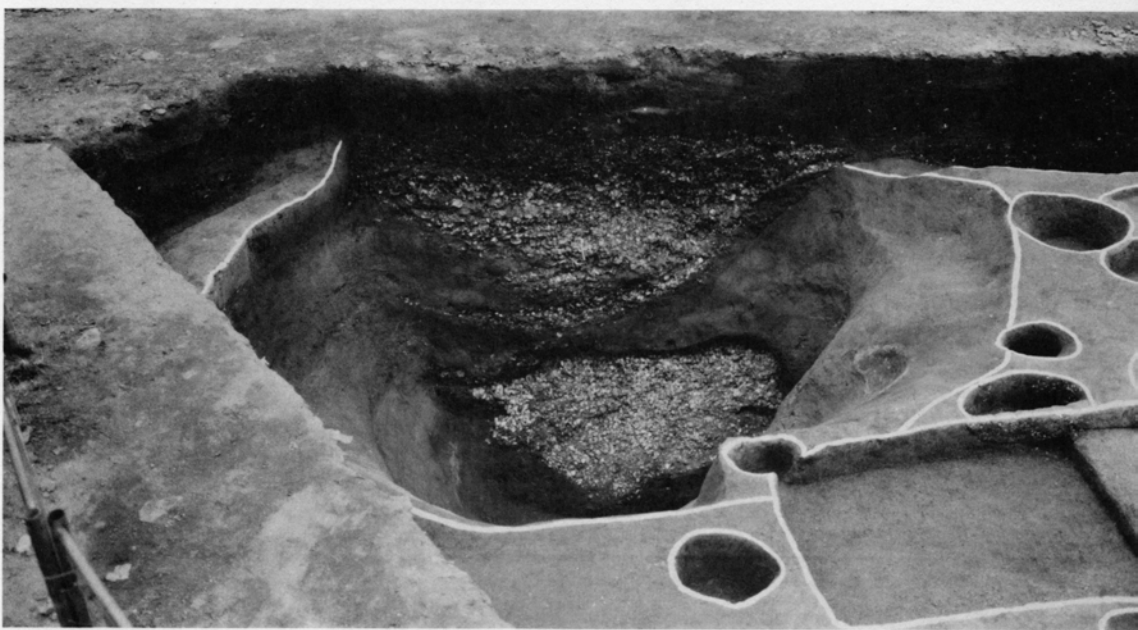
SK 068
(北西より)



SK 073
(南より)



SK 113
(西より)

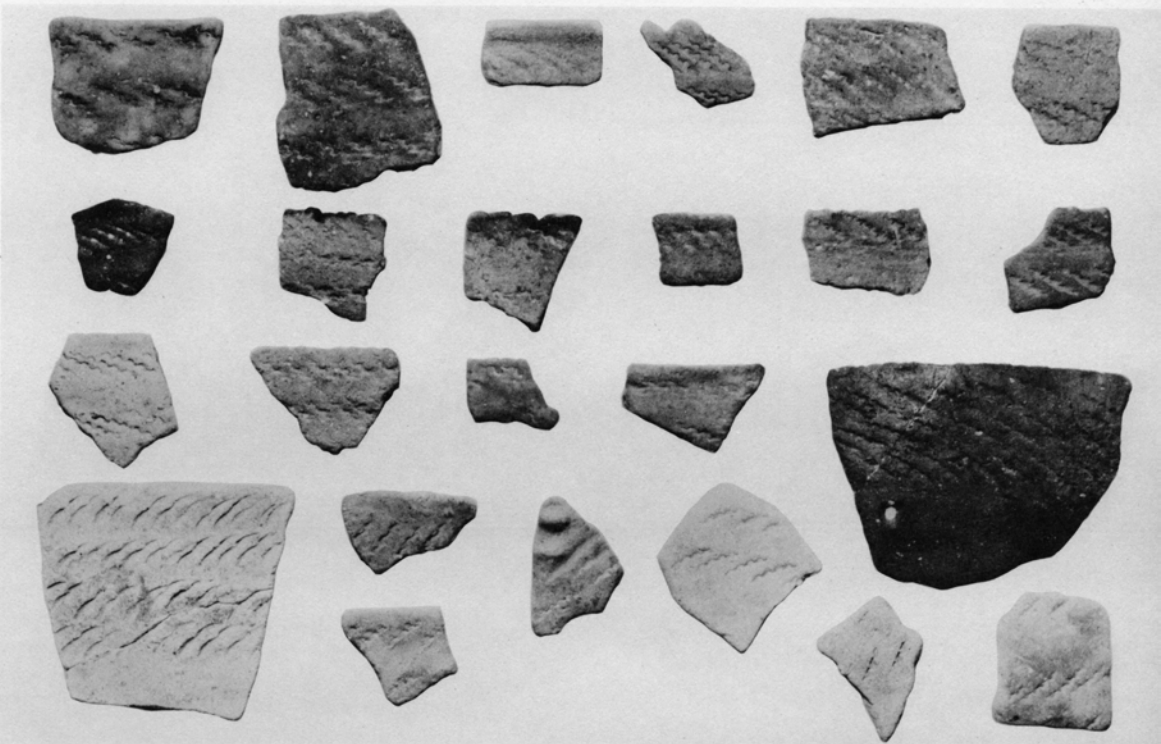


SK 113
東壁断面

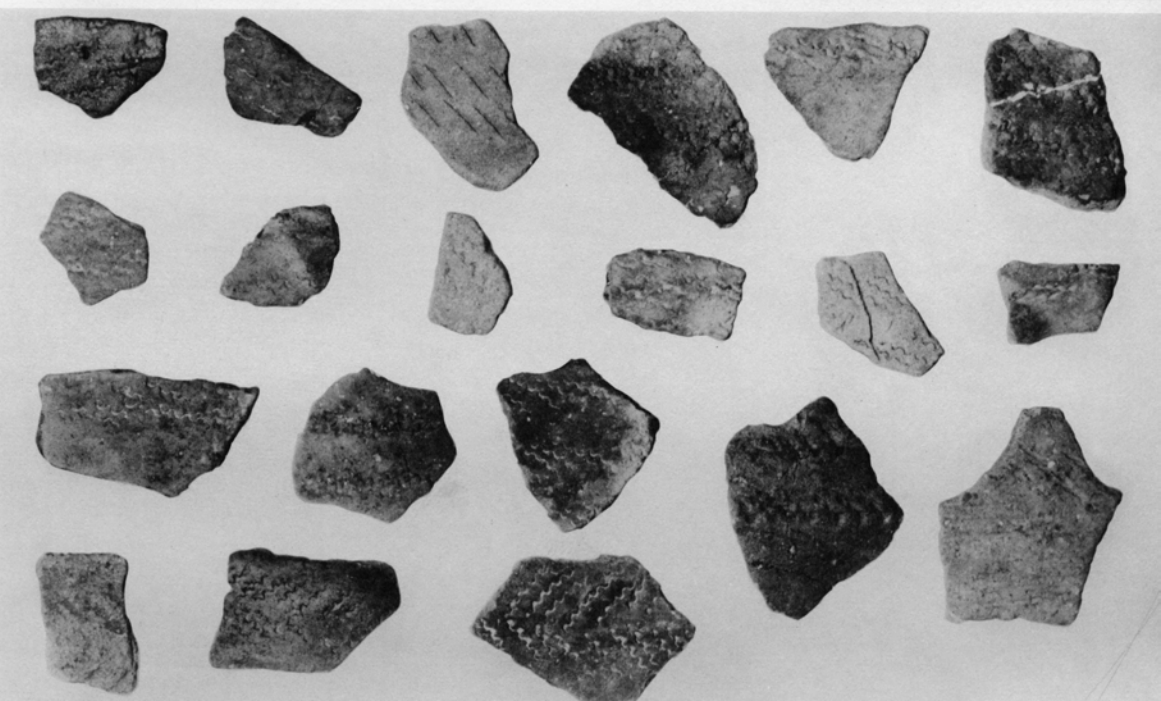




第II群 1 類



第II群 2 類



第II群 2・3 類

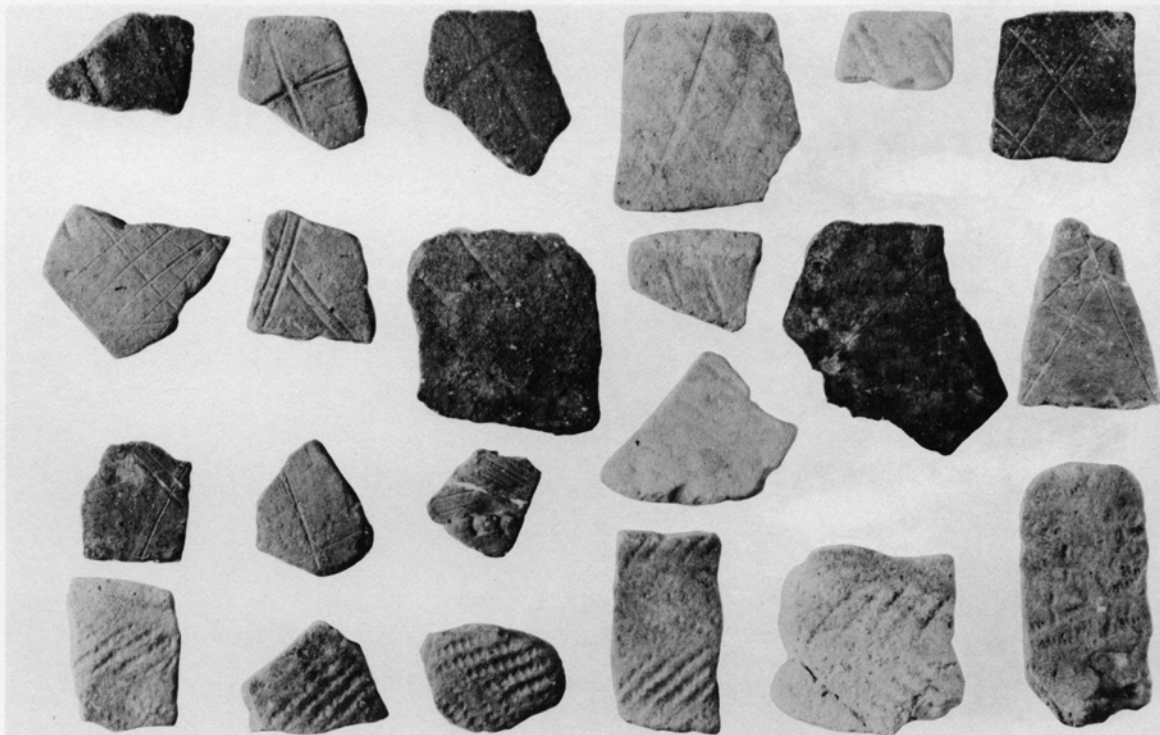
図版 39 縄文土器(2)
(縮尺 $\frac{1}{2}$)



第II群 4・5類

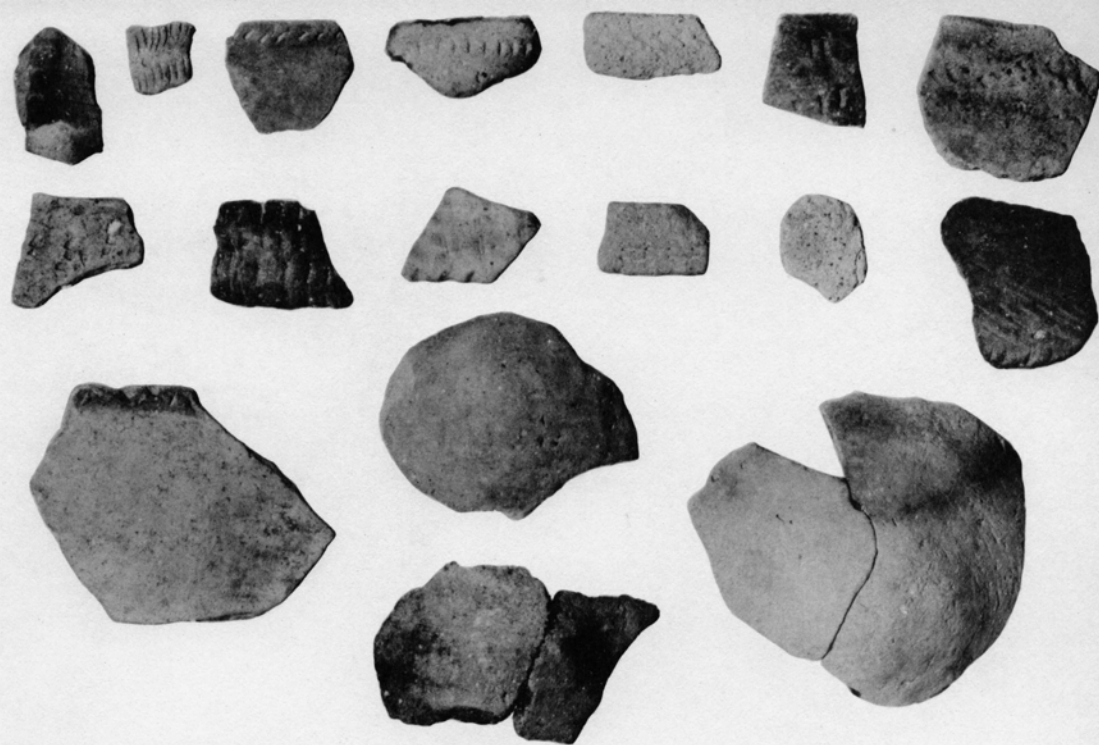


第II群 6・7・8類

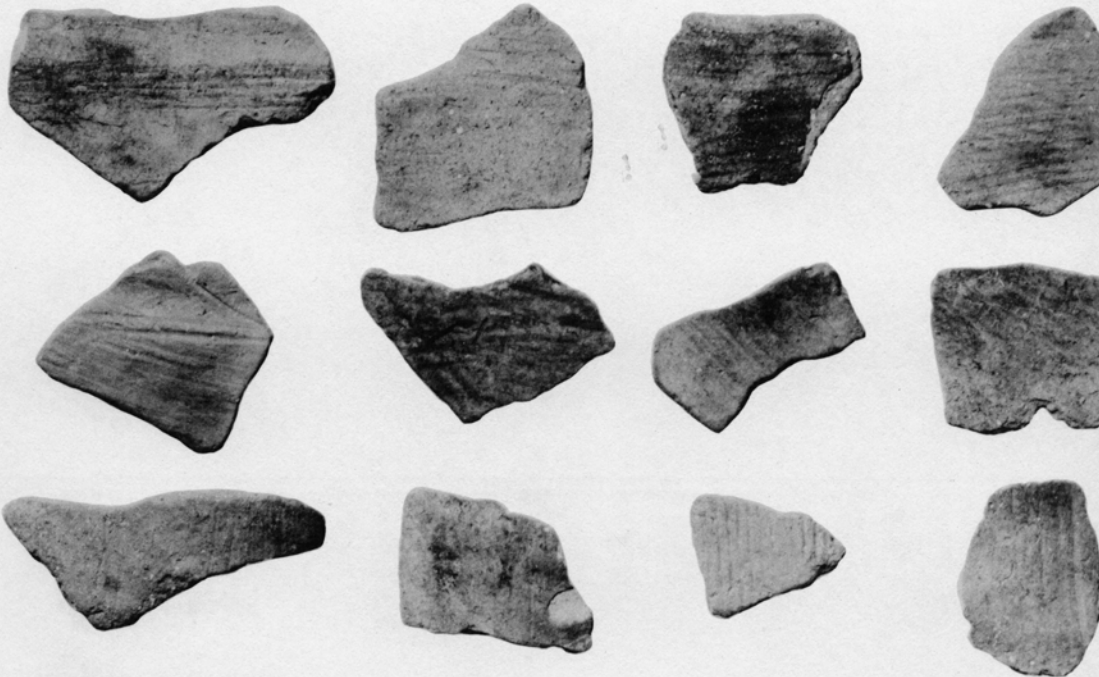


第II群 9・10類

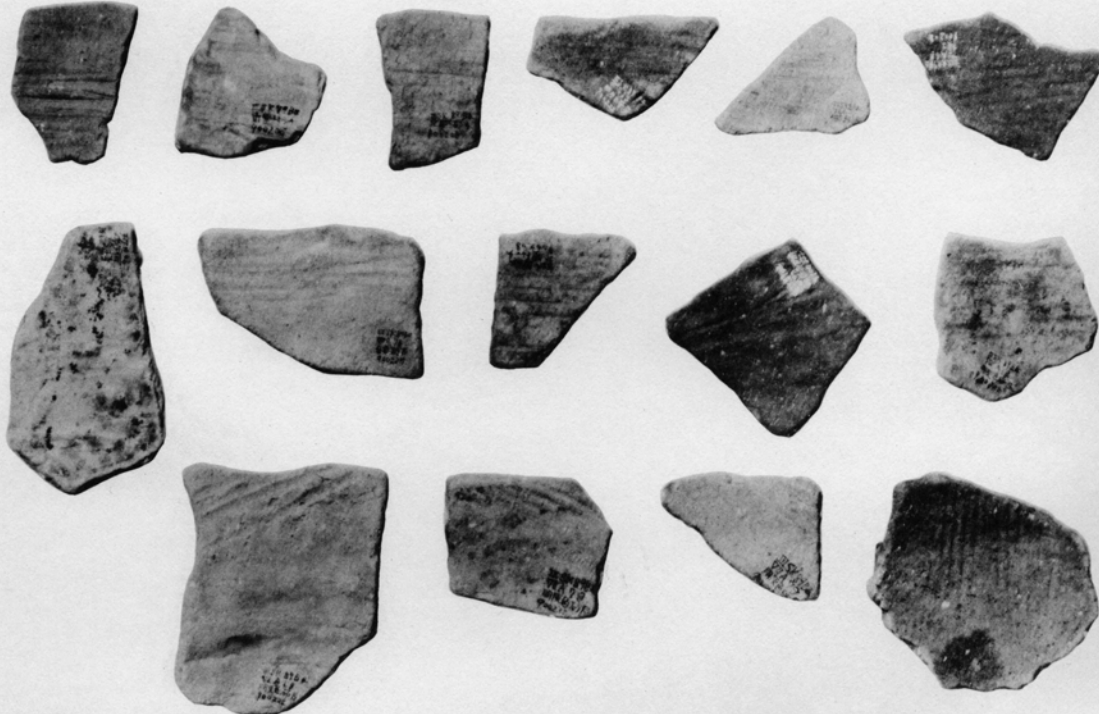
図版 40 縄文土器(3)
(縮尺 $\frac{1}{2}$)



第Ⅱ群 底部他



第Ⅱ群 外面条痕



第Ⅱ群 内面条痕

図版 41 縄文土器(4)
(縮尺 $\frac{1}{2}$)



第II群 内外面条痕
(外面)



第II群 内外面条痕
(内面)



第I群 土器

図版 42
 弥生時代・
 古墳時代
 (213~227 縮尺 $\frac{1}{2}$)



213



214



216



215



217



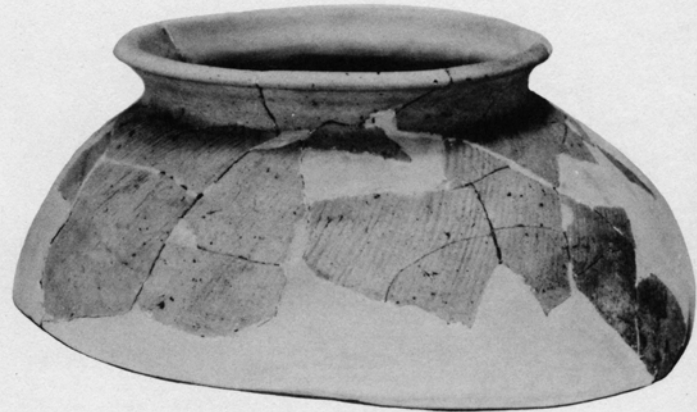
231



224



225



232



226



227



235

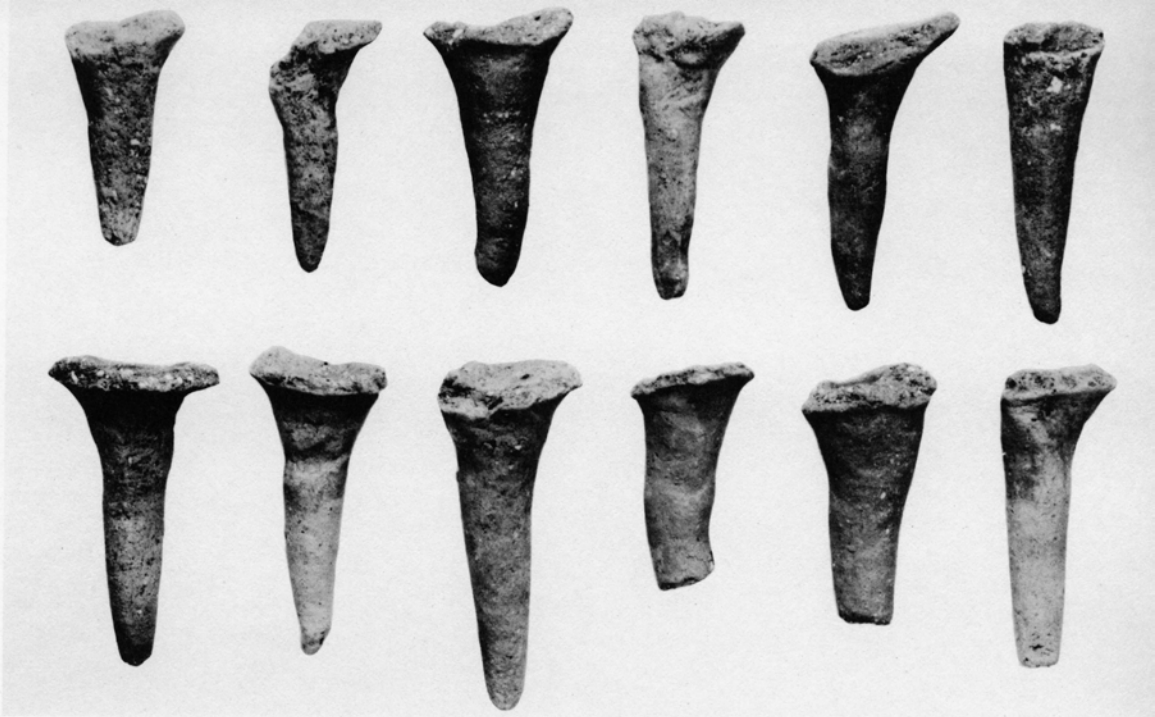


233



236

図版 43
平安時代製塩土器
(縮尺 $\frac{1}{2}$)



A 類



B・C 類



D 類



374



375



387



382



383



400



401



402



390

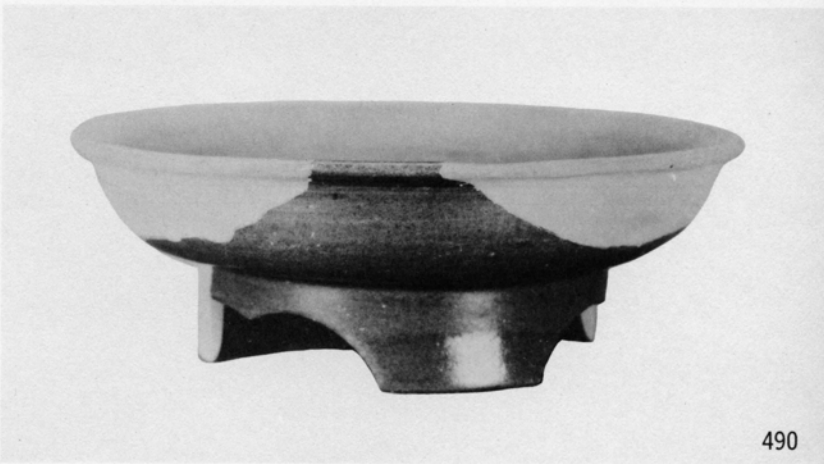
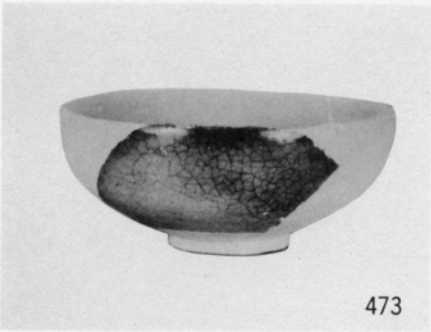


392



393





(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第25集

清 水 遺 跡

1991年 3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 (株)ク イ ッ ク ス
